

# 黒死病でどれだけの人が死んだか

——現代の歴史人口学の研究から——

石 坂 尚 武

## 目次

### 第一章 従来の学説と総括的展望

#### 第一節 はじめに

#### 第二節 従来の死亡率の算出の傾向

#### 第三節 ベネディクトーの考え方のポイント——「隠れてしまったもの」を「あぶり出す」——

#### 第四節 「見えざる貧民」

##### (一) 流民等の人びと

##### (二) 「標準想定」

#### 第五節 貧民の存在は重視されるべきである——劣悪な生活（住居・食糧）は貧民の死亡率を高めた——

##### (一) 都市の貧民

##### (二) 最下層の貧民が置かれた状況——住居と食生活——

##### (三) 富裕層市民の生活と疫病への対応

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でとれだけの人が死んだか

(四) 貧民層と富裕層の財力と生活の格差

第六節 農村における疫病の被害——農村での多大な疫病被害——

(一) 農村の貧困さ

(二) ベストに好まれた農村

(三) 農民の住居

第七節 黒死病による階層変動

(一) 農村部における階層変動

(二) 都市部における階層変動

第二章 都市と農村の苦難——各地域の死亡率(各論研究)——

はじめに

第一節 イタリア——トスカーナ地方とピエモンテ地方——

(一) トスカーナ地方

フィレンツェ シエナ プラート

(二) ピエモンテ地方——スーザ渓谷の村落群——

第二節 スペイン——ナバラ王国とカタルーニャ地方——

(一) ナバラ王国

(二) カタルーニャ地方

第三節 フランス——旧プロヴァンス伯領、旧サヴォア伯領その他——

(一) プロヴァンス伯領

(二) サヴォア伯領

ウジス村の五教区の場合 シャンベリー近郊の教区——薪集めの許可料の台帳から—— モンメリアン近郊の教区——橋の通行税台帳から—— モーリエンスの農村——サン・ミシエル、サン・ジュリアン、グルニ——

(三) その他の地域

アルビ サン・フルール

第四節 スイス——ヴァレー地方の共同体（モンテイ、トロアトラン、コロンベイ）——

第五節 ベルギー

第六節 イングランド

「土地を持たざる男」(landless men) 最下層民と階層変動 司祭の死亡率

第三章 地域研究の総括的展望に対して——批判と評価——

第一節 批判——女性は疫病に弱かったか——

第二節 疑問

(一) 残された地域と共同研究の必要性

(二) 「標準想定」の想定の問題

第三節 評価

注記

・略記「石坂史料集」の明細は本稿末尾の「付録」に示した。

・引用文中の太字はすべて引用者による。

・掲載した写真はすべて筆者が撮影したものである。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

## 第一章 従来の学説と総括的展望

### 第一節 はじめに

一三四八年の黒死病（ペスト）でヨーロッパの人はどれだけ死んだのだろうか。

これは非常にむずかしい問題である。黒死病については、現在日本で使われている高校の教科書は、その扱い方や関心はまちまちであるが、このペストで概してヨーロッパの「三分の一」の人びとが死んだだろうと書かれている<sup>(1)</sup>。実際のところ、これは、学界の通説に沿った数値である。現在、学界ではペストの死亡率は、「三分の一」、あるいは、少し控えめに「四分の一」で通っている。權威的な書物を見ると、二〇〇一年にニューヨークで再版された『疫病百科事典』（G・C・コーン監修）（英語）でも、「死亡率は、ヨーロッパとアジアの人口の四分の一から三分の一の間である」としている<sup>(2)</sup>。また、研究者ゴットフリートは、死亡率の幅広い地域差（スカンジナビア半島・イタリヤのトスカナ地方の「五〇パーセント」の死亡率、ボヘミア、ガリシアの「一五パーセント」の死亡率）の平均を取ったかたちで説明している。さらに、黒死病の流行を目の当たりにした当時の年代記作家の記述にも「三分の一」という死亡率が認められる<sup>(3)</sup>。

しかし、実際には、その通説はあまり科学的、学問的根拠があるわけではない——実は、それは、ヨーロッパの疫病の歴史の研究者の知性を結集させた成果によるものとは言えないのである。実際のところ、はるか遠い一四世紀という中世末と初期ルネサンスの時代において、当時の人口を伝える史料となると、あまり多くないのも事実である。



そこでこの重大な問題について「憶測」や「勘」でものをいうことがまかり通った。

つまり、次のような勘や憶測が支配する判断がなされた。すなわち、たまたま史料が残された地域——都市が多い——の場合には、人口の五〇パーセントから、時に六〇パーセントを越える高い死亡率が認められるのは確かだが、しかし、史料の残されていない多くの地域については、さほど黒死病の被害がなかっただろうと、そのように憶測して判断がなされたのである。それはちょうど刑法に適用される「疑わしきは罰せず」の論理とどこか似ている。しかし、それを歴史学に適用するのは、筋違いではないか。結局、こうした判断から、ヨーロッパ全体を押しなべて見ると、死亡率は薄められて、全体の「二分の一」には遠く及ばず、せいぜい「三分の一」から「四分の一」程度の死亡率が打ち出されたのである——それどころか、研究者のなかには、大胆にも「二〇分の一」という死亡率まで打ち出す者も出て来るほどであった<sup>(4)</sup>。恐らくそれは、「三分の一」という死亡率そのものがあまりに衝撃的で、あまりにセンセーショナルな性質を帯びていると思われるので、それを薄める見方の方が、冷静で科学的、学問的な態度を示すものと思われたからであろう。

だが、ここには問題がある。つまり、ここでは、史料によって実証されたものを考慮して判断がなされたわけではないのである。つまり、ここでは、史料のない「未知の部分」に対しては、黒死病の影響力をマイナスに（つまり否定的に）見積もり、一方的に死亡率を割り引いたのである。これは決して科学的な判断とはいえない。この判断に作用したと考えられる三つの推測がある——その推測とは、第一に、黒死病は、都市に比べて農村や山間部にはあまりやって来なかっただろうという推測、第二に、黒死病は農村部に来ても農村では人がまばらなので、死亡率はあまり高くなかったであろうという推測、また、第三に、第二の憶測の結果として、人口比からすれば、都市よりも農村部

黒死病でどれだけの人が死んだか

の方がずっと多く、全体の死亡率はずっと薄められるだろうという推測である。そう推測しながら、それでいて、決して農村部の史料を探そうとしなかったのである。「勘」を実証する気もなかったのである。

ところが、一九五〇年頃以降、一部の研究者によってペスト史研究は新しい段階を迎えた。ミラード・ミースのよいうにペストが美術様式や精神構造に与えた強烈な影響が説得力をもって追究される一方で<sup>⑤</sup>、ペストについて地方史研究が精力的に展開されたのである。ここには、有力なペスト史研究者のほかに、大学で学んでから地域で史料研究を展開する多くの地方史・郷土史家の存在があつた。彼らは地域の古文書によって実証的、個別研究に向つた。さらに追い風として、二〇世紀の学問の新しい傾向として、社会的な関心（「英雄」ではなく「一般人」を歴史の主役と見る立場）と、それと深い関係をもつて二〇世紀半ばに誕生した歴史人口学（現代の人口問題等が作用）の研究の発展が作用した。こうして、従来から支配的であつたマルクス主義的歴史学などの演繹的な見方（原理中心の見方）や事件史（政治史）中心の見方から訣別した、新たな学問的傾向も生まれたのである——つまり、先入観なしに、個々の史料や現象に注視する個別的な学問傾向が強まり、それはしばしば現実的（歴史的）で豊かな事例研究を生み出したのである（——そして、その「個別研究」は今や「全体（総括）研究」を待っていた）。

しかしながら、ヨーロッパの様々な国の地方史研究によって蓄積された豊かな「個別研究」は、その論文が地方の小さな雑誌に掲載されたせいでも、あまり学界から注目されないことが多かった。しかし、ようやくここにおいて、意識的に、それも極めて意識的に、個別研究を集約して、「全体（総括）研究」を目指す研究が現われた。そして、地方で発表された数多くの個別の地方史研究をほとんどくまなく目を通して、さらにそれを批判的に検討して、一三四年頃のものヨーロッパの黒死病の全貌を見る研究が現れたのである。それが、O・J・ベネディクトー（ノルウェーの

オスロ大学教授)の研究(二〇〇四年)である。ベネディクトーはこう言っている――

今日に至るまで、研究者は概してほんのわずかな都市の史料やイングランドの教区司祭の死亡者数という、かなり不十分な根拠にもとづいて、黒死病がヨーロッパの三分の一か四分の一の人びとを死亡させたと、そのような全般的な推定をおこなってきた。しかし、二〇世紀の最後の四〇年間にめざましい数の新しい研究が出版され、その成果は、黒死病が及ぼした人口学的影響を評価するのに極めて新しい機会を与えてくれたのである。そうした研究は、注目に値する、驚異的ともいえる成果をもたらしにくれたのである<sup>(6)</sup>。

ベネディクトーがその著書で扱ったヨーロッパ諸国の黒死病関係の専攻論文・著書は、総数三〇〇点に及ぶもので<sup>(7)</sup>、それは目を通すだけでも大変な労力である。それらをひとつひとつ点検することは、これまで誰も挑むことがなかったことである。言語的(語学的)な問題だけに關しても、これは驚くべきことである。なぜなら、各地域の世の難解な一次史料も含め、ヨーロッパには数多くの近代言語が存在し、そうした言語的障壁を越えた上で(若干の表記・数値のミスはあるにしても)ほぼ全容を展望し切ったからである。

その著書は、小さめの活字で四五〇頁を越える英語の大著である(『黒死病——一三四六―一三五三年——』*The Black Death 1346-1353*)。そのサブタイトルは「完全な研究」*The Complete History*と銘打っている。このことばは、なかなか使えるものではない。研究で完全なものなど、どこにもないからだ。しかし、実際そのことばを使うに足る労力が払われている。この著書が扱う「黒死病」(狭い意味の黒死病、つまり一三四八年頃のペスト)の「流行の拡大」(第二部)に関しては、ヨーロッパの東西南北の全域を扱い、従来黒死病による被害が少ないとされたポヘミア、ベルギー、ポーランド、ネーデルラントにも研究のメスを入れる。そして、西欧諸国の死亡率を扱う「第四部」が本

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

書の核心部分である。それだけで一五三頁に及ぶものである<sup>(8)</sup>。その「第四部」で独立した章を設定して詳しく考察を展開している国・地域は、スペイン、イタリア、フランスおよびサヴォイア伯領、ベルギー、そして最もきめ細かい研究のイングランドである（――残念ながらドイツがない）。そこで言及・考察した都市・村落・荘園は、主要なものだけで約二五〇点に及ぶ。

私は、これまでに数々の黒死病関係の研究書を調べてきた。しかし、このベネディクトーの研究書は、ヨーロッパの数多くの第一級の先行研究を網羅して全体的に統括しようとする研究として、これまでの研究とは非常に次元の異なるものだ。確かに、これまでに黒死病の「概説書」（啓蒙書）として全体を概観する書物はあった。しかし、歴史人口学の成果にもとづいた史料批判の方法を駆使して、説得力をもって結論を導いた研究となると、これまでは存在しなかった。しかも彼が提起したその学説（死亡率の算出）も非常に注目すべきものであった。それは、後述するように、極めて衝撃的な学説であった。

このような理由から、「トレチェントの苦難」のなかでも最も中核的な黒死病を扱うベネディクトーの著書は、それだけで単独にここで扱う値打ちが十分にあると考える。そこで、関連する他の研究者はその都度触れつつ、この著書、それもこの著書の核心部分である第四部「黒死病でどれだけの人が死んだか」に焦点を据えて考察したい。そして、扱う史料の性質や、先行研究の解釈史料に対するベネディクトーの批判と再解釈、そして、得られた死亡率の結論を簡潔に明示したい。そして、最後にベネディクトーがたどり着いた結論（ペストによるヨーロッパ全体の死亡率）とそれへの私の評価と批判を示したい。

## 第二節 従来の死亡率の算出の傾向

従来、黒死病死亡率の算出の方法には問題があったのではないか。つまり、その史料が作成された直接的動機・背景や、その調査や記録が対象とした人びとの特殊性についてやや無頓着であり、さらに、黒死病直後に生じた特有の社会的変動の状態に対して、あまり注意を払わなかったのではないだろうか。社会の実態を凝視した上での、慎重な史料操作や史料批判をしなかったのではないだろうか——以下、このことをわかりやすく見ていこう。

およそ、現在まで残っていて、人口算定に役立つ史料は、当然ながら、それが「必要であった」からつくられたものばかりである。近代になるまで、人間は、純粹に人口そのものを把握する客観的な調査などおこなわなかった。知りたいとは思わなかったのである。そのため、史料として残っているものは、主に、「租税徴収」のための調査、「住民への食糧の配給」のための調査、「戦争に向けて兵役に従事できる人数の把握」のための調査、「職業組合（アルテ）構成員」の一覧、「聖職者の就任記録」、「埋葬者の記録」などに限定される。いずれの史料も、それぞれの「必要」に応じて作成された個別的な性格が強い史料であった。たとえば、「租税調査」の場合、当時ふつう、税金は、必要上、世帯主から徴収できればよかったので、「世帯主」——この時代ではふつう成人男子——の存在しか見ない（ふつう女性には法的権限が与えられていなかったことから、女性だけの世帯でなければ、史料にはその姿を見せない）。また、世帯主さえわかれば良かったので、通常の場合、役人にとってその世帯が何人家族であったかなどは、知る必要がなかった。だから、租税調査さえも、そのままで総人口を正確に反映したデータになりうるとは限らないのである。こうしたことから、「個」から「全」を割り出すこと、つまりある個別的な集団の黒死病死亡率から、都市や地域の全体の死亡率を割り出すことは、むずかしいのである。

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

### 第三節 ベネディクトーの考え方のポイント

——「隠れてしまったもの」を「あぶり出す」——

ベネディクトーは、従来の単純な黒死病死亡率の算出法は、いくつかの点で黒死病死亡率を実際の数値よりも低く見積もるものとなっていると批判する。従来の算出法には、中世末の社会構造の内部の実態に踏み込めていないものや、十分な史料批判がなされていないものがあるという。ベネディクトーによる黒死病死亡率の新しい割り出しの考え方は、以下の（A）（B）（C）（D）の四つのポイントにまとめられよう（この四点は相互に関係し合っていて、独立させにくいものである。また、彼は決して箇条書き的に述べているわけではない。史料を個別に批判的に検討するなかで、その都度、この考え方を持ち出して結論に導くための「てこ」にしている）。

#### （A）貧民、特に「見えざる貧民」の重視

都市に住む「貧民」には、史料やデータから把握される「貧民」のほかに、実は、そこから漏れた「見えざる貧民」（史料に現れない極貧の人びとを指す石坂の名称）がいた。後者の貧民は、非常に高い死亡率を被ったはずであり、その存在に注視することで都市の総人口における黒死病死亡率は押し上げられる。

#### （B）黒死病直後の特殊な社会実態の把握に向け「標準想定」を適用する

黒死病は人口の激減によって特有の社会的変化をもたらした。たとえば、家族の構成員が平均的に少なくなること（「世帯規模の縮小化」）、傾向として農村から都市への移動や、痩せた農地から肥沃な農地への移動があ

ったこと、結婚ラッシュによって世帯数が増加したこと。こうした変化に注目し、それを標準的な数値で把握しようとする。たとえそれがその地域についてデータによって数値として把握できなくても、他の多くの地域の事例を参考にして得られた数値、すなわち「標準想定」を適用し、実態に向け補正する。

### (C) 農村の死亡率の重視

史料が少なく、「見えにくい」農村部については、従来から黒死病死亡率が低いと考えられてきた。しかし、ここ数十年間の人口史料、農民の生活の困窮さと不衛生、ネズミ・ペストノミの生態学的な視点から実態を再検討する。農民が被った非常に高い黒死病死亡率を明らかにする。

### (D) 階層変動の重視

注目すべきは、黒死病直後の人口の激減・混乱がもたらした「社会的動態<sup>(9)</sup>」——「階層変動」(石坂による名称)——すなわち、黒死病によって人口が激減したことで、高い階層のなかの空洞化した部分へ、もともと下の階層にいて生き残った者はい上がった現象である。

たとえば、最下層の貧民であったがゆえに租税が免除され、租税の対象でなく、史料から漏れて、「姿を消していた」人びとが、人口の激減の後に、上の階層にはい上がって租税の対象となった場合、彼らはそこで再び「姿を消した」ことになる。これは二重の誤差をうむ。すなわち、実際には黒死病前に貧しい人びとが存在していたにもかかわらず、租税の対象でなかったがゆえに、その人数が総人口にカウントされずにすまされ、黒死病

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

前の人口が少なめに推定されてしまう（第一の誤差）。さらに、黒死病の発生後、実際には疫病死した富裕な人びとがいたのに、彼らに成り代わってその地位にのし上がって租税を支払うようになった者が出てきた場合、富裕者があたかも死ななかったかのように扱われてしまう（第二の誤差）。こうして総人口は、黒死病前には実際より少なくカウントされた上に、一方、黒死病後は疫病死した人びとの数も少なくカウントされてしまう。これでは黒死病死亡率はずっと低く見積もられてしまうのだ——我々は、正しい死亡率を導くためにこの階層変動の現象を見抜かななくてはならない。

#### 第四節 「見えざる貧民」

##### （一）流民等の人びと

ベネディクトーがその黒死病死亡率の算出において常に配慮し重視したものが、史料やデータから漏れてしまった人びと、「見えざる貧民」の存在である。ベネディクトーはこの「見えざる貧民」の存在に光を当てることで、従来の黒死病死亡率の算定の修正に迫ろうとした。

どうして貧民の一部が見えなくなってしまったのだろうか。その理由として、まず、貧民のなかには、課税の対象でありながら、虚偽の申告などによって税金の支払いをうまく免れた貧民がいたことが考えられる。さらに、そもそも当局から課税扱いにされなかった貧民がいた。租税役人は、自分たちの任務とは無縁な彼らには目を留めなかったもので、そうした貧民はデータとしては残らないのである。

その最も典型的な存在が、移動する貧民である。中世において多いのが、住所不定として都市から都市へ、または



農村から都市へと移動する流動的存在——「流民」——であった。

まず、季節に応じて農村から出稼ぎとしてやって来る小作人（移動労働者）がいた<sup>(10)</sup>。彼らは地主から借りた慢性的な借金を返済するのに、収穫物による収入だけでは無理なので、季節労働者として都市や他の農地にやって来て日雇いの労働による収入を得たのである（ふつう、日にち計算で週ごとに支払われた）。そのほかに、流民のなかには、教会やコミュニネや一般の市民が、キリスト教的隣人愛からおこなう慈善を受けようとやって来た物乞いの群れや浮浪者がいた。さらに、ぼん引きや売春婦、行人など、この時代において最も軽蔑されやすい人びとがいた。こうした流民の数はかなりのもので決して無視できない存在であった（そもそも、すでにヨーロッパ中世は、身分の高い者も、また、低い者も、大いに移動した流動的な時代であった<sup>(11)</sup>）。そうした貧民のなかには、窃盗や強盗に走る者たちも少なからず存在していた（フィレンツェの場合、カピターノ・デル・ポーポロの記録や判決記録からわかる<sup>(12)</sup>）。都市の訴訟や判決の記録のなかには、アルプスの北からやって来た外国人の名前や、フィレンツェに流入した他国人（フィレンツェ領以外のイタリア人）の名前が記載されている。様々な人種から成る彼ら流民は、ふつう人口関係の史料から隠れた「見えざる貧民」であった。ベネディクトーはこういう——

ほんのわずかの例外を除けば、中世社会では、無産階級を構成する貧民、資産も持たない労働者階級、転借人、季節労働者などの人びとは記録から除外されている。なぜなら、彼らは全く税金を支払うことができず、それゆえに記録するに値しなかったからである<sup>(13)</sup>。

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

## (二)「標準想定」

ベネディクトーは、この除外された貧民の割合を標準的な想定にもとづく数値で示そうとした。それは、他の歴史人口学者の成果にもとづき、この時代のヨーロッパ社会の数多くの事例から割り出されたものである。こうして、役人によって登録されなかったためにデータに残らなかった、隠れた存在をベネディクトーは、総人口の「五く六パーセント」と算定し、彼はそれを「標準想定」と呼んだ。これにはもちろん問題があると考えられるだろう——すなわち、隠れた貧民の多さは、状況等の違いによって地域差・時代差があったはずで、そうしたなかで割り切って一律に「五く六パーセント」を提示するのは少し問題に思われるだろう。しかし、登録されずに隠れた貧民が一定いたことは間違いない。だから、「標準想定」の考え方は、数値としてはあくまで個別に検証されるべきものとして保留しつつも、一定採用されてしかるべきものと判断されるだろう。この「標準想定」の考え方の設定はベネディクトーの理論の重要なポイントのひとつであり、「見えざる貧民」をあぶり出すほかに、黒死病直後に大きな現象となった「結婚ラッシュによる世帯の増加」や「世帯規模の縮小化」や「都市への移住」についても適用する。ベネディクトーは、フランスのモーリエヌ地方の山村の黒死病死亡率を扱っている箇所<sup>4)</sup>で、この「見えざる貧民」について「標準想定」の考え方を提示してこう述べている——

総人口死亡率に関する現実的な考え方に近づくために、私たちはまた、土地を持たない世帯を含めなければならない。そして、当時の中世社会において、通常、人口のほぼ半分がそれに近い数を担っていた貧困層の恐るべき死亡数を考慮しなければならない。この点において慎重な一般的な想定によると、無産階級間の恐るべき死亡数は、通常よりも約五く六ポイントも高かったと見積もられている<sup>4)</sup>。そこで全農村の人口の死亡率を得るには、二・五ポイントを加えるべきであることが広く考え

られるだろう。

## 第五節 貧民の存在は重視されるべきである

——劣悪な生活（住居・食糧）は貧民の死亡率を高めた——

黒死病の死亡率の研究において最も重要なことのひとつは、中世・ルネサンス期の社会において「貧民」は、その過半数または大多数を占め、人口のなかで最も重要な部分であったということである。この貧民の圧倒的な多さという実態は、現代の状況（先進国）と全く異なる本質的な要素であり、我々が常に忘れてはならないことである。

このことの当然の結果として、同様に忘れてならない、この社会のもうひとつの重要な要素が浮上する。それは人びとの短命さ（平均寿命二五歳程度）である。産業革命による高い生産性（物質的豊かさ）や医学や科学の発達などにより、我々の近現代世界においては（一部の開発途上国を除けば）、高い平均寿命はごく普通のことであるが、中近世の時代においては人間の短命さは、厳然たる事実であった。それは社会の底辺、すなわち貧困層においていっそう顕著にあらわれたことである。

平均寿命（誕生時での平均余命）についていえば、中世も近世も、ずっとほとんど同程度であり、ずっと変わることはなかった。たとえば、一七〇〇年頃のフランスでの平均寿命は「二五歳」、一八世紀のイタリアでも平均寿命は「二〇代前半」であった。その短命さは、現在の貧困な開発途上国の人びとの短命さに近いといえる<sup>(15)</sup>。

中近世における人びとの短命さの大きな要因を構成するものとして、女性の産褥死による高い死亡率（これについてはフレンツェに有効なデータがある<sup>(16)</sup>）などいくつかの要因があるが、ここではその最も大きなものに触れてお

黒死病でそれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

こう。それが、乳幼児と子どもの高い死亡率であつた。一七世紀と一八世紀のボーヴェ（フランス）の人口変動を研究したP・ゴベールによると、ボーヴェ市近郊のオヌーユという小さな町の場合（一六五六〜一七三五年の期間）、誕生して一年目の乳児の死亡率は、「二八・八パーセント」であるという。それから、死亡率は半減し、その半減した死亡率が三年間、同じレベルで毎年続き、無事二〇歳に達するのは、生まれた子ども「四九パーセント」であつたという<sup>17)</sup>。この高い乳幼児死亡率の観点からベネディクトーが注目するのが、人口統計学者A・J・コールとP・デミニーが改良した三二六種類の標準生命表である<sup>18)</sup>。そこには、発展途上国の乳幼児の高い死亡率を参考につくられた標準生命表もあるのだが、ベネディクトーは、中世に近いものとして、そのうちのひとつの標準

表1 コールとデミニーによる標準生命表（西モデル、レベル4）  
—誕生時の余命 25 歳の男性人口における各年齢での余命と死亡率—

Benedictow, 249.

年齢	千人あたりの死者	死者の数	生存者の数	平均余命	年齢
0	322.57	32257	100000	25.26	0
1	195.23	13226	67743	36.13	1
5	51.41	2803	54517	40.57	5
10	36.97	1912	51714	37.65	10
15	50.17	2498	49803	33.99	15
20	71.10	3364	47304	30.65	20
25	79.51	3494	43941	27.79	25
30	91.75	3711	40447	24.97	30
35	107.09	3934	36736	22.23	35
40	128.38	4211	32802	19.59	40
45	147.54	4218	28591	17.09	45
50	183.83	4481	24373	14.59	50
55	220.24	4381	19892	12.29	55
60	290.59	4507	15511	10.03	60
65	371.25	4085	11004	8.08	65
70	480.85	3327	6919	6.13	70
75	623.98	2241	3592	4.75	75
80	744.08	1005	1351	3.49	80
85	869.24	300	346	2.51	85
90	952.01	43	45	1.77	90
95	1000	2	2	1.24	95

生命表を取り出す。それが、表1「コールとデメニーによる標準生命表（西モデル、レベル四）——誕生時の余命二五歳の男性人口における各年齢での余命と死亡率——」である。それによると、誕生時の余命が「二五・二六歳」である。そして、一歳になっただけでその余命は、「三六・一三歳」にまで延び、さらに五歳に達しただけで、余命はさらに「四〇・五七歳」にまで延びる。もともと乳幼児の死亡率はほとんどいつの時代でも最も高いのであるが、ヨーロッパ中世とりわけ黒死病にさらされた時代において、乳幼児や子どもは、この標準生命表にあるような非常に高い死亡率を被ったと、ベネディクトーが考えて、それにもとづいて人口全体の死亡率を考えていくのである（しかし、私には黒死病の年と、それから半世紀の間は、もっと平均寿命は短かったように思われる（二〇歳弱）。なにしろ死亡者の半分以上が疫病死だったのだから）。なお、乳幼児や子どものペストによる高い死亡率についてハーリヒ―は具体的に、非常に示唆に富む注目すべき研究を展開している<sup>19)</sup>。

以上、中世社会において「貧民」が高い割合で存在したこと、彼らを中心に人びとは高い死亡率を被ったこと、貧民については死去が記録に残らないこと、そして幼い者たちの非常に高い死亡率、そしてその高い死亡率は貧民層に限らず、富裕な階層においても同様であり、貧民と乳幼児・子どものいずれの場合も記録に残りにくかったこと、こうしたことは忘れてはならないことであろう。

いずれにせよ、トレチェントの苦難、とりわけ疫病の苦難に対して誰よりも無防備なままに死の危機にさらされ、運命が翻弄された人びとが、ほかでもない、社会において最も多い存在であり、最も弱い存在の貧民であった。まさしく《ペストと貧民と死》ほど深くつながった関係はないのである。

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

## (一) 都市の貧民

都市の場合、「貧民」はどの程度いたのだろうか。

「貧民」の概念規定や地域・時期にもよるが、トレチェント（一四世紀）のフィレンツェの都市の場合、「富裕市民」（「ポーポロ・グラッソ」）の対立概念としての「貧民」（「ポーポロ・ミヌート」）の割合は非常に高く、（私見では）大まかに見て、都市の住民の二分の一から三分の二程度であったと思われる（しかし同じ「ポーポロ・ミヌート」に属する者の間でもかなり貧富の差が出てきそうである）。研究者S・コーンは「貧民」について、その「三分の一」が毛織物工業の労働者からなり（これは一三三八年のヴィッラーニの記述による）、「一〇パーセント」から「二五パーセント」が組合に入れない職人やその他からなるとして、合わせて「約四五パーセント」の都市の住民が該当すると見ている。その割合は、嫁資（持参金）として「五〇フィオリノ未満」の金額を渡す階層の住民の割合（「四四・六二パーセント」）にほぼ等しいという<sup>20)</sup>。

また、G・ブラッカーは、黒死病後の時代であるが、一三七九年のサンタ・クローチェ市区（四市区のひとつ）の直接税を分析して、一〇ソルド以下の課税者を「貧民」と規定するならば、全体の六〇パーセント（「五四七世帯」中「三〇二世帯」）が「貧民」となるという<sup>20)</sup>。また、ハーリヒとクラピツシュズベールも、これはフィレンツェ領の諸都市（従属都市）についてであるが、住民のなかの「六〇パーセント」を「ポーポロ・ミヌート」と分類し、彼らを資産「一フィオリノ」から「二〇〇フィオリノ」しかもたない者としている<sup>22)</sup>。しかし、やはり「税額」や「資産額」（これもある基準で便宜的に計算されたもの）もあくまで目安であって、それではっきりと「身分」を分けることもむずかしいのが実態であろう。おそらく、「身分」的に見ると、「貧民」には、「小組合の組合員」（「市

民権」をもち、織物工業労働者が多い」と最下層の臨時雇いの織物産業等の労働者やその他の流民が該当するだろう。しかし、小組合員でも裕福な者はいたし、中組合員でも貧しい者はいた（「小組合に属する職人や商店主のなかに裕福なブドウ酒商や金物商を見出すこともできた」<sup>(23)</sup>）。

しかし、どんな時にも《人に頼らずに食べていくことのできる人》は、まぎれもなく「貧民」ではないと規定するならば、この意味の「貧民」は、いったいどの程度いただろうか。黒死病発生の前年、一三四七年に起こった飢饉の時に、フィレンツェの都市は「貧民」に食糧を供給した。この時にフィレンツェの都市から食糧の供給に甘んじた「貧民」は、都市の住民の「五分の三」から「五分の四」に及んだという（年代記作家G・ヴィッラーニ）<sup>(24)</sup>。これに先だつ一三三〇年に、ヴィッラーニは都市の「貧民」の数を数えてみて、それが一万七〇〇〇人の数値をはじき出して、その多さに自分でびっくりしている<sup>(25)</sup>。ともかく、こうしたことから見ると、「貧民」は相当の数に及ぶ。ここでは、フィレンツェのような大きな都市の場合、およそ、半数から三分の二程度が「貧民」であつたと見ておきたい。これは、ヴェネツィアの場合でもほぼ同様であり、研究者B・ピュランは、近世ヴェネツィアの場合、少なくとも人口の三分の二が「貧民」（弾力的な語法で）であつたと述べている<sup>(26)</sup>。

ここで都市における貧民の存在を問題にしたいのは、貧民は疫病と深い関わりがあるからである。ひとたび都市が疫病に襲われるや、貧民こそが非常に高い割合で死亡したからである。それは否応なしに全体の死亡率をぐんと押し上げると考えられる大きな存在であつた。たとえば、ヴェネツィアの場合、あるモーデナ出身の一五世紀の年代記作家は、ヴェネツィアで一四七七年に発生した疫病について「ヴェネツィアで死んだ二万人の大半は「社会的地位の低い者」であつた」と述べている<sup>(27)</sup>。ここでの「社会的地位の低い者」とは、「貧民」や「下層民」とほぼ同義である

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの方が死んだか

が、彼らの疫病死は、その人数の多さからいやが上にも全体の死亡率を押し上げるのである。

従来の多くの黒死病研究では、貧民に属する人びとのうちの最も底辺に位置した人びと、それゆえ最も高い割合で疫病死した人びとは、史料の外に置かれていたことから、彼らの存在は無視・看過されがちであった。しかし、二〇世紀後半から歴史人口学にもとづく黒死病の研究によって、貧民の存在とその重要性は意識的に光が当てられる。今やその暗部に光を当てる努力が、ベネディクトー、カーマイケル、ピュラン、その他の多くの研究者によってなされつつあるのである。最も高い死亡率を被ったであろう「見えざる貧民」が客観的、実証的に数に入れられて、死亡率を割り出すならば、全体の死亡率は従来の死亡率よりも高くなることだろう——そうした、哀れにも貧困に喘いだ末に疫病死した人びとが、実際には紛れもなくペストによって死んだにもかかわらず、その死が後世の人びとによって認知されず、死者としてカウントされなかったとしたら、死んだ彼らにとってどんなに哀れなことであろう。日本での言い方をしたら、彼らは決して「浮かばれない」だろう。

## (二) 最下層の貧民が置かれた状況

### ——住居と食生活——

次に、ベネディクトーの記述に限定せずに、何人かの研究者の成果を紹介しながら、また時代もあまり限定せずに、貧民が置かれた状況のゆえに、彼らが高い疫病の死亡率にさらされていた具体的状況を見ていこう。

まず、都市において貧民が住んでいる劣悪な住居・環境がペストの温床となった。

わらと木でできた家は、外から丸見えで、屋根もなくいつも風にさらされて、あまり雨露がしのげないあばら屋で



あつた<sup>289</sup>。しかもそこに何人もの人が密集して住んでいた。寝具はわらで、これがノミやシラミには申し分ない快適な空間であつた。あばら屋の周辺はゴミや糞尿が散乱し、じめじめした不潔な貧民街は、これまたクマネズミの格好のすみかであつた。しかし、そうしたあばら家さえも持たない「流民」がいた。彼らは、慈善や臨時雇いなどを求めてよその地域から流れ込んできた存在で、常に不信感をもつて見られた人たちであつた。実際、都市内へペストを運び入れる存在にもなりえた。一七世紀のイタリヤ中部の場合、疫病患者は、盗賊や行商人とともにアッペニーノ山脈を越えてやつて来ると考えられ、都市当局は常に警戒し、取り締まりの目を光らせていた<sup>290</sup>。山を下りてくる旅人がもし衰弱していると（たとえば歩き方が変である）疫病に罹っているのではないかと告げ口され、取り調べがおこなわれたのである。流民は不潔な生活環境にあり、彼らの、着替えることのない（これは当時多くの人がそうであつたが）ぼろの服や持ち物にはペストノミが潜んでいることもあつた。彼らは、町の広場や、教会の中庭やアーケードや柱廊などで寝るか、そこを追い払われた場合、多くの売春婦と同様に、市壁の周辺に住むことを強いられた。しばしば、そうした郊外の貧民街から、恐るべきペストが（ノミの活動が始まる春に）発生したのである。フィレンツェのムーネの書記官長サルターティ（一三三一―一四〇六）の次のことは、一三八三年のフィレンツェの疫病の発生が、市壁のすぐ外にある貧民街から発生したことを示している（そして次の段階で疫病は市壁内に侵入することになるものである）。

今回、私が目の当たりにしたことだが、フィレンツェの市壁の外側では、市門の入口の前までこの疫病が猖獗を極めていたのに、一度市壁のなかに入ると、誰ひとり疫病にかかっている者はいなかったのである<sup>291</sup>。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの方が死んだか

こうしたことから、富裕市民は、貧民、特に最下層民とその貧民街を日頃からうさんくさい存在とっていて、ひとたび疫病が蔓延し、次いで、そのために自分たちの家族を失うと、富裕市民は貧民こそがその原因に違いないと認めて（また腹いせもあって）貧民街や売春宿を襲撃することもあったのである<sup>(31)</sup>。

不潔な生活状況にあり、もともと疫病の温床となりやすい住居と環境に生きていた貧民は、さらに、栄養の摂れない食生活のために病気に対する抵抗力を持っていなかった。つまり、住居に加え、その貧しい食生活も本質的に貧民の疫病の死亡率を高めるように作用したのである。貧民はもともと慢性的な栄養失調の状態に置かれていたといえるが、一四世紀になってから飢饉が頻発しいつも餓死と隣り合わせの生活を強いられていた。飢饉の時には、物価高から食糧はいっそう手に入れにくかった。そうした最悪の状態にあった貧民の身体に対して、疫病はしつかりねらいを定めて最初の決定的な打撃を容赦なく与えた。こうした意味で《貧民・飢饉・疫病》の三者は多くの場合、密接に関連しあった。

四巻からなる膨大な疫病史を記述した一九世紀の歴史家A・コッラーディ（一八三三―一八九二）の『疫病年代記』を参考にして、次にペスト（腺の疫病）に先立つ飢饉の発生を、トレチェントのイタリアの北部・中部について見てみよう。そこにはこう書かれている（年代は地域によってずれるが）――

一三四八年のペスト……一三四七年の飢饉が先行<sup>(32)</sup>

一三七一年―一三七三年のペスト……一三七〇年からの飢饉が先行<sup>(33)</sup>

一三八三年のペスト……一三八〇年―一三八二年の飢饉が先行<sup>(34)</sup>

また、ルネサンス期のピストイアの研究をおこなったハーリヒーは、ピストイアで発生した「疫病」（一三四八年以後は「ペスト」と「飢饉」を一覧にして示している<sup>85)</sup>。

ピストイアで記述された疫病と飢饉

年	記述内容	出典（頁等は省略）
一三一三年	飢饉	サルヴィ『歴史』
一三二八～二九年	飢饉	『ピストイア年代記』
一三三九～四〇年	疫病と飢饉。人口の四分の一が死去。	『ピストイア年代記』
一三四六年	飢饉	ピストイア国立古文書館
一三四七年	飢饉と疫病（「ペスト」）の兆候	ピストイア国立古文書館
一三四八年	黒死病	同国立古文書館、『ピストイア年代記』
一三五一年	食糧不足	ピストイア国立古文書館
一三五七年	「致死的な熱病」	サルヴィ『歴史』
一三六九年	食糧不足	ピストイア国立古文書館
一三七〇年	食糧不足	サルヴィ『歴史』
一三七五年	飢饉	『ピストイア年代記』
一三八三年	病気（「ペスト」）	ピストイア国立古文書館
一三八八年	食糧不足	ピストイア国立古文書館
一三八九年	疫病（「ペスト」）、飢饉	『ピストイア年代記』
一三九〇年	食糧不足	サルヴィ『ピストイア年代記』
一三九三年	飢饉、疫病	ルカ・ドミニチの年代記
一三九四～一四〇〇年	疫病（「ペスト」）、人口の半分が死去	サルヴィ『歴史』
一四〇一年	飢饉と疫病（「ペスト」）の兆候	ピストイア国立古文書館
一四一〇年	食糧不足	サルヴィ『歴史』
一四一六年	疫病（「ペスト」）	サルヴィ『ピストイア年代記』
一四一八年	疫病（「ペスト」）	ピストイア国立古文書館

黒死病でとれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

一四二〇年	食糧不足
一四二三年	疫病（ペスト）
一四三六～三九年	疫病（ペスト）
一四五七～五八年	疫病（ペスト）

サルヴィ『歴史』  
マネッティ『年代記』  
サルヴィ『歴史』

このように見ると、一四世紀と一五世紀を生きる人びとは、「疫病」と「飢饉」の二つの苦難によって挟み撃ちにされ、日常的に苦しんでいたことが痛いほどよくわかる。

飢饉と疫病の関係については、一七世紀になっても同様であった。イタリアの小説家マンゾーニ（一七八五～一八七三）は、小説『いいなづけ』（一八二七年）のなかでペストによって若い主人公（二人のいいなづけ）が翻弄される運命を書いたが、そこでマンゾーニが史料として利用したものが、一七世紀の歴史家リパモンティの著作『一六三〇年のミラノの疫病』（一六四〇年）であった。この年代記では、先だってミラノに飢饉が発生する。そして、パンを求める貧民の暴動が勃発し、パン屋が襲われる。次いで貧民街でのペストの発生と全市へのペストの悲劇的な蔓延が記述されている<sup>96)</sup>。飢饉（栄養失調）と疫病との間に密接な関係があることに対しては、研究者によって若干異論もあるが<sup>97)</sup>、ふつうペストはまず弱い者から、つまり抵抗力のない弱い貧民から襲いかかったと考えてよい。貧民街がペストの温床となったのは基本的に正しいだろう。戦争などによる社会全般の生活の困窮なども、ペストやその他の疫病の発生・蔓延を促す条件となった（こうしたことは、人間に限らず動物についても同様であり、一四世紀には動物伝染病がよく発生し、この発生も人間に深刻な痛手となった）。一四世紀のジョヴァンニ・モレッリは、飢饉に苦しむ貧しい農民、疫病（ペスト）にかかっても手当てされない貧民について、ついでこういう――

疫病の前年にフィレンツェは大飢饉に見舞われた。パンや小麦をもっていた者は一〇〇人中二〇人もいなかったと私は信じている。パンや小麦をもっていた者でも少ししかもっていなかった。草や草の根、それにひどい食べ物——今ではそれがどのようなものかわからない——を食べ、水を飲んで生きた。そしてコンタード「周辺農村部」では牛や馬のように草を食む人びとであふれかえっていた。彼らの身体がどんなにやせほそっていたか考えてみよ。すでに述べたように彼らは疫病に対して立ても治療法も何ももっていなかったのである。事態は極めて厳しい状態になったので、もはや互いに助け合うことなどできなかつた。こうした理由のために彼らは何も治療の施しようもなく死んでいったのである<sup>(38)</sup>。

また、年代記のなかで、マッテオ・ヴィツラーニ（一二九五頃～一三六三）は、フィレンツェの貧民と疫病の両者について報告している——「貧民は、かなりの人が疫病の打撃を受けた。というのは、彼らは最初に打撃を受けたし、手当もあまり受けずに、困難な状況に置かれていたからである」<sup>(39)</sup>。

都市の富裕者からすれば、貧民は困った連中であつた。富裕者は、貧民と疫病の深い結びつきを信じてこう考えた——いつも疫病は連中の間から発生する。そして、死の危機は次第に我々に及んでくるのだ。飢饉時、連中は、食べるものがなく、食べるものを求めて都市の周辺からどっと流れ込む。がりがりにやせ細って骸骨のようで、市場に残された腐った魚や肉や野菜を食べている。「それで連中の体内が腐敗する」。そして、貧民どもの身体は、皮膚が汚れて、身についた悪臭（餓死の悪臭）は、「大気を汚染させる」。こうして大気が汚染され、「それがもとで疫病が発生するのだ」（「腐敗」や「大気の汚染」の考えは、古代のガレノス医学によるもので、当時依然として權威をもって疫病の原因の考え方として信じられていた）。さらに疫病と貧民の密接な関係を痛感していた富裕者は、瀕死の者たちの苦しむすさまじい光景を見るだけで、疫病と同じぐらいに害になると考えたのであつた<sup>(40)</sup>。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

さらに、あるヴィチエンツァの貴族はヴェネツィアにいる友人に手紙（一五二八年三月二六日付）で、興味深いことに、こう書いている——「私は空気中には疫病は存在しないと思う。病気は人のこころのなかに存在するだけだ。その病気は貧民を見て彼らに同情を感じることで引き起こされるのだ<sup>(41)</sup>」。疫病は得体が知れないものであったことから、人によって様々に原因が直観され、解釈されたのである——ここでは、餓死寸前の悲惨な貧民に同情することから疫病が自然と誘致されると、そのように考えたのであった。これも体験的にそう信じられたのであろう。

一五七七年、ヴェネツィアのある内科医は、疫病の原因について出版した本のなかで、およそ次のような趣旨のことを述べている——《コムーネが貧民用に配給した、あの汚れた小麦粉でこねた粗悪なパンが疫病の原因に違いない。ドージェ（統領）が予算の節約のために貧民に与えた有害なキビの穀粉がきつと疫病の原因に違いない》と。こうしてドージェの責任を問うたのである<sup>(42)</sup>。

ペストの場合、たとえペストに感染しても死なずに回復する場合がある。特に病人に十分な栄養が保証されると、抵抗力がうまくまれて回復が促進される場合がある。しかし、もともと食べ物が無い貧民の場合、それもおこなわれず、病人は放置された。そもそも、貧民に限らず、かなりの者が放置されたようである。『デカメロン』にもこう書かれている——「……懼病した者がかなり多くありましたが、大がいに、その家に置き去りにされて、衰弱して死んでしまいました」<sup>(43)</sup>。人は疫病に感染するのを恐れたのである。こうして栄養や手当が与えられなかったことで、患者はますます衰弱していき、確実に死への道を歩んだのである。この手当ての不十分さは、一種の「二次災害」である<sup>(44)</sup>。

劣悪な住居、貧しい食生活は貧民の疫病死亡率を高めた要素であると強調してベネディクトーはこういう——

無産階級の人びとは、著しい死亡率を被ったと想定されるべきである。その死亡率は免疫システムを弱めてしまう栄養失調や栄養不足のために、また、住宅水準が低く、家屋のなかでの衛生水準が悪かったことの結果によって、ネズミやノミに高い頻度で身体をさらしたことになるものであった。これまで述べた要素の重大さを大まかに考慮すると、無産階級の大衆の死亡率の推定は、租税や借地料を支払う世帯主よりも、七・五パーセントほど高かったことを示している。いや、むしろ少し高めに一〇パーセントほど、加算して主張することも十分に可能だろう<sup>(45)</sup>。

### (三) 富裕層市民の生活と疫病への対応

これまで述べた貧民の家と比べると、都市の最富裕層の住居は、対照的であった。彼らは「パラッツォ」と呼ばれる石造りの家に住んでおり、それは、はじめじめした貧民街の家にと比べると、極めて衛生的であった。「わらぶき屋根は特にネズミの隠れ家にもってこいなので、ノミが天井から下にいる人間の上に落ちてくるのが容易だった」(W・H・マクニール)。それに比べてこの石造りの家は、ペストノミとクマネズミがあまり寄りつく空間ではなかったのである<sup>(46)</sup>。さらに、富裕階級は食生活にも恵まれ、疫病にかかっても十分な栄養が与えられ、まだ疫病からの一定の回復のチャンスが与えられたのである<sup>(47)</sup>。

それに加えて、ペストが繰り返して周期的にやって来るようになると、いつも富裕階級は「最後の切り札」を切った。すなわち、彼らは都市で貧民が疫病死し始めると、食糧を買い出し、荷物をまとめた。フィレンツェでは都市を立ち去る市民には、不在中の治安確保(部隊の配置)のために課税が課されたけれども、さっさと都市を逃れたのであった。彼らは、今どこが安全かについて情報収集のためにネットワークを巡らせていたので、安全な方角へ逃れたのである<sup>(48)</sup>。この都市からの逃亡は、当初から、医学的根拠にもとづいて医師が勧めたことであった。すなわち、ボ

黒死病でそれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

ローニヤ大学の医師トンマーズ・デル・ガルボは一三四八年に『疫病に対処するための勧告』を執筆したが、そこに貫かれている理論は、中世医学に支配的であった伝統的な古代のガレノス理論である。ペストの原因は、大気が汚染されて、それが人間の体液に悪く作用するという、体液病理学理論によって説明された――

最初に取りうるべき最も確実な措置は、疫病が存在する場所から逃れることである。……また、空気が汚染されていない場所に身を移動させることである。その理由は、疫病というものは風に吹かれることで次から次へと先へ移動していくからである。風が吹くおかげで腐敗したガスは、腐敗していない場所へと運ばれているのである。ある場所ですったん疫病が発生すると、その疫病は、たとえばコンタード「周辺農村部」といった、そのすぐそばの所へと次々と広がっていくというのは、ほんとうのことである。第二の措置は、疫病が近づいてくる度に次々と場所を変えていくことである<sup>(49)</sup>。

しかし、この都市からの逃亡は、貧民にはとても無理な話であった。彼らは、疫病が発生しても逃げる實力も逃げる場所もなく、ただ疫病が収まるのをじっと待つだけであった。おまけに疫病時には食生活は最悪となったのだ。なぜなら、富裕層の市民が不在であったことから、彼らに日雇いの仕事も与えられず、失業して収入は断たれてしまったのである。市内では聖職者や、施療院で働く職員や有志の市民などが、隣人愛から貧民に対応したものの、パンやワインの配給など、富裕層の市民のおこなう慈善活動はどうしても滞りがちであった。差別、迫り来る疫病、死の恐怖、飢え、仲間たちの感染と疫病死……そうした不安と苦しみの極みに追い込まれた貧民は、富裕市民が避難してかなり空洞化した都市で、暴動や略奪や窃盗の行為に走ったのである（一三七八年に起こったチョンピの乱は、そうした日頃から貧民の間に募った富裕層への鬱憤の爆発であったとも取れる）。そして、フィレンツェでは政府（シニョリーア）は部隊を使って、そうした貧民による暴動や略奪の防止にあたったのである。こうしてポーポロ・グラッソ



は、避難先から疫病の終息を待ったのである。そして、都市に帰った時に、貧民どもが疫病死することで都市内の貧民どもが少なくなっていることを期待したのである。

そして、こうした富裕市民層の行動は、その独自の考え方によってまさに正当化されていたのであった。すなわち、一六三〇年代のことであるが、ある医師は手紙のなかでこう書いている——《都市の貧民は、人間の身体の臍丸、すなわち恥ずべき末端の器官のようなもので、心臓や脳から遠い器官である。そして、その末端の器官は、高貴な部分によって排出される、有害物質を収める場所である》。同様に、ペストがジェノヴァで猛威を振るうなかで、隔離病棟を管理していた神父アンテロー・マリア・デイ・サン・ボナヴェントゥーラは、疫病の原因を《貧民の多産の結果》であると考えた（実は、当時、富裕市民にとって、娘に非常に高額の嫁資をもたすことが容易でなく結婚が控えられ、そのため子どもは出産されにくかったのである）。だから、彼の考えによれば、疫病こそは、《神が、増えってしまった貧民どもを減らすためにお与えになったもの》であり、必要なものであった（これは、一定の食糧に対して一定の人口が保たれるべきであるという、バランスを重視する一種のマルサス主義的な見方である）<sup>(50)</sup>。

このように富裕層・支配者層は、事実上、いくつかの都合の良い条件によってみずからの身が疫病からほとんど安全であったことから、疫病は貧民の駆除に役に立つとして、ペストの必要悪を受容していたのである。こうして、都市に疫病が発生すれば、さっさと農村の別荘へ待避したのである。

ところが逃亡する市民を責める市民もいた。疫病が来れば都市から逃亡し、都市を見捨てる市民に対して、都市に残って声を大にして彼らを非難する市民もいたのである。しかし、それは貧民の立場に立った発言ではなかった。それは貧民どもから共和国を守ろうという愛国心の立場とキリスト教的な神観念にもとづく立場からの発言であった。

黒死病でどれだけの人が死んだか

#### 黒死病でどれだけの人が死んだか

すなわち、フィレンツェの書記官長サルターティはいう——疫病が来たからといって易々と都市を見捨ててはいけない。富裕市民がいけないことをいいことに貧民どもは都市で傍若無人に振るまい、略奪に走るのだ。残って国家を守るべきだ。また、神は、人がどこに逃亡しようとも、死なそうと思う者は誰でも死なせることができる。逃げてみただである。むしろ市民は神の御心に従って都市に残って共和国フィレンツェを守るべきだ——そう訴えたのである。疫病が荒れ狂うさなかに書かれたこの人文主義者サルターティの生々しい論説は全訳されている<sup>61)</sup>。

サルターティは都市での疫病の有り様を間近に見て報告している数少ない知識人であった。実は、疫病も次々と周期的にやって来るようになると、多くの年代記作家も、富裕者として、みずから疫病を恐れて都市を立ち去ったので、疫病が都市に猛威を振るっている情景についてあまり記述せず、詳しい報告は残されていないのである<sup>62)</sup>。

#### (四) 貧民層と富裕層の財力と生活の格差

疫病に対する貧民と富裕層との間に横たわる際だった被害の差は明らかであった。

一四世紀の年代記作家フォードンのジョンは、「貧しい者や民衆が一樣に皆疫病に罹った一方で、有力者はめったに疫病に罹ることがなかった」という<sup>63)</sup>。そして重要なことは、この被害の差はすべて財力の差によるものであったということである。次に示すように、両者の貧富の格差は現在では信じられない大きなものであった。

黒死病直前の貧富の差の実態を数値で示す実証的な史料は、残念ながら残存せず、ここでは一五世紀の初頭の史料を用いて類推するほかはない（もし一四世紀の史料があれば、一五世紀の史料からよりもいっそうひどい格差が認められたように思われる。というのは、ペストによる人口減少のおかげで最下層民の生活は少し向上したからであ

る)。

一五世紀初頭にフィレンツェとその支配領域の世帯を対象におこなわれた調査(租税額を決めるための資産調査『カタスト』)を解析したハーリヒートクラピッツシュベールによると、フィレンツェの都市の上位わずか「一パーセントの家」が都市の「二〇パーセントの財産」を所有し、わずか「一四パーセントの人」が「六七パーセントの財産」を所有していた<sup>64)</sup>。都市の世帯のわずかに「一パーセントにすぎない約一〇〇世帯」が、都市の持つ莫大な「財産の四分の一」も所有し、それは同時に、「フィレンツェ領トスカーナの約六分の一の財産」に相当したのである。さらに、驚くべきは、フィレンツェ領トスカーナ地方の全世帯である「約六万世帯」のうち、わずか「約三〇〇〇世帯(五パーセント)」が持つ財産が残る「九五パーセントにあたる五万七〇〇〇世帯の財産」よりも多くの財産を所有していたのである。富の集中、ここに極まれり——の感がする。その一方で、フィレンツェの都市の「約一四パーセント」の貧しい世帯が、課税対象の財産を持たずに免税とされた。さらに、控除(扶養家族を持つ場合などに認められる)が認められて無税になった貧しい世帯を加えると、全体の「約三〇パーセント」が免税された貧民世帯であった。富裕層の所有する膨大な財産に比べると、下層市民や下層民が持つ財産など、取るに足らない、非常に微々たるものであった。この時代のトスカーナ社会は、経済的に次第に活気を失って行ったが、それは大衆が大量消費するだけの力や自由を持たなかったことにひとつの原因があるだろう。消費できるのはごく一部の富裕層であったのだ。

そのように貧富の格差が際だった社会であったからこそ、金持ちは、家に何人もの使用人(農村部などから来た下男・下女)を雇い、奴隷(ヴェネツィア商人などを經由して購入したスラブ系の白人女性など)を所有することができたのである。また、少数の最富裕層に富が集中したからこそ、彼らエリート層は、芸術の選ばれたパトロンとして

黒死病でただけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

自認し、惜しみなく芸術にお金を注ぐことができたのかもしれない。都市の指導者としての見栄と気前よさの競い合いから、極上のルネサンス文化の花が咲き乱れたのかもしれない。

要するに、身分差や財力の差がそのまま死亡率に反映されたのである。だから、たとえ上質の優れた史料が貴族の階層に残っているからといって、J・C・ラッセルのように、貴族の黒死病死亡率をもつてそのまま総人口の黒死病死亡率としてはいけなののである<sup>65)</sup>。同様に聖職者の場合も、聖職者階層での身分の違いがそのまま死亡率の違いを反映した——イングランドの聖職者の場合、司祭の死亡率は、控えめに見て「四五パーセント」であったのに対して、身分と生活水準において遙かに上をいく司教は、死亡率は「一八パーセント」にまで下がるのである<sup>66)</sup>。

財力の差による住居の差が大きく死亡率に関わることについてベネディクトーは、チポツラやザネットイなどの研究を根拠にこう述べている。

ネズミやそれに寄生しているノミが、感染の決定的な役割を果たしていたのである。それゆえに、ネズミにとつての快適さと関連して、住居の質における階級間の相違もまた考慮に入れなくてはならない。この問題は、近世における疫病の流行に関してかなりの関心をひきつけるものであった。イタリアでは、チポツラとザネットイによる次のような趣意の主張が関心を引いた。それは、貧困層ほど狭く密集した不衛生な住居に住んでいたために、格段の大量死を被ったという主張であった。またポール・スラック博士は、一五四〇年から一六五〇年のブリストルにおける疫病を研究したことから、富裕な社会階級の間よりも貧困層の間での死亡率のほうが高いと力説している。また彼は次のような説明を加えている——「当然ながら、この両者の結びつきの背後に潜んでいた決定的要因は、ペストを運ぶネズミやノミをひきつけたり追い払ったりするかもしれない住居と衛生の水準の差であった」<sup>67)</sup>。

## 第六節 農村における疫病の被害

### ——農村での多大な疫病被害——

#### (一) 農村の貧困さ

以上述べたことから、貧民は黒死病による被害を受けやすかったことがわかる。その貧民は都市において半数から三分の二もの高い割合で存在した。では、農村部ではどうだったろうか。——実は、農村部ではそれより遙かに高い割合で貧民が存在していたのだ。農民はかなりの割合で貧民を意味した。空間的には、都市はヨーロッパにおいて大海に浮かぶ孤島のようなものであり、農村世界こそ、大海そのものであった。そして、その大海のように広大な農村には、多くの場合、実は、散在しながらも、ほとんど貧民ばかりが住んでいたのである。

黒死病前の史料ではないが、一四二七年の『カタスト』の史料から、農民の貧困さを証明してみよう。この史料によると、フィレンツェ領の全人口の「六六・五パーセント」を占める農民が、全体のわずか「二七・一パーセント」の資産（生産手段）しか持っておらず、また、フィレンツェの都市に住むひとりの個人の場合、所有する「課税対象資産額」（所得・収益をもたらず資産額。住居等は課税対象ではない）は、平均「二七三フィオーリノ」にも及んだが、農村に住む個人が所有する「課税対象資産額」はわずか「一四フィオーリノ」にすぎなかった<sup>68</sup>。実に、農民は都市民の「二〇分の一」の資産額しか所有していなかったのである（当時、一人の人間が一年間生きていくために必要なお金は「一四フィオーリノ」と見なされていた）。これが都市と農村の貧富の差をすべて物語るといっても過言ではないだろう。このように都市民と農民の所有する資産の落差は驚くほど著しいものがあったのである。

この差からも、農村に住む小作人が、わざわざ都市に出稼ぎに出ることどころにか糊口を凌いだ実情がわかるであ

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

ろう。農家の若い女性の場合、口減らしのために都市の富裕層市民の家に家事の手伝いに送られた。そこで彼女たちは住み込みで一定の年齢まで家事を手伝い、結婚できる時期が来て、結婚相手が見つかったら、主人の恩恵に預かり、嫁に行くための援助——嫁資（持参金）など——をもらって嫁に出たのである<sup>69)</sup>。多数の農村女性が都市に出たので、都市における男女比にもいくらか影響を与えたと考えられる。

農民はぎりぎりのところで生きていたので、不幸にもその農家の家長が死ぬようなことがあれば、一家離散の憂き目にあわざるをえなかったのである<sup>60)</sup>。たとえば、寡婦は都市の使用人として、また、少年は近隣の農家の労働力として、少女は市場町へ、青年は都市の下層労働者として、それぞれ家を出て行かねばならなかったようだ。

中部イタリアの農村について見ると、そこではかなりの割合の農民が地主（都市民）に従属する小作農であり（小作農は、土地を所有していてもわずかであった）、貧しい生活状態に置かれていたのである。「持たざる」小作農と「持てる」都市民との間には、多くの場合、敵対意識があり、それはモレッリなどの私的な書き物に容易に認めることができる<sup>61)</sup>。さらに、彼ら小作農は、日々の生活の困難さから、臨時収入を得るために都市に出稼ぎに出ざるを得なかった。フィレンツェのコンタードの場合、これは一五世紀初頭の史料であるが、そうした小作人は南西部（サン・ミニアートやカステルフィオリンティノなど）の出身の小作人が多かった（一方、フィレンツェ南部のインブルネータなどの小作人の場合、比較的裕福であったことから、移動せずに定住した者の割合が高く、資産調査をおこなっていた二年間について、定住率「八七パーセント」であった<sup>62)</sup>）。

小作人が都市で労働者として働くのは、家畜や種子や食糧の購入のために地主から借りた金（貸し付け）を返済するためであった。こうして彼らは都市の毛織物工業などで日雇の下層労働者として働かざるを得なかったのである。

## (二) ペストに好まれた農村

では、農村部には黒死病が来たのであろうか。かつて黒死病は農村部にはあまり来なかったと考えられた。しかし、その認識は根本的に覆される。これにはまずスペインの黒死病研究者による研究成果がある。それによると、農村はむしろ都市よりも疫病の猛威がひどかったという。腺ペストの場合、農村においては、ネズミとペストノミが繁殖する場合が多く、それによって両者の密度が非常に高くなり、人間の人口密度による人間同士の相互感染よりも強い感染作用を人間に及ぼすという。つまり、農村においては、大量に発生したノミが農民に直接病気を感染させると説明する。ベネディクトーはこういう――

いかなる病気も、拡大する力は感染しやすい人間集団の密度が高まることによって増加するということは、疫病学の基本的な学説である。しかし、数人の研究者が提示したひとつの興味深い一般的な見解がある。それは、スペインにおいて黒死病は、都市部よりも農村部の方をいっそう激しく荒廃させたという見解である。この見解は、ペストの死亡率の地域的分布に関する全般的な研究と一致する。疫病としての黒死病は、都市よりも、比較的人口の過疎な農村部においていっそう強力に拡大する力を見せる傾向があり、この事実が、その疫病が圧倒的に腺ペストであったということを示している。人間の間を交差感染によって直接的に拡がるすべての病気の場合、感染される人間集団の密度が高くなると、疫病の拡大を推進する力として決定的な要因となるものである。しかし、この腺ペストという病気の独特の特徴こそ、ネズミとネズミノミが密集している場合には、それは人間が密集することによる交差感染の影響をも凌駕して、いっそう大きな影響を人間に対して与えるところにあるのだ<sup>63</sup>。

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

### (三) 農民の住居

また、別の研究者も、ペストは都市も農村も変わらず同程度の被害を与えたのであって、少なくとも「都市の方が被害はひどく、農村はさほどのことがなかった」という見方はあたらないという。そのひとり、ハリーヒーはこうい  
う――

少なくとも現在のところ、都市も農村もどちらの側においても、中世末の猛烈な疫病に対してしっかりとみずからの身を守ることができたという証拠は存在しない。《死》という、人を平等に扱う大きな存在は、農村共同体も都市共同体もどちらに対しても同じくらいの厳しさで過酷な責め苦を与えたのである<sup>(64)</sup>。

さらに、フランスのプロヴァンス地方を研究し、優れた歴史人口学の著書を著したE・バラティエも、都市における死亡データと、農村部における死亡データとの間に、実質的な相違はないと述べている。黒死病での死亡率が都市中心部よりも農村部のほうが低かったという趣意の推論には何の根拠もないという<sup>(65)</sup>。

そして、一度農村にペストが来れば、ペスト菌というバクテリアにとって、農民が住んでいた家がまことに快適な環境であった。これは都市の貧民の住居について述べたことと同様である。ベネディクトーは、イングランドの農民の住居に関連して、ヨーロッパ全般の庶民の家に及んでこういう。

なぜ農村において黒死病がそれほど猛威を奮えたのだろうか――それは小作人の家の構造から説明がつく。小作人の住居は、荒打ち漆喰で造られている。荒打ち漆喰とは、棒や枝を組み合わせ、そこに粘土や泥を塗って壁や屋根を造るものである。これらの材料は、ネズミの活動や定住に対して抵抗力を期待できるものではなかった。住居の内部も粗末で不衛生な



状態であった。小作人の家族が土の床に干草を直接置いた上で眠っていたとき、豚や鶏、牛や羊までもが同じ部屋にいたかもしれない。高い温度、大量の糞は、ネズミには絶好の生活環境であった。ツイーグラーのおどけた、しゃれた言葉によると——「中世の家屋は、ネズミたちが健康で心配のない満足のいく生活を享受できるように、ネズミたちが集まって開いた会議で細部に至るまで承認されて建てられたものかもしれない」。同じことは、都市の貧民層の住居についても言うことができる。事実、こうしたことは、イングランドだけでなくヨーロッパ中の庶民の住居全般について言えることである<sup>66)</sup>。

以上をまとめよう。これまで農村部でのペストの被害（黒死病死亡率）は、都市に比べれば、大したものではないと判断されてきた。それは史料がないことによる憶測にもとづく判断であった。この判断に作用したと考えられる理由とは、《黒死病は、そもそも都市に比べて農村や山間部にはあまりやって来なかっただろうという理由》（第一の誤り）、《たとえ黒死病が農村部に来ても、死亡率はあまり高くなかったであろうという理由》（第二の誤り）、また、《人口比からすれば、都市よりも農村部の方がずっと多かつたことから（ここまでは正しい）、総人口から見ると、都市の高い死亡率は、農村の低い死亡率によって薄められ、全体の死亡率はずっと下がるだろうという理由》（第三の誤り）であった。しかし、ヨーロッパの多くの地域においてここ半世紀に見出された農村部の史料の考察によって、三つの憶測はすべて否定された。つまり、「疫病学的、生物学的理由」、「中世末の経済・商業の世界における都市と農村の一体化」（流通的世界システム）、「農民の衣食住の貧しさ」などの理由により、ほとんど、どの農村においても都市と同程度か、むしろ高いレベルの死亡率が認められるのである。その具体的な死亡率の数値による実証は、次の第二章において各地方の共同体の個別研究で見ることにする。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

## 第七節 黒死病による階層変動

黒死病で人口が激減したことで、社会は大パニックに陥った。人々は、想像を絶する不幸のどん底に陥れたのであった。しかし、生き残った者には良いこともあったのである。すなわち、人口が激減——仮に「五〇パーセント」としておこう——したのに、少なくとも不動産は当然そのまま減少することなく残ったのである。すなわち「一〇〇パーセント」そのまま残ったのである（動産もある程度まで残ったことだろう。この富からルネサンスと宗教改革が引き起こされたと考える研究者もいた<sup>67)</sup>）。ここから、ベネディクトーによれば、黒死病によって「階層変動」「社会変動」が生じたという（ベネディクトーは、人口激減の事態のなかで、それぞれの階層のなかのかなりの割合の者が、それぞれワン・ランク上に上昇したと考えている）。

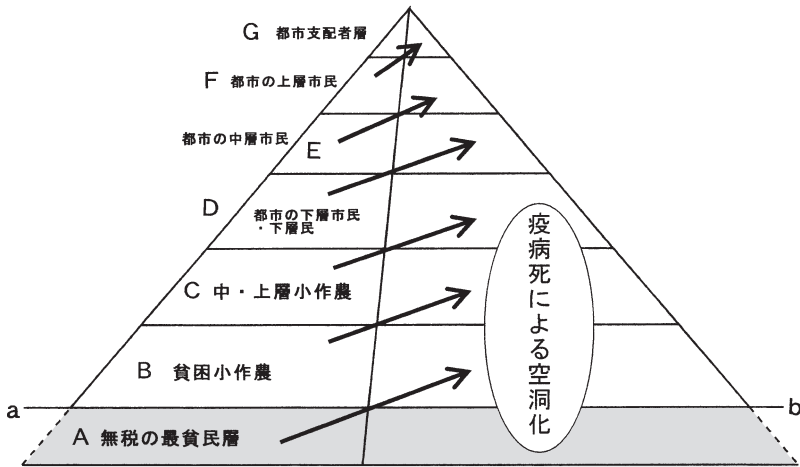
### （一）農村部における階層変動

ベネディクトーはこの変動のあり方を諸地域の分析のなかでその都度、断片的に述べているにすぎないが、私はここではその「階層変動」のあり方について、最も低い身分の者から、最も高い身分の者に至るまで、社会の全体的変動がわかるように説明を試みたい。図1「黒死病による階層変動」はその説明がわかりやすくなるように私が作成したものである。これを利用して、基本型（理念型）を見ていきたい。その際に、他の研究者による優れた成果や私の若干の補足を加えていく。

土地があまり肥沃でなく生産性の乏しい寒村を想像してみよう。その農村には最下層の極貧の小作人——図1のなかのA——がいる。彼らは一四世紀になってからの食糧不足のために、そうした痩せた土地で生きていかねばならな

図1 黒死病による階層変動

黒死病でどれだけの人が死んだか



かった人たちであった。そこは耕作に決して条件のいい土地ではなかった。彼らは、黒死病が発生する前は、そこで地主に雇われて小作人として働くものの、痩せた土地の収穫だけでは食べていけずに、都市で労働者としても働いていた——彼らはムーネの登録や記録から漏れた存在である。よって現代の研究者からも見落とされ、人口の分母に入られない存在である。図1のピラミッドでは、史料からは見えない水面下の存在である（線分abの下の網掛け部分に位置する）。

そうした寒村に黒死病が発生し、彼らの多くは疫病死したが、同時に彼らを雇っていた地主や、近隣の自営農民など、多くの人びともまた疫病死したために、その村では誰も耕すことのない耕地（といっても、この場合あまり肥沃でなく生産性の乏しい耕地である）が発生しただろう。しばらく放っておかれ荒地地に化していたかもしれない。そこで、生き残った、もとは極貧状態の小作人や転借人や全く土地に縁のなかった農民は、そうした農地に容易に入り込んで、それを取得したことであろう。彼らは、極めてわずかな値段で合法的に空き家や農地を購入したかもしれない

### 黒死病でどれだけの人々が死んだか

が、どさくさの混乱のなかで不法に取得したかもしれない。こうして、彼らのなかには「赤貧の小作人」という地位から、**B**や、さらに**C**の「安定した小作人」という地位にのし上がることができた者もいたと考えられる（そうして、次に安定した小作人、あるいは自営農民として、課税の対象者に加えられることになる）。

黒死病後に、なぜ多くの村が廃村になったか

しかし、そうした、もともとあまり肥沃でない寒村の場合、生き残った住民は、思い切ってそこを見捨てて、その村を「廃村」にした場合もあった。実際、黒死病でヨーロッパの多くの国で数千もの廃村が発生した。たとえば、トスカーナ地方のピストイアの農村部の場合、平野部・丘陵部・山岳部と三分類に分けて、具体的にどのように廃村化がうまれたかを見ることができる。これもまたハリーヒーのピストイア研究の成果である<sup>68)</sup>。

ピストイアにおける黒死病による廃村の数

平野部	黒死病前	一二共同体	↓	黒死病後	九共同体（廃村三）	減少率	二五パーセント
丘陵部	黒死病前	二五共同体	↓	黒死病後	一五共同体（廃村一〇）	減少率	四〇パーセント
山岳部	黒死病前	二四共同体	↓	黒死病後	二〇共同体（廃村四）	減少率	一七パーセント
全体	黒死病前	六一共同体	↓	黒死病後	四四共同体（廃村一七）	減少率	二八パーセント

なぜ疫病後に多くの村に誰も住まなくなり、廃村になったのか。もちろん村人が一人残らず疫病死した場合もあつ

たかもしれないが、むしろそれは稀である。というのは、ペストに罹らなかった者もいた上に、たとえばペストに罹病したとしても、その致死率は一〇〇パーセントではなかった。一三四年のペストのデータはないが、一六〇九年の一〇年のバーゼルに発生したペストについて、ある医師がデータを提供してくれている。彼によると、疫病に罹病した者たちの致死率は「約六〇パーセント」であつたという<sup>69)</sup>。だから運良く生き残つた者たちは、これまで住んでいた痩せた土地や山間の耕地を捨て、もっと肥沃な、生産性の高い耕地に移つたのである。肥沃な農地では、地主や領主から、賃金や住居やその他の色々な面でもっと良い条件を提示されたのである。なにしろ、地主にとっては、耕作する小作人が半減したために、みずから所有する農地の半分かそれ以上が、耕作されずに荒地と化していたからである。地主は、なんとしてでも人手を確保しようとしたことであろう。ここにおいて小作人は引く手あまたであつた。場合によっては、小作人のなかには、運良く土地を合法または非合法に肥沃な農地を獲得して、一気に自営農民にのし上がった者もいたかもしれない。

あるいは、貧しい寒村にいた小作人の家の場合、たとえば次男や三男の若者は、季節労働ではなく、全面的に都市に移住して、(農村よりも)高賃金の得られる都市の無産労働者となつた者もいただろう。幸い、都市では、これまで人手不足から賃金はうなぎのぼりに高騰したのである。このことは、シエナなど多くの都市で賃金抑制条例が頻繁に発布されたことからわかる<sup>70)</sup>。さらに、富裕化した人びとは金遣いが荒くなり贅沢に走り、都市当局は奢侈禁止令を乱発したのである<sup>71)</sup>。実際、史料からわかるのだが、都市部においてペスト後の数年間に農村部からの流入による人口増加が多く認められるのである(これは第三章の各論研究で示される)。あるいは彼らのなかには、うまくいけば、都市で市民権を持つ下層市民(手工業者等。組合で言えば「小組合」に加入)にのしあがつた者も出たかもしれない。

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

ない。黒死病によるシエナの社会的影響を論じたW・ボースキーは、ペスト後の都市への流入は下層民、農民であったという。一三四九年の五月の立法は農民をコンタードから切り離して都市に迎える推進力となったという<sup>(73)</sup>。

しかし、研究者プレスナーによると、都市に移った人びとは、「極貧の者」だけではなく、彼らと共に、小都市のかなり「富裕な者」も含まれていたという<sup>(73)</sup>。黒死病の直後の混乱と社会変動のなかで、貧富の際だった対照的な二種類の人びとが、同時に都市に移動したのである（富裕層については少し先で触れよう）。

瘦せた農地ではなく、もともと肥沃な農地にいた小作農はどうだったろうか。彼らのなかには、その農村にいた地主や自営農たちが多数疫病死したために、空き家になった家や、所有者のなくなった農地やブドウ畑を、合法もしくは不法に獲得したことだろう。こうして、勞せずして小作人の身分から脱して肥沃な農地の自営農民になるか、たとえ小作人であっても以前よりずっと多くの収入の得られる農民にのし上がった者が出たのである。イングランドの場合は、同じ小作人であっても、一八エーカー以上の（すなわち、ほかの副収入の仕事をしなくても済む）豊かな土地を与えられ、安定した小作人になったことだろう。

また、肥沃な農地を有する農村部において、もともと比較的裕福であった農民（図1のC）や、やや小規模な都市（服属都市など）に住んでいた市民はどうであっただろうか。黒死病直後、フイレンツェのような大都市は、黒死病によって大量の死者を出し、都市の経済は停滞の極みにあったことから、経済の活力の回復のために都市の周辺の人びと、とりわけ富裕層を精力的に誘致する政策を展開したのである<sup>(74)</sup>。人口回復をねらう大都市の政府から、免税等の優遇措置、市民権の授与などの提案を受けて、彼ら富裕農民や近隣の都市の豊かな市民は、大都市での富と地位を求めて、野心的に大都市に乗り込んだのである（このためアレツツォ、ピサ等は人口減少した<sup>(75)</sup>）。そこで彼らは、

市民権を得て、職人・手工業者や小売業者（『日記』の著者ランドウッチの父親——ディコマーノの出——は、おそらくこれに相当する）や、さらに、その資力に応じて中層または上層の市民になった。憧れの都市の「市民階級」にのし上がることができたのである。彼らのなかには、毛織物業に関わる商会（商事会社）などを開設することが可能となった者もいたであろう。その際、彼らは出身地の農村にもともと所有していた農地・ぶどう園は売却せずに、そのまま地主として所有し、そこで契約によって小作人を雇った（小作人が激減したことから、かなり好条件を出さねば獲得できなかったが）。その契約は、収穫の半分をふつう現物として獲得したのである（折半小作制）。現代まで続く折半小作制（メッザドリリア制）の形成・発展は興味深いものがある<sup>76)</sup>。また、夏になって都市に周期的にペストがやって来るようになると、都市を逃れ、生まれたふるさとの田舎などに逃げて、その別荘で過ごしたかもしれない。なお、夏のバカンスの習慣は一四世紀に始まるといわれるが<sup>77)</sup>、ことによると、夏にペストから逃れて田舎暮らしをするこの生活様式が、夏のバカンスの習慣につながったのかもしれない。

## （二）都市部における階層変動

同じような階層移動——階層的上昇——は都市民の間でも起こった。「疫病が発生した家には、しばしば一家全滅の場合があった<sup>78)</sup>」（年代記作家コップ・ステューファニ）という事態では想像以上のことがあり得た。この事態において、都市の住民のなかでもペストに生き残った下層民のなかには、人手不足の状況から、独立した職人・手工業者の地位にのし上がる者が出ただろう。「小組合員」程度の下層市民（図1のD）のなかには、その空洞化した部分、すなわち中層市民階級（図1のE）に上昇的に参入して経済的、政治的に身分を高めた者がいたことだろう。ここで

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でただけの人が死んだか

も、空き家となった家を法的、もしくは不法に獲得したことだろう（当時、たまたま名字が同じというだけで空き家の遺産相続を主張し、それを獲得した者がいたといわれる）。

そして、もともと都市の中層の生き残った市民層、およそ「中組合」程度の構成員（図1のE）は、上層の市民層のなかの半数の空洞化した部分図1のF）へ上昇的に参入したことだろう。さらに、都市の上層の市民層のなかの生き残った層（図1のF）の一族のなかには、最上層の最も指導的な市民層（図1のG）にのし上がり、経済力とともに、政治権力をも獲得する一族が出てきたのである。流動的なこの時代はそれを許したのである。

すべての者や家がこのように機械的にワン・ランク上にうまく上昇したわけではないにしても、半数程度の者によるこうした上昇傾向は基本的傾向であつただろう。それが一年や二年ですぐに起こつたとはいえないにしても、数年程度やもっと長い年月を要して生じたことであろう。人口が半減するという前代未聞の大混乱では、「家の断絶」（ヨロツパでは婿入りによる家督相続は認められず、家は途絶えた）、「都市への大移動」、「遺産相続や詐欺」、次男以下の子を残った者による「家督の相続」が容易に生じたことだろう（「家督の相続」は、フィレンツェのモレッリ家に具体例を見ることができ<sup>四</sup>）。また、マルサス主義的な現象（すなわち、人口減少の後に反発的に人口増加が生じる現象）である「結婚のラッシュ」と結婚の低年齢化とそれにとまなう「ベビーブーム」はこの時代の多くの年代記作家が記述している社会現象である。さらに野心的な者による、より上位の職業への転職や、より上の身分への上昇などはいかにある得たことである。こうした階層変動と人びとの生活の変化について、同時代の年代記作家ステューファンは実際こう記している――



この疫病はすでに述べたように、一三四八年の五月に始まったが、その年の九月に終息した。人びとは都市に戻り始め、家のなかに入って家具の具合を調べ始めた。しかし、財産がいついかにあっても、そこに主人のいない家が数多くあった。それを見て人は茫然自失に陥った。間もなく財産を相続する者が姿を見せ始めた。こうして疫病前には一文なしだった者が、相続人として金持ちになった。このため疫病の前には何も所有していなかった者が金持ちになった。それらの財産は実は彼らのものでなかったように思われたのである。こうして相続人として不適格と思われる人が、男も女も、衣服や馬に金をかけて贅沢な暮らしを始めた<sup>(80)</sup>。

ここで人口の正しい測定のために注意すべきことがある。くだいようだが、それを最後に繰り返して述べておこう。従来の歴史人口学者がその人口測定において看過したものが、この階層変動であった。その見誤った測定において、「見えざる貧民」は、二度無視され、そのために二度正しい人口測定を狂わせたのである。つまり、黒死病前には、彼らは租税の対象でなかったことから、存在が見えずに無視され（「一度目の無視」、黒死病後に、ワン・ランク上の階層に上昇し、そこで租税台帳に載せられ、あたかもその階層にもともと疫病以前から存在していたかのように扱われて無視されたのである（「二度目の無視」）。一度目の無視では、黒死病前の総人口が実際よりも少なく測定されることで人口測定を狂わせた。二度目の無視では、彼らは、実際には黒死病で死亡してしまったワン・ランク上に位置していた人びとと誤って同一視され、疫病による死亡者がなかったかのごとく扱われ、実際の人口減少を見落として、黒死病死亡率を低くしてしまった。この二重の見誤りを是正するだけでも、黒死病死亡率はかなり高まるであろう。ベネディクトーはフランスのプロヴァンス地方の人口測定の場面でこういつている――

黒死病直後における労働者階級の生き残りメンバーは、空になった立派な住居へと移り住み、もっとも良い職業へと転職し、

黒死病でただけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

しっかりと記録される納税者階級に参入したに違いない。これらの租税台帳には、以前は貧民社会層にいた人びとが登録されたが、その貧民社会層の人びとの多くが以前は「無税であったがために」台帳登録係に見過ごされていたことは疑いない。しかし、今では彼らは新しい社会的身分で登録されたことであろう。この動きは、黒死病の衝撃のいくらかを覆い隠すように作用したかもしれないのである<sup>例</sup>。

# (1) 注

三省堂『世界史B』（改訂版（二〇〇九年））は、黒死病については、当時の飢饉の流行とセットにして触れ、この両者による人口減少の影響を領主の荘園経営の立場から触れる程度である（ただ地図「ペストの流行と農民反乱」を添えて、黒死病と反乱の関係を示唆している）。黒死病そのものによる死亡率には言及せずに、人口が「激減」したと述べる。すなわち――「西ヨーロッパ全域で黒死病（ペスト）の流行や飢饉がたびたびおこって、人口が激減すると、領主は労働力確保のためにも、農民の待遇を改善せざるをえなくなった」（九七頁）。ここでの黒死病についての記述は六行程度。山川出版『詳説世界史B』（二〇一一年）は、人びとが黒死病で埋葬される図版やユダヤ人の迫害の図版を示し、「この病気により、当時の西ヨーロッパの人口の三分の一が失われたという」（一四八頁）。ここでは黒死病についての記述は八行程度。また、同じ山川出版社がもうひとつの世界史の教科書『新世界史B 改訂版』（二〇〇九年）を発行しており、そこでは、一世紀からの社会の流れを展望するなかで黒死病を詳しく位置づけ、死亡率については、他の教科書と若干異なった表現をしている。「イギリス・フランスでは人口の半分近くが死亡し、西ヨーロッパの人口はほぼ三分の二に減少した」（二一〇頁）。黒死病についての記述は一七行程度。以上の教科書と比べて、非常に詳しく黒死病の影響を記述している教科書のひとつが、東京書籍『世界史B』（二〇一一年）である。黒死病がもたらした宗教絵画《死の舞踏》（同図版を添える）について半ページにわたって詳しく紹介し、当時の宗教的心性にも触れている。さらに、季候史的な背景や黒死病の流行の経緯にも触れる。「全般に低温多湿であった一四世紀から一五世紀にかけてのヨーロッパでは、天候不順の年が多く、しばしば凶作や飢饉に見舞われた。さらに事態を悪化させたのは、黒海沿岸部との交易からイタリアに入り、一三四八年にはヨーロッパ全域に流行したペスト（黒死病）であった。三年あまりの流行で、全人口の三分の一が失われたと推定されている」（二六一頁）。黒死病に

ついでに記述は約二七行にも及ぶ(図版三点。うち一点は黒死病の拡大の地図)。このほか、清水書院『世界史B』(改訂版)(二〇一一年)も非常に詳しい。そこでは「民衆の歴史」という「コラム」で一頁全面を使ってペストを扱う(図版三点。一点は「隔離病棟」。ペストの生物学的原因のほかに、古代から現代までの流行の歴史、中国や日本での疫病の歴史にまで触れており、「一四世紀の黒死病」というよりも、「ペストと人類の歴史」という大きな観点から記述している(二五行程度)。しかし、一四世紀の黒死病の死亡率については何も触れていない。また、「コラム」のなかで言及し、本文のなかでは「黒死病」は言及されていない。それに対して通史のなかでペストの重要性を有機的にまたバランスよく要素要素で扱い、地理感覚も高いのが帝国書院『新撰世界史B』(二〇一一年)である(本文一五行、コラム三箇所、絵画『死の舞踏』、商業路とペスト拡大の大きな地図)。「ペスト(黒死病)」は、交易ネットワークを通じて広い範囲に流行し、ユーラシア西方を襲って、西ヨーロッパの人口の三分の一を奪った(二〇三頁)。

- (2) *Encyclopedia of Plague and Pestilence, from Ancient Times to the Present, revised edition*, ed. G. C. Kohn, New York, 27. のほかに、「三分の一」程度の死亡率を提示する有力な研究者としてW・H・マクニールがいる(原著は一九七六年刊行。邦訳は最初一九八五年に新潮社より刊行)。以下のように述べている。「一三四七年から五〇年まで四年間のヨーロッパ全体のペストによる死亡者数をなんとか出そうとすれば、全人口の約三分の一が死んだということが言えよう。……英国諸島については、二世代にわたる多くの学者の努力によって、次第に確実と思われる数字の可能性が狭められ、人口減は二〇パーセントから四〇パーセントの間の或る数値というところまで分かっているのである」(マクニール、『疫病と世界史』(下)中央公論社 二〇〇七年 三六頁)。

- (3) 同時代の人による推定を紹介すると、クレメンス六世に宛てた使節による推定は、「キリスト教徒」のうち「一三八四万人」が死亡したという(もし七五〇〇万人がその総人口なら「二一パーセント」となる)(Gottfried, *The Black Death: Natural and Human Disaster in Medieval Europe*, New York, 1983, 77.)。同時代の年代記作家フロアサルも、「世界の少なくとも三分の一の人びとが死んだ」と推定している(U. Froissart, *Chronicles*, ed. and tr. G. Brereton, London, 1968, 111.)。

- (4) J. F. D. Shewsbury, *A History of Bubonic Plague in the British Isles*, Cambridge, 1971, 36.  
ミース(中森義宗訳)『ペスト後のイタリア絵画——一四世紀中頃のフィレンツェとシエナの芸術・宗教・社会——』中央大学出版会 一九七八年。

黒死病でとれだけの人が死んだか

黒死病でとれだけの人が死んだか

- (6) Ole J. Benedictow, *The Black Death, 1346-1353: The Complete History*, Woodbridge, Suffolk: The Boydell Press, 2004, 380, 395-413.
- (7) 242-384.
- (8) ベネディクトーは、“social mobility”, “socio-demographic movement” (社会人口学的動向) などと呼んでいる (Benedictow, 319)。
- (9) 『カタスト』を解析したハーリービーとクラビッシュジュズベールは、一五世紀初頭のフィレンツェの移動労働者についてこう言う——「移動労働者の現象を特定するのは、いっそうむずかしいが、地域間の行き来や、農村部から都市部への人の移動は、非常に多くの人びとがどうやら関係していたようだ。一四二五年の登録から、フィレンツェのコンタードの南西部からフィレンツェの都市の中心部への流れがわかる。しかしまた、目立った割合の人びとが、西の高地の農村部から、ずっと先のピサのマレンマ「湿地帯」まで移動した。人びとは、季節ごとにけもの道をたどってアッペニーノ山脈と沿岸部の間を移動してきたようだ。貧しい山地からもっと豊かな低地への移動は、地中海に生きる人びとの絶えることのない生活の特徴であるようだ。」(112)
- (10) 関哲行『旅する人びと』岩波書店 二〇〇九年 二四六〜二四九頁。
- (11) *The Society of Renaissance Florence: A Documentary Study*, reprinted in Toronto, Buffalo, London, 2001, ed. G. Brucker, chap. 70, 153-155.
- (12) Benedictow, 381.
- (13) 326.
- (14) 250. ベネディクトーは《中世のヨーロッパの平均余命は二五年以上にならない》と強調して前近代社会と近代社会の相違を強調し次のようにいう。「昔のヨーロッパの人口は、二〇世紀前半の発展途上国の人口統計と大いに共通していることに留意すべきである。コールとデミニーの二人は、一九一一年のインドでの国勢調査に関して、《昔のヨーロッパの人口は》不確定なところは明らかに存在するものの、誕生時の平均余命が、最大で二二年から二四年であったという見込みは正当なものとされる》と考えている。たとえば、一七〇〇年頃のフランスでの誕生時の平均余命は二五年であったが、一方フランス革命時には二九年にまで著しく増えていた。同様に、一八世紀のイタリアにおいて、平均余命は二〇年から二五年の間を上

下しており、三〇年の境界に達することはめったになかった。このことは、中世の人口の体制がイタリアですつと長く続いたことを示している。たぶん、その理由は、近世イタリアにおいて、経済的、社会的な後退があったからであろう。T・ベームは、一六六〇年代に行われたノルウェーのすべての男性の国勢調査を含む記録を研究した。そして記録中に含まれる大まかなデータに基づいて、誕生時の平均余命は二六年であったことを明らかにした。もし、乳児や幼少期の子供の重大な登録もれや、年齢の明らかな切り上げ（というのは、高齢は当時では名誉なことであり、ある年齢層では、兵役資格者であることを除外するためにも、年齢の切り上げは利用されただろう）があることが考慮されるならば、ここで明らかにすることが、平均余命は二五年を越えたはずはなく、もつと低くなったかもしれないのである。」(Benedictow, 250.)

産褥死は中近世の既婚女性の死亡率を高めた最も大きな要因ひとつであった。以下、一五世紀初頭のトスカナ地方についてのハリヒーとクラピッシュスベールの研究を紹介する——「出産時の危険性は特筆に値する。我々の手元にある埋葬者のリスト『墓掘人の報告から作成されたフィレンツェの『死者台帳』のこと。死者の数や死因が報告された』について、記載が失われた時期を調整することで可能な推定をすると、一四二四年、一四二五年、一四三〇年の三年間では、女性の出産時における死亡者数は五二人であった。これは、年間の平均死亡者数として、平均一七・三人である。この三年間において、どの年も大まかに一二〇〇人の赤ん坊が生まれていたと想定しよう（ただし、一四二七年には、一〇八八人の赤ん坊が、一歳未満の乳児としての一覧に記録されていたが、この数字は、赤ん坊が死産であった場合に記録されなかったことや、生後一〇カ月や一一カ月でも「一歳」と報告する傾向があった理由から、実際にはもつと多めに修正されねばならない）。この頃のフィレンツェ市の母親の死亡率は、一〇〇〇人の出産に対して一四・四人だっただろう。出産する女性の六九人にひとり、分娩時の困難さのために命を落としている。フィレンツェの既婚女性のうちその死亡の約五分の一は、出産がらみであったようだ。」(David Herlihy and Christine Klapisch-Zuber, *Toscans and Their Families. A Study of the Florentine Catasto of 1427*. New Heaven and London, 1985, 277.)

(17) P・グベール（遅塚・藤田訳）『歴史人口学序説 一七・一八世紀のボーヴェ地方の人口動態構造』岩波書店 一九九二年 二四～二五頁。

(18) A. J. Coale and P. Demeny, with B. Vaughan, *Regional Model Life and Stable Populations*. New York, 1983. コールとデメニーは、年齢別死亡率や平均寿命を知る手段として標準生命表を作成した。余命は人種、民族によって異なると考え、そのパターン

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

を大きく四つ（北型・南型・東型・西型）に分類し、さらに地域や国や男女の傾向を反映させて標準生命表を三二六種類作成した。コールとデメニーはいう——「数年前に「人口調査研究所」でこれらの生命表の予備的な版を計算した時の直接の目的は、ともかく、不完全で不正確でしかない資料ばかりが存在する人口調査において、出生率・死亡率・大まかな年齢分布を推定することだった。オイラーは、先に挙げた項目においてそのような方式による推定を提案した。ロトカは、生命表によって意味された「一定年齢」とイングランドとウェールズの自然増加率がいかに密接に一致しているかに気づいた。そして、第二次世界大戦以来、いわゆる開発途上国において年齢配分が「一定年齢分布」とあまり変わらないという証拠が認められたので、「一定人口（stable population）」（一定の出生率および死亡率による人口分布）への関心が復活したのである」（*Regional Model Life*, 31）。こうした目的から出発したコールとデメニーの研究について、ベネディクトーは中近世の人口に役立つものとしてこう評価する——「この二人の研究者は、人口統計学者が遭遇した発展途上国に関する問題の対処が念頭にあったにもかかわらず、二人の研究は、歴史人口学の研究にも役立つものである。その研究は、不完全あるいは不正確な近世または中世の人口統計学的資料を補い、それらの資料をより全体的な人口統計学の展望に組み込み、たいいていは幼児や子どもたちに関する、人口についての年齢の範囲における空白を補い、有効に知られている人口統計学のシステムを用いて、たとえば五〇歳から五四歳の同年代のコーホートにある男性の割合のような、社会における具体的な年齢の人口の割合を示してくれる」（Benedictow, 249）。

(19) 「子どもの高いペスト死亡率」という観点から、以下において、ハリヒーの見解を中心に補足する。

まず、ハリヒーとクラピッシュズベール（共著）によると、子どものペストによる死亡率はかなり高かった。一五世紀初頭のペストの事例であるが、成人と子どもの死亡率の違いが次のように示されている——「一四二四年のペストは、フイレンツェではかなり軽いものであったが、その間の子どもたちの死亡率は、一〇〇〇人あたり約一〇三人にまで急上昇した。これは、比較対象の成人の死亡率（一〇〇〇人あたり五三人）の約二倍である。しかし、ペストが全くやって来なかった一四二七年には、子どもの死亡率は一〇〇〇人あたり、たったの一人であった。これは、成人の死亡率（二〇〇〇人あたり一人）よりずっと低い数値である」（Herlihy and Klapisch-Zuber, 273）。

また「ハリヒーはその単著（D. Herlihy, *Medieval and Renaissance Pistoia. The Social History of an Italian Town, 1200-1430*, New Haven and London, 1967, 109-112.）において「十五世紀のペストの關係」について以下の如くに述べている。これ

は、具体的で、非常に示唆に富むもので、長くなるが、引用する。

一四〇〇年において、ペストの猛威のさなかに公証人セル・パオロ・ドミーニチは犠牲者の数を数え、彼が書いた死体についての一覧表は、彼の兄弟で公証人でもあるセル・ルーカの年代記に組み込まれた。もちろんセル・パオロはすべての死体を記録することができたわけではなかった。というのも、彼はようやく五月になって死体の数を数えはじめたように思われるからである。とは言ってもペストは前年の秋以来、ずっと犠牲者の命を奪い続けていたのである。さらに、死者に関して彼が与える情報は、全く完全なものでもなければ、また一貫したものでもない。一つの教区の死者は名前によって特定することができていない。そして四つの他の教区の犠牲者については、名前は確認できるとは、それらが父親であったのかまたは母親であったのか、息子または娘であったのか、世帯主またはその一員であったかどうかについて、なんら表記されていない。セル・パオロは、三三三四体の死体を見たと述べている。さらに彼は教区によって二三〇一体の死体を確認しているが、そのなかで、彼が詳細な情報を与えることができたのはわずか一六二五体にすぎない。

セル・パオロの死者の調査はこうしたことから、完全なものではないけれども、彼の目録はそれでも重要であり、ある程度の正確さを持つてペストの特徴的な犠牲者を特定するという希有な機会を与えてくれるのである。

一六二五体の死者のうち、四三〇〇体は明確に「子ども」(*fanciulli* 男の子、または *fanciulle* 女の子)と表記されるか、あるいはまだ若い年代であることを示す他の名称 (*nipote* 甥、*garzone* 男の子、*fante* 「ちび」(少年)、*giovane* 若者)で表記されていた。さらに多数を占める七一〇人の死者については、彼ら自身の名前ではなく、彼らの家に住む世帯主の「息子」や「娘」として表記された。またこれらの「誰かの息子」「誰かの娘」と表記された人の中の少数は成人であっても、まだ両親と一緒に住んでいたかもしれない。しかし、我々は一四二七年の都市の一世帯の標準人数がたった三・六人であることを知っている。それは明らかに、結婚した子供または成人した子供であっても、都市で長い間彼らの親と一緒に住み続けていたという事例は極めてまれであることを示している。自身の世帯を持たない、または彼らの父親の名前によってのみ識別されているこれらの七一〇人のペストによる犠牲者は、その大多数が子どもであったに違いはないと考えられる。そして名前が付いている一六二五人の犠牲者のうち、四八五人の犠牲者だ

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

けが、一家の世帯主や女主人として、さらにまた疑いなく成人として記載されているのである。

こうしたことから、『疫病台帳』に記載されている統計によれば、名前が付いている一六二五体の犠牲者のうち、およそ一一四〇体、すなわち全体の七〇パーセントが、その時点で親に頼って住む幼児または子供であったと考えられる。このような幼児の大量死とともに家族全員が死に絶えたことは間違いなく、セル・パオロは死体リストの中で次のように裏付けた。彼の記述を読むと「彼の息子であるクッラドと五人の子どもたち」と記されている。他の記述には「彼の息子であるラッゼロの妻と五人の子どもたち」と記されている。ペストの犠牲者のうち三〇パーセントにあたる四八五人は確実に成人であり、その多く、おそらく大半が老人で、間違いなく彼らのうちの何人かは、すでに衰弱していたといえる。他のペストについての記述は同様に、統計上厳密さに欠けるものの、幼児たちと老人たちが多数、ペストの餌食になったことを示唆している。一三四八年のシエナでは、五万二〇〇〇人のペストの犠牲者のうち、三万六〇〇〇人、すなわち優に七〇パーセントが“vechi”[sic]すなわち老人であると記述されていた。同じ年、シエナ人の年代記作家アーニョロ・デイ・トゥーラは自らの手で彼の子ども五人全員を埋葬した。一三四八年のピストイアでは、後年の歴史家によって保存されていた記述によると、ペストは「若い世代の人々」をまっさきに襲ったとある。一四〇〇年のペストにおいては、多少誤った文章の中で、セル・ルーカは「全く手の施しようがなかった」のはとりわけ「幼児・子ども」と「すべての世代の老人」であったと述べている。そして幼児と老人が特徴的なペストの犠牲者であったことは、一四二七年の『カタスト』（資産調査）について我々が想定していた通りの結果であった。

青少年よりも子どもと老人、「カタスト」から判断して）裕福な人よりも貧しい人が、ペストの主たる犠牲者として考えられ、この死亡の傾向はペストの影響を考察することの中で最も重要である。言い換えれば、ペストが穏やかに作用した人びとは、すなわち、成人した若者（彼らは同時に人口の中で最も経済的な役割を担っていた）、実業家、労働者、納税者、行政官、そして（おそらくこれが最も重要だが）子どもを出産する女性であった。このことは、最初のペストの衝撃の後、なぜ経済と行政は、あれほど素早く安定した状態を保つことができたかをうまく説明してくれるのである。たとえば、フィレンツェでは、ペストは都市の歳入に長く続くような影響を与えるほどのことはなかった。というのも、実際に一三五〇年まで歳入はペストが起ころ以前よりも実質的に増えていたし、その後も災害は



繰り返されたのにもかかわらず、歳人はこの世紀を通じて増え続けた。もし納税者の数が実際に二分の一から三分の二まで減ったとすれば、このようなことはほとんど不可能であったと思われるだろう。そして出産する女性たちが多数ペストから救われて、これまで見てきたようにペストそのもののおかげで出産が強く刺激されて、人口は、比較的短い期間で再びその数を回復すべきであったが、時には実際回復した。このことこそが、どうして「人口が減少した時期」と、「ペストと飢餓の時期」とが、かならずしも正確に一致していないことをうまく説明してくれるだろう。ビストイアでは、少ないながらも目につく人口減少は、農村部において一二五〇年以前、すなわち自然災害の報告が次々と年代記を埋め尽くす以前から、すでに始まっていたのである。そして一五世紀のペストは、一四世紀のペストに対してその毒性と菌力においてほとんど負けてなかったように思われる。しかし一五世紀のペストは、一四世紀のペストがもたらしたほどの深刻な人口減少という結果には至らなかったのである。

- (20) S. K. Cohn, *The Laboring Classes in Renaissance Florence*, New York, 1980, 71.
- (21) G. A. Brucker, "The Florentine Popolo Minuto and Its Political Role, 1340-1450," in *Violence and Civil Disorder in Italian Cities*, ed. Lauro Martines, Berkeley, 1972, 157.
- (22) Herlihy and Klappish-Zuber, 101.
- (23) ブラッカー（松本典明、森田義之訳）『ルネサンス都市フィレンツェ』岩波書店 二〇一一年 六三頁。
- (24) G. Villani, *Cronica*, VI, XCIV.
- (25) X, XXII.
- (26) B. Pulan, "Plague and Perceptions of the Poor in Early Modern Italy", in *Epidemic and Ideas : Essays on the Historical Perception of Pestilence*, ed. T. Ranger and P. Slack, Cambridge, 1992, 107.
- (27) A. Corradi, *Annali delle epidemie occorse in Italia dalle prime memorie fino al 1850*, Bologna, 1972, vol.I : 314 ; Carmichael, *Plague and the Poor in Renaissance Florence*, Cambridge, 16. ヴェネツィアの食と疫病については、永井三明『ヴェネツィアの歴史——共和国の残照——』（刀水書房 二〇〇四年 一四五頁）を参照。
- (28) 阿部謹也『蘇える中世ヨーロッパ』日本エディタースクール出版部 一九八七年 一四七頁。
- (29) G. Calvi, *Storie di un anno di peste : comportamenti sociali e immaginario nella Firenze barocca*, Milano, 1984, 33-34.

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でそれだけの人が死んだか

- (30) 石坂史料集(四) 第一八章「フィレンツェの書記官長サルターティの疫病論『都市からの逃亡について』(一三八三年)一六四頁。
- (31) ピュランはこう言う——「感染の恐れは、浮浪者やおそらくは売春婦をも周縁的地位に追いやる力のひとつであり、その地位においては、同情は全く許されなかったのである。そして、疫病が続いている間、彼らは排除、または隔離、監禁の際だった候補者となった。後に梅毒を広めたという理由で非難されることになる前から、イタリア、フランスでは売春宿は、疫病の感染の潜在的中心として襲撃されたのだ。」(Pullan, 113.)
- (32) Corradi, I, 183.
- (33) 222-223.
- (34) 229.
- (35) Herlihy, 105.
- (36) G. Ripamonti, *La peste di Milano del 1630*, Bologna, 2003, Libro Primo, 25-40.
- (37) デイヴィッド・ハリービーは「特異な考え方を表明している。飢饉がもたらす栄養失調が、かならずしもベストと直結するものではないと考えて、次のようにいう——「〈飢饉と黒死病〉、〈栄養失調と病気〉——この両者の間に直接的な連鎖は存在しないように思われる。ある状況において、栄養失調は感染に対する予防として働くことさえありうる。バクテリアは、その宿主である人間と同じくらいに栄養物を多く必要とする。これらの栄養となる食べ物が不足した時、細菌は増殖できない。説得力をもって証明はできないにしても、次のように言うことができる。すなわち、主に月経中の女性や成長期の子どもなど、貧血の傾向にある人は、伝染病に対する免疫をもっており、血液中に十分な鉄分がないために、細菌はすばやい増殖をおこなうことができないのである。」(D. Herlihy, *The Black Death and the Transformation of the West*, ed. By S. K. Cohn, Cambridge, 2001, 33-34.)
- (38) 石坂史料集(一) 第二章「モレツリ『回顧録』より——あるフィレンツェ商人の考える疫病対策と健康法——」三三頁。
- (39) *Cronaca di Matteo e Filippo Villani*, tomo. I, cap. II, 8, Roma, 1980.
- (40) Pullan, 114.
- (41) Luigi da Porto, *Lettere storiche dall'anno 1509 al 1528*, ed. Bartolomeo Bressan, Firenze, 1857, 328; Pullan, 114.

(42) Pullan, 107-108.

(43) ボッカッチョ(野上素一訳)『デカメロン』(一)岩波書店 一九七一年 六〇頁。

(44) 「プロヴァンスの人びとの六〇パーセントが黒死病で死んだ。その死者は、主に黒死病に感染したことで死んだが、ある程度の者は、黒死病による二次災害の影響によって死んだのである」(Benedictow, 313.)

(45) 382.

(46) W・H・マクニール『疫病と世界史』(下)中央公論新社 四一〜四二頁。

(47) 四一頁。

(48) A. G. Carmichael, 101.

(49) 石坂史料集(一)第二章「トンマーズ・デル・ガルボ『疫病に対処するための勧告』より」四二〜四三頁。

(50) Pullan, 109-110.

(51) 石坂史料集(四)第十八章「フィレンツェの書記官長サルターティの疫病論『都市からの逃亡について』(一二八三年)」Carmichael, 101.

(52) 「禄付き教区司祭が、一般民衆よりもはるかにいい家に住んでいたという事実の重要性は、一般的に見過ごされているが、これは重要な疫病的側面を持っている。というのは、禄付き教区司祭は、石造りの家に住んでいる限り、また、その家があるとえ半木造の家であった場合でも、かなりの程度まで、その住居には小作農の家ほどにはネズミの群れは住み込んでいなかっただろう。こうしたことから、疫病の流行時において、司祭は夜や食事の時や、また余暇や休息の時に、家にいた時も、小作農ほどにはネズミノミにさらされることはなかっただろう。この点もまた、年代記のなかでフォードンのジョンが述べたこと、すなわち、スコットランドにおいて『貧しい者や民衆は等しく疫病に襲われた一方、有力者はめったに襲われることはなかった』という趣旨の記述と一致する」(Benedictow, 349.)

(54) Herlihy and Klapisch-Zuber, 100.

(55) Benedictow, 342.

(56) 343.

(57) 348.

黒死病でそれだけの人が死んだか

黒死病でとれだけの人が死んだか

- (58) Herlihy and Klapisch-Zuber, 95.  
〔奉公に来た〕少女たちは、ほかの何よりも、嫁資を貯めようと努めた。彼女たちの雇い主は、『必要となる年齢になったら』《その身分》に見合った嫁資を支払ってあげるとしばしば堅く約束していた。雇い主は、時には、彼女たち奉公した年月の期間によって、給料の代わりに必要となる寝台や嫁入り道具を与えた。〕(Herlihy and Klapisch-Zuber, 136-137.)
- (60) 113.
- (61) Giovanni di Pagolo Morelli, in *Mercanti Scrittori, Ricordi nella Firenze tra Medioevo e Rinascimento*, a cura di Vittore Branca, Milano, 1986, 181-182.
- (62) Herlihy and Klapisch Zuber, 113.
- (63) Benedictow, 284.
- (64) 302.
- (65) Baraier, *La démographie provençale du XIII<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1961, 82.
- (66) Benedictow, 348.
- (67) 「クルタンは、ペストによって引き起こされた人口減少のなかに『銀色の裏地』があると感じていた。すなわち、その銀色の裏地とは、生き残った者に与えられた大きな頭割りの財産であり、この富の力こそが、ルネサンスとプロテスタント宗教改革をもたらすのに役だった力であると、感じていた」(Gottfried, xiv.)。
- (68) A. Cipriani, *A peste, fame et bello libera nos. Domine. Le pestilenze del 1348 e del 1400*, Pistoia, 1990, 10-11.
- (69) Herlihy, 106-107.
- (70) P. Pirillo, “Peste nera, prezzi e salari,” *La peste nera : dati di una realtà ed elementi di una interpretazione. Atti del XXX Convegno storico internazionale*, Todi, 1993, 205-206 ; Horrox, 240 ; W. Bowsky, “The Impact of the Black Death upon Sienese Government and Society”, *Speculum*, XXXIV, 1964, 30.
- (71) 石坂史料集(六) 第二〇章「葬儀費用抑制のための条例(一四七三年)——フィレンツェの奢侈禁止令(葬儀関係)——」  
八七—一三三頁。W. Bowsky, 72.
- (72) W. Bowsky, 31.

- (73) Herlichy and Krapisch-Zuber, 114.
- (74) ボースキーは「ペストの後では新しい市民の半数以上がコンタードから来て、残りのほとんどが近隣のトスカーナ諸国から来た」と言う (W. Bowsky, 31.)。
- (75) アレッツォの荒廃については次を参照。拙著『ルネサンス・ヒューマニズムの研究』晃洋書房 一九九四年 二七二―二七四頁。
- (76) 井谷直義「中世末期トスカーナ地方におけるメッサドリリアの普及―都市民の土地取得とブドウ栽培の拡大による」『文化史学』六〇号 二〇〇四年 一七一―一九二頁。
- (77) ブラッカー 四四頁。
- (78) 石坂史料集 (二) 第九章「マルキオシネの『フィレンツェ年代記』より——一三四八年の疫病について——」五二頁。
- (79) 石坂史料集 (九) 第三章「大規模ペスト期における家族の疫病死——モレッリ『リコルデイ』より——」一六七頁。
- (80) 石坂史料集 (二) 第九章「マルキオシネの『フィレンツェ年代記』より——一三四八年の疫病について——」六〇頁。
- (81) Benedictow, 312.

## 第二章 都市と農村の苦難——各地域の死亡率（各論研究）——

はじめに

黒死病は、都市や村などの地域の共同体に住む人びとに対してどの程度の苦難を強いたのであろうか。

地域共同体の最小の単位、すなわち都市、町、村、荘園、教区（小教区）などは、黒死病死亡率を特定する最も基本的な単位であり、まずそれを数多く特定してから、そうした個々の共同体を包括するもっと大きな単位である「州」や「地方」の死亡率を把握すべきである。そして、次にその国全体のレベルで死亡率を特定し、最終的にヨーロッパ

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

ロッパ全体のレベルで平均死亡率を特定すべきである。

また、実際のところ、死亡率を探索する史料は、そうした地域共同体の史料しか残されていないのが実態である。当時の国の統治者は、死亡率や人口の減少率についてあまり統計的な関心はなく、調査が国や州・地方のレベルでおこなわれることはあまりなかった。権力者や領主らは、あくまで実務的なかたちとして、租税を集めるための基本的単位として都市や村の住民を掌握していたのであり、その結果、徴税のための台帳が、間接的に人口把握のための史料として役立つのである。

では、死亡率の特定に利用できる人口史料をもつ都市や村や荘園は、ヨーロッパにおいてどの程度存在しているのだろうか。その数は、ベネディクトーの著作の参考文献表では、史料を探し求めたここ半世紀の研究者の努力のおかげで、現在、ヨーロッパにおいて少なくとも二〇〇点ほど存在している。特に、そのうち史料に恵まれて、ベネディクトーによって死亡率が検証され、調整・算出された約二〇〇の共同体（荘園も含む）については、私はそのひとつひとつのデータを彼の著作のなかから抽出し、一覧にしてみた。それが表2―1「ヨーロッパにおける黒死病死亡率のわかる共同体の一覧」、表2―2「イングランドにおける黒死病死亡率のわかる共同体の一覧」である（ベネディクトー自身はこのような全体を一覧する表はつくっていない）。

およそひとりでは限られているので、これ以外にも、ベネディクトーが把握できなかったり、見落とし史料や優れた研究者による成果が、イタリアのコミュニネやドイツ・フランス、さらに東欧や北欧、その他の多くの地域でまだかなり存在しているように思われるが、このベネディクトーの明快な包括的研究が他の研究者を刺激する契機になり、他の地域にも目が向けられるようになるかもしれない。

次に、そうした貴重な史料を備える都市や村落での黒死病死亡率について、著書にそって現在その共同体が行政区分上所属する国に従って、「イタリア」（記述の分量二三頁）、「スペイン」（一二頁）、「フランスとサヴォア伯領（現スイスを含む）」（三〇頁）、「ベルギー」（四頁）、「イングランド」（三七頁）の順に取り上げて見ていきたい。地図1「ヨーロッパにおいて黒死病死亡率の特定された地方・州」は、ベネディクトーが各論研究として扱う都市や村落を含む地方や州を私がヨーロッパ地図のなかに示してみたものである。ここでのいう地方とは、「トスカーナ地方」のようなく、大きなレベルの単位である（ここで示した「地方・州」の数は、全部で「一一」ある）。

まず、イタリアの北部は、「ピエモンテ地方」の農村部、すなわち当時「サヴォア（イタリア語名称は「サヴォイア」）伯領」に属した「スーザ溪谷地方」の八つの村落（トリノの東方）が扱われる。この中世のサヴォア伯領（伯国）は、「神聖ローマ帝国」に服し、モンブランなどのアルプス山脈を取り囲むように、現在のイタリア、フランスやスイスの一部に及ぶ広い地域であった。サヴォア伯領は、現在の行政区分では、イタリアのピエモンテ地方やスイスのヴァレー地方を除けば、ほとんど「フランス」に属している。

イタリアの中部は「トスカーナ地方」が扱われる。ここはフィレンツェをはじめとして豊富な史料がある。この地方の主要な都市のかなりの部分、すなわち、フィレンツェ、シエナ、サン・ジミニャーノ、プラートを扱い、しかも緻密な考察が展開されている（南イタリアについては、十分な史料研究がなく、推測として、ほかの多くの地域と同じ程度の死亡率であったらうと述べられている）。

スペインについては、「ナバラ王国」（スペインの北東部を支配した中世の小国家）のリベラ管区やサングエサ管区の都市・農村、「カタルーニャ地方」は、都市バルセロナ、都市ジローラ、都市ペルピニャン（現在フランス領）、さ

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人々が死んだか

表 2-1 ヨーロッパにおける黒死病死死亡率のわかる共同体の一覧

ID	地方	共同体	○都市・△村	調査死亡率	黒死病前人口	黒死病後人口	未調整死亡率	史料	主な研究者
1	トスカーナ地方	フィレンツェ	○都	60%	92,000 人(1348 年)	37,725 人(1349 年)	—	租税地	A. Falsini (1971)
2	トスカーナ地方	プラート : 1 Prato	○都	43%	1,243 人(1339 年)	685 人(1349 年)	—	食糧調査	E. Fiumi (1968)
3	トスカーナ地方	プラート : 2 prato	△村	43%	7,723 人(1339 年)	4,180 (1349 年)	—	食糧調査	E. Fiumi (1968)
4	ビエモンテ地方	サン・アントニオ	△村	52.5%	50 世帯(1335 年)	40 世帯(1356 年)	20%	世帯登録	R. Comba (1977)
5	ビエモンテ地方	フオッキアルド	△村	52.5%	116 世帯(1335 年)	61 世帯(1356 年)	48%	世帯登録	A. Rotelli (1977)
6	ビエモンテ地方	サン・ジョルジョ	△村	52.5%	129 世帯(1335 年)	70 世帯(1356 年)	46%	世帯登録	R. Comba (1977)
7	ビエモンテ地方	キヤノッコ	△村	52.5%	71 世帯(1335 年)	45 世帯(1356 年)	36%	世帯登録	A. Rotelli (1973)
8	ビエモンテ地方	チナッコ	△村	52.5%	217 世帯(1335 年)	159 世帯(1356 年)	27%	世帯登録	R. Comba (1977)
9	ビエモンテ地方	バスソレノ etc.	△村	52.5%	66 世帯(1335 年)	31 世帯(1356 年)	53%	世帯登録	A. Rotelli (1973)
10	ビエモンテ地方	ボルゴネ	△村	52.5%	267 世帯(1335 年)	9 世帯(1356 年)	35%	世帯登録	R. Comba (1977)
11	ビエモンテ地方	サン・ディエゴ	△村	52.5%	71 世帯(1335 年)	44 世帯(1356 年)	38%	世帯登録	A. Rotelli (1973)
12	トスカーナ地方	サン・ジミニャーノ : 1 San Gimignano	○都	69%	7,296 人(1332 年)	2,500 人(1349 年)	—	塩税	E. Fiumi (1962)
13	トスカーナ地方	サン・ジミニャーノ : 2 Prato	△村	52.5%	4,145 人(1332 年)	1,968 人(1349 年)	—	塩税	E. Fiumi (1962)
14	トスカーナ地方	シエナ	△村	52.5%	1,207 人(1332 年)	783 人(1349 年)	35%	兵役 1 男子	W. Bowsky (1964)
15	ナバラ	Ribera	△村	65%	6,538 世帯(1347 年)	2,408 世帯(1350 年)	63%	世帯主台帳	M. Bernhe (1984)
16	ナバラ	Sangüesa	△村	55~60%	2,933 世帯(1348 年)	1,792 (1350 年)	74%	世帯主台帳	A. Pradevall (1963)
17	カタルーニャ地方	サルブ・サン・アンドレウ	△村	74%	160 世帯(—)	42 世帯(—)	66%	世帯主台帳	A. Pradevall (1963)
18	カタルーニャ地方	バルセロナ	△村	66%	111 世帯(—)	37 世帯(—)	66%	世帯主台帳	R. Guyé (1983)
19	カタルーニャ地方	バルセロナ 司祭	△村	60%	616 人(1344 年)	380 人(1349 年)	(60%)	叙階台帳	R. W. Emery (1967)
20	カタルーニャ地方	バルデニャン	法曹	58~68%	125 人(1348 年)	45 人(1349 年)	64%	叙階台帳	R. W. Emery (1967)
21	フロレンス地方	Aix	○都	54.5%	1,486 世帯(1345 年)	810 世帯(1349 年)	45.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
22	フロレンス地方	グラーヌ	○都	54.5%	1,360 世帯(1340 年)	738 世帯(1350 年)	45.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
23	フロレンス地方	グラーヌ	○都	54.5%	926 世帯(1345 年)	444 世帯(1355 年)	52.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
24	フロレンス地方	Riez	○都	54.5%	680 世帯(1340 年)	213 世帯(1354 年)	69.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
25	フロレンス地方	ヴァレンソレ	○都	54.5%	660 世帯(1340 年)	213 世帯(1354 年)	66.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
26	フロレンス地方	Moustiers	○都	54.5%	622 世帯(1340 年)	204 世帯(1354 年)	67.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
27	フロレンス地方	フォルカルキエ	○都	54.5%	600 世帯(1340 年)	280 世帯(1350 年)	53.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
28	フロレンス地方	ディグ	○都	54.5%	444 世帯(1340 年)	260 世帯(1355 年)	41.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
29	フロレンス地方	Rians	○都	54.5%	300 世帯(1340 年)	213 世帯(1352 年)	29.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
30	フロレンス地方	シガール	△村	54.5%	144 世帯(1340 年)	75 世帯(1352 年)	48.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
31	フロレンス地方	コンセグエス	△村	54.5%	40 世帯(1345 年)	12 世帯(1349 年)	70.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
32	フロレンス地方	ロケステロン	△村	54.5%	110 世帯(1345 年)	49 世帯(1352 年)	55.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
33	フロレンス地方	サン・アンドレ・アミナ	△村	54.5%	40 世帯(1345 年)	11 世帯(1349 年)	72.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
34	フロレンス地方	サン・ポール	△村	54.5%	92 世帯(1345 年)	40 世帯(1349 年)	46.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
35	フロレンス地方	クンソン	△村	54.5%	122 世帯(1345 年)	66 世帯(1354 年)	74.5%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
36	フロレンス地方	エス・バロン	△村	54.5%	29 世帯(1340 年)	22 世帯(1354 年)	24.0%	世帯台帳	E. Baradat (1961)
37	サヴォイ地方	ウグニ	○都	60%	333 世帯(1331 年)	156 世帯(1333 年)	53%	上納金簿	B. Demotz (1975)
38	サヴォイ地方	コンス	△村	60%	311 世帯(1331 年)	17 世帯(1355 年)	45%	上納金簿	B. Demotz (1975)



39	サザン地方	マランズ	△村	60%	120 世帯 (1331 年)	32 世帯 (1353 年)	73%	上納金簿	B. Demotz (1975)
40	サザン地方	ケージュ	△村	60%	174 世帯 (1331 年)	111 世帯 (1353 年)	36%	上納金簿	B. Demotz (1975)
41	サザン地方	ヘリ	△村	60%	163 世帯 (1331 年)	84 世帯 (1353 年)	48%	上納金簿	B. Demotz (1975)
42	サザン地方	クズ・エ・ザイ・サン・ジャン	△村	60%	129 世帯 (1348 年)	64 世帯 (1349 年)	50%	薪採集税	R. Brondy (1988)
43	サザン地方	クズ・ジャン	△村	60%	147 世帯 (1348 年)	48 世帯 (1349 年)	67%	薪採集税	R. Brondy (1988)
44	サザン地方	サン・スルピス	△村	60%	127 世帯 (1348 年)	72 世帯 (1349 年)	43%	薪採集税	R. Brondy (1988)
45	サザン地方	エリス	△村	60%	108 世帯 (1347 年)	61 世帯 (1349 年)	44%	橋利用税	P. Duparc (1965)
46	サザン地方	Ste-Hélène-du-Lac	△村	60%	195 世帯 (1347 年)	81 世帯 (1349 年)	59%	橋利用税	P. Duparc (1965)
47	サザン地方	コズ	△村	60%	108 世帯 (1347 年)	55 世帯 (1349 年)	49%	橋利用税	P. Duparc (1965)
48	サザン地方	サン・ピエール	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
49	サザン地方	プラヌ	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
50	サザン地方	ビエ・ゴテイエ	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
51	サザン地方	オトザイル	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
52	サザン地方	シャトールヌ	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
53	サザン地方	ラ・シャヴァン	△村	60%	303 世帯 (1347 年)	142 世帯 (1349 年)	52%	橋利用税	P. Duparc (1965)
54	サザン地方	ヴォルジェ	△村	55%	150 世帯 (1339 年)	76 世帯 (1356 年)	49.5%	上納金簿	P. Dubuis (1990)
55	サザン地方	バニユ	△村	55%	411 世帯 (1339 年)	236 世帯 (1356 年)	42.5%	上納金簿	P. Dubuis (1990)
56	サザン地方	オルシェール	△村	55%	402 世帯 (1339 年)	259 世帯 (1356 年)	35.5%	上納金簿	P. Dubuis (1990)
57	サザン地方	リド	△村	55%	160 世帯 (1339 年)	90 世帯 (1356 年)	44.0%	上納金簿	P. Dubuis (1990)
58	サザン地方	モンレイ	△村	52.5%	264 世帯 (1339 年)	152 世帯 (1352 年)	42.5%	小作税	P. Dubuis (1979)
59	サザン地方	トロストレン	△村	52.5%	270 世帯 (1339 年)	142 世帯 (1352 年)	47.5%	小作税	P. Dubuis (1979)
60	サザン地方	コロンベ	△村	52.5%	150 世帯 (1339 年)	110 世帯 (1352 年)	27.0%	小作税	P. Dubuis (1979)
61	サザン地方	グルニ	△村	65~70%	10 世帯 (1346 年)	4 世帯 (1348 年)	64.5%	上納金簿	M. Gelling (1991)
62	サザン地方	サン・ジュリアン	△村	65%	307 世帯 (1347 年)	152 世帯 (1349 年)	57%	上納金簿	M. Gelling (1991)
63	サザン地方	サン・ミシェル	△村	60%	205~215 人 (1347 年)	90~92 人 (1349 年)	55~58%	人頭税	L. Stouff (1962)
64	サザン地方	ミヨ	△村	52.5%	6,164 人	3,213 人	48%	財産調査	G. Prat (1952)
66	ミザイ=ビシネー	アルビ	△村	52.5%	2,669 世帯	1,225 世帯	54%	人頭税	G. Audisio (1968)
67	ミザイ=ビシネー	サン・フルール 1 St Flour	△村	51.5%	843 世帯	543 世帯 (1356 年)	35%	人頭税	G. Audisio (1968)
68	ミザイ=ビシネー	サン・フルール 2 St Flour	△村	51.5%	697 世帯	257 世帯 (1356 年)	63%	人頭税	R. Picard (1947)
69	デゾル	エカセター	△村	58.5%	19 人(—)	11 人(—)	—	叙階記録	A. Audisio (1968)
70	リンカン	リンカン	△村	60%	18 人	10 人(—)	—	叙階記録	A. Thompson (1911)
71	ヨークシャー	ヨーク	△村	44.5%	21 人	17 人(—)	—	叙階記録	C. Boucher (1938)
72	ヨークシャー	グレート・ウォルサム	△村	44.4%	187 人 (男・1346 年)	104 人 (男・1351 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
73	エセツクス	ハイ・イースター	△村	53.3%	56 人 (男・1345 年)	92 人 (男・1351 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
75	エセツクス	チャットラム・ホール	△村	46.6%	56 人 (男・1347 年)	31 人 (男・1356 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
76	エセツクス	マーガレット	△村	25.6%	39 人 (男・1347 年)	29 人 (男・1352 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
77	エセツクス	チャットラム・ホール	△村	46.4%	56 人 (男・1345 年)	30 人 (男・1355 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
78	エセツクス	ホーボーン・ホール	△村	50.0%	12 人 (男・1349 年)	8 人 (男・1355 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
79	エセツクス	シーバーロー・ホール	△村	16.7%	16 人 (男・1349 年)	10 人 (男・1355 年)	—	叙階記録	L. R. Poots (1985)
80	サマセツト	ハイ・ハム (莊園)	△村	42%	65 人 (男・1348 年)	38 人 (男・1348 年)	—	叙階記録	E. R. Poots (1985)

黒死病でそれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人々が死んだか

81	サマセツト	デイチー ト (荘園)	△村	54%	46 人(男・1348 年)	21 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
82	サマセツト	ピルトン (荘園)	△村	61%	75 人(男・1348 年)	29 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
83	サマセツト	バットレーン (荘園)	△村	54%	39 人(男・1348 年)	18 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
84	サマセツト	マルズ (荘園)	△村	58%	79 人(男・1348 年)	人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
85	サマセツト	ウォルトン (荘園)	△村	61%	31 人(男・1348 年)	12 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
86	サマセツト	マーニハム (荘園)	△村	56%	28 人(男・1348 年)	9 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
87	サマセツト	ダーニーハム (荘園)	△村	64%	156 人(男・1348 年)	56 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
88	ウイルトンシャー	イドミーストン (荘園)	△村	50%	58 人(男・1348 年)	21 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
89	ウイルトンシャー	ウインターストン (荘園)	△村	38%	57 人(男・1348 年)	15 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
90	ウイルトンシャー	キングス トン (荘園)	△村	56%	24 人(男・1348 年)	9 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
91	ウイルトンシャー	ネトルトン (荘園)	△村	48%	62 人(男・1348 年)	32 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
92	ウイルトンシャー	グリットン (荘園)	△村	63%	43 人(男・1348 年)	16 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
93	ウイルトンシャー	クリスチヤン・マールロッド (荘園)	△村	66%	79 人(男・1348 年)	27 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
94	バークシャー	バッドベリー (荘園)	△村	76%	45 人(男・1348 年)	11 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
95	バークシャー	アッシュベリー (荘園)	△村	55%	20 人(男・1348 年)	9 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)
96	バークシャー	バックラングト (荘園)	△村	60%	70 人(男・1348 年)	30 人(男・1348 年)	—	人頭税	Ecclstone (1909)

表 2-2 イングランドにおける黒死病死亡率のわかる共同体の一覧 (注：一部司祭も含む)

ID	司教区・所領	州	荘園	英語	死亡率	主な研究者
1	エグセター	コーンウォール、デヴォンシャー	—	—	51.3%	Pickard (1947)
2	バズ、ウエルズ	サマセツト (エイボング川まで)	—	—	47.6%	Lunn (thesis lost)
3	ウイッチェスター	ハンツシャー、サリ	—	—	48.8%	Lunn (thesis lost)
4	イーリー	ケンブリッジシャー	—	—	57~60%	Wood-Leigh (1948)
5	ノリッジ	サフオーク、ノーフオーク	—	—	48.8%	Lunn (thesis lost)
6	ウスター	ハズターシャー、グロスターシャー、ウオリックシャー	—	—	44.5%	Lunn (thesis lost)
7	レヴォー	ヘルフォードシャー、シェロフシャー (セザン川まで)	—	—	43.2%	Lunn (thesis lost)
8	リンカン	(a) オックスフォードシャー、ノッキンガムシャー	—	—	40.2%	A. H. Thompson (1911)
9	リンカン (a) (b) (c)	(b) ハートフォードシャー、ベツトフオードシャー、ハンティンドン	—	—	40.2%	A. H. Thompson (1911)
10	同	(c) ラトランド、ノーサンブトンシャー、レスターシャー、リンカンシャー	—	—	40.2%	A. H. Thompson (1911)
11	コヴェントリー／リッチモンド	(a) シェロフシャー、スタフォードシャー、ダービーシャー、チェシャー	—	—	40.1%	Lunn (thesis lost)
12	同 (a) (b)	(b) ランカシャー (リダル川まで)	—	—	40.1%	Lunn (thesis lost)
13	ヨーク (a) (b)	(a) ノッティンガムシャー、ヨークシャー (テイアズ川、ハンバー川まで)	—	—	44.2%	J. Strewbury (1972)
14	同	(b) ランカシャー (リダル川から)	—	—	44.2%	J. Strewbury (1972)
15	ウスター	ハズターシャー	—	—	43%	C. Dyer (1980)

[illegible]

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でこれだけの人が死んだか

58	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	マンクton	21%	R. A. Lomas (1989)
59	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Headworth	27%	R. A. Lomas (1989)
60	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Over Heworth	36%	R. A. Lomas (1989)
61	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Nether Heworth	72%	R. A. Lomas (1989)
62	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Fulwell	56%	R. A. Lomas (1989)
63	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Southwick	53%	R. A. Lomas (1989)
64	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Wentworth	67%	R. A. Lomas (1989)
65	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Donkeworth	69%	R. A. Lomas (1989)
66	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Dalton-le-Dale	69%	R. A. Lomas (1989)
67	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	East Rainton	29%	R. A. Lomas (1989)
68	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	West Rainton	34%	R. A. Lomas (1989)
69	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Moortsey	45%	R. A. Lomas (1989)
70	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	North Hittington	56%	R. A. Lomas (1989)
71	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	South Hittington	52%	R. A. Lomas (1989)
72	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Monk Hestleden	44%	R. A. Lomas (1989)
73	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Westerton	70%	R. A. Lomas (1989)
74	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Aycliffe	61%	R. A. Lomas (1989)
75	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Newton Bewley	48%	R. A. Lomas (1989)
76	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Billingham	47%	R. A. Lomas (1989)
77	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Wolviston	45%	R. A. Lomas (1989)
78	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Newton Ketton	42%	R. A. Lomas (1989)
79	ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	Burton	64%	R. A. Lomas (1989)
80	バズ・ウエルズ	サマセツト	High Ham	54%	Ecclestone (1999)
81	バズ・ウエルズ	サマセツト	Ditchheat	42%	Ecclestone (1999)
82	バズ・ウエルズ	サマセツト	Pilton	61%	Ecclestone (1999)
83	バズ・ウエルズ	サマセツト	Baconbe	54%	Ecclestone (1999)
84	バズ・ウエルズ	サマセツト	Mells	58%	Ecclestone (1999)
85	バズ・ウエルズ	サマセツト	Walton	36%	Ecclestone (1999)
86	ソールズベリ	ドーセツト	Marshall	64%	Ecclestone (1999)
87	ソールズベリ	ドーセツト	Damerham	50%	Ecclestone (1999)
88	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Idmiston	38%	Ecclestone (1999)
89	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Winebourne	56%	Ecclestone (1999)
90	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Kington	48%	Ecclestone (1999)
91	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Netleton	63%	Ecclestone (1999)
92	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Grittleton	66%	Ecclestone (1999)
93	ソールズベリ	ウァイルトシヤ	Christian Malford	75%	Ecclestone (1999)
94	ソールズベリ	バークシヤ	Badbury	55%	Ecclestone (1999)
95	ソールズベリ	バークシヤ	Asbury	60%	Ecclestone (1999)
96	ソールズベリ	バークシヤ	Buckland		Ecclestone (1999)

地図 1 ヨーロッパにおいて黒死病死亡率の特定された州・地方



黒死病でどれだけの人が死んだか

らにマリョルカ島も詳しく論じられる（残念ながら、カステイリヤ地方については死亡率を知る十分な史料が乏しいようである）。

フランスについては、黒死病による人口変動を如実に示す史料がある。すなわち「プロヴァンス地方」の史料は、ほぼ満遍なく全域に及んで一六の都市・村落の人口史料が認められる。さらに、現在の「ローヌ・アルプ地方」とスイスの一部にまたがる地域、すなわち、一四世紀当時のサヴォア伯領については上質の史料に恵まれ、同様にそのほぼ全域に及ぶ。それは全部で一四の都市・農村の史料の研究が認められる。また、ごく一部の村落や都市についてであるが、現在の「ラングドック・ピレネー地方」（ペルピニャン）、「ミディ・ピレネー地方」（アルビ、ミヨー）、「オーヴェルニュ地方」（サン・フルール）なども黒死病による人口変動のあり方を示す史料がある（パリや

黒死病でどれだけの人々が死んだか

リヨンにも若干言及されている)。以上の発見された史料とそれにもとづいて展開された研究は、南部が中心である。現在のベルギーについては、史料は全般的に少ないが、ネーデルラントの一部、「エノー伯領」の小さな農村に史料が認められる。ネーデルラントは、通説ではほとんど黒死病の被害をうけなかったとされる地域である。

史料が非常に豊富なイングランドに関しては、ほぼ全域にわたって実証的にかつ網羅的に死亡率の特定がおこなわれている。ここでは都市や村落のほかに、さらにその下部にある荘園レベルにおいても史料が豊富に存在する。領主は荘園の小作人から借地料や相続税などを徴収し、それを詳細に記録し、その史料が残存しているのである。領主は、荘園経営のために「十人組」を組織し、その史料は詳細なレベルで情報を与えてくれる。イングランドの黒死病死亡率についての史料研究は、他の国の研究の追隨を許さない。

さて、本章は、ベネディクトーの研究成果を紹介するものである。しかし、何よりも、彼の研究に先だって心血を注いで地道に一四世紀の史料にアプローチした多くの地方史研究者の努力が珠玉の輝きを放つ。そうした業績を残した地方史家に敬意を払いつつ、ベネディクトーの総合的展望を紹介したい。本章の以下の紹介においては、かなり思い切ってポイントを押さえて簡潔に紹介する。ここではわざわざ「ベネディクトーはこう言う」、「ベネディクトーによれば」という言い方はあまりしない。ただ、私はそこではかなり自由に「補足」をして、その補足を「」に入れるなどして、加えている。さらに若干、「疑問・批判」も率直に加えた。この「疑問・批判」については、私の見方であることが、それとはっきりわかるように「＊」のなかで記している。また、出典の明示については、ベネディクトーの著書の場合、本章に限って直接本文中に頁を記した。

## 第一節 イタリア

——トスカーナ地方とピエモンテ地方——

(一) トスカーナ地方 (pp.285-311.)

フィレンツェ (pp.285-292.)

イタリア中部のトスカーナ地方(地図2「トスカーナ地方において黒死病死亡率のわかる共同体」(ペスト前、人口は少なくとも二〇〇万人は越えていたに違いない)とその中心地フィレンツェは、他の国や地域と比べて、極めて上質の史料に恵まれている。黒死病発生直前のフィレンツェの都市(市壁内)の貧民も含んだ総人口の推定については、同時代の年代記作家によるものと現代の研究者によるものとの二種類がある。フィレンツェの都市内には、同時代の年代記作家のジョヴァンニ・ヴィッラーニ(一二七六頃〜一三四八)によると、「九万四〇〇〇人」<sup>(1)</sup>、研究者E・ファルシーニによる研究(一九七一年)では、「九万人以上」<sup>(2)</sup>、ハリーヒーとクラピツシュズベールの研究では、「二二万人」がいたとされるが<sup>(3)</sup>、一三四七年の飢饉による人口減、ファルシーニの判断の合理性、そして、特に、ヴィッラーニが《自分の出した数値は最小限の数値である》ということばを重視して、総合的に判断して、「九万二〇〇〇人」と見る(p.286)。

フィレンツェの黒死病直前(一三四七年末)の人口推定

G・ヴィッラーニ

九万四〇〇〇人

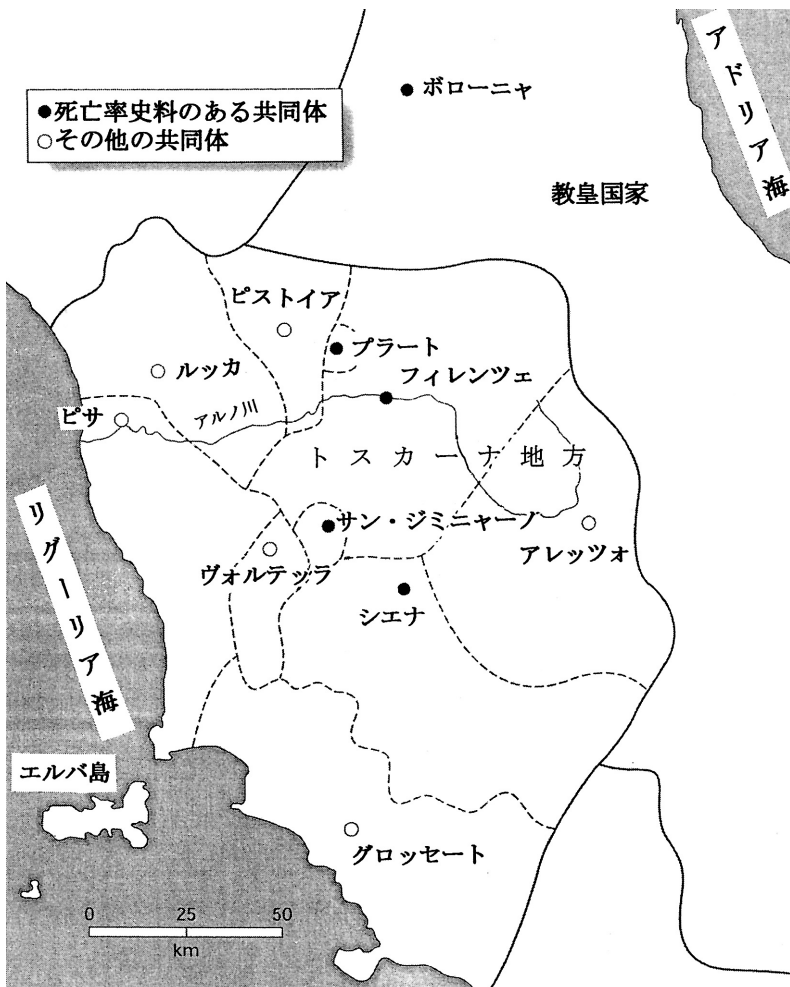
E・ファルシーニ

九万人以上

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

地図2 トスカーナ地方において黒死病死亡率のわかる共同体 (Benedictow, 293.)





ハーリヒー、クラピッシュジュベール

一二万〇〇〇人

O・J・ベネディクトー

九万二〇〇〇人

一方、黒死病直後のフィレンツェの都市人口については、それを直接示してくれる好都合な史料はなく、一三五二年（黒死病が止んで三年も経過している）の租税台帳に記載された総世帯数、「九、九五五世帯」という数値しかない（そのほかに、黒死病が終息して四年後、一三五三年になってから記載されたフィレンツェの都市の租税台帳もある）。ただ、一三五三年の台帳に記載された「九、九五五世帯」という世帯数は、都市内の住民すべてを網羅したものでなく、相当数の登録漏れがある。そこには、税金を支払わない前産業革命期の無産者階級が漏れている。租税役人は、業務上、無用の彼らに関心を払わなかった。租税台帳にはその彼らがどの程度いたかその人数についても記録していない。「標準想定」によりこうした人びとの存在を考慮して算定しなければならない。標準想定の数値は他の多くの都市を参考にして割り出したものであり、台帳などに記載された総世帯数に「六パーセント」を加えることになる。この調整によって一三五二年のフィレンツェの都市の実際の総世帯数は「一万五五二世帯」に修正される（p.297）。

しかし、これもまだ正確な都市の世帯数ではない。というのは、黒死病直後から課税台帳がつくられた一三五二年までの三年の間に、新たに結婚した世帯とコンタードからの流入による世帯数の増加を考慮しなければならないからである（pp.287-288）。ペストで大量の人が死んだことから、黒死病直後のフィレンツェには豊かな財産と土地が所有者なしに転がっていた。ペスト後の社会においては、ペストにより急激な人口減と世帯減を見た後に、それに反発

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人々が死んだか

するかのように——マルサス主義的現象として——生き残った人びとの間で結婚が数多くなされたのである。

「この後者の結婚のブームについては、イタリアに限らず黒死病後に多くの国で認められた現象であり、当時の年代記にもしばしば指摘されていることである。ここではフランスの年代記の例を紹介する。

疫病というか、悪疫というか、この流行病が終息すると、生き残った男と女は互いに結婚した。生き残った女はことのほか早く妊娠した。不妊の女など一人もいなかった。それどころか、あちこち至るところで妊娠している女が見受けられた<sup>(4)</sup>」。

このような疫病直後に新たに加わった世帯の数を差し引いて調整することによって、黒死病直後の総世帯数の実数に近づくことができる。ここで、黒死病後の新婚世帯の増加ぶりについて、この時代の他の多くの都市から割り出した「標準想定」（年「〇・七五パーセント」）を用いて、フィレンツェについても、三年間で「約二・五パーセント」（「一二三二世帯」）あったとみなし、それを差し引き、疫病直後の実質世帯数「一万三二〇世帯」を割り出す（p.288）。

一三五二年のフィレンツェの租税台帳に登録された総世帯数

九九五五世帯

無産者世帯を加えた一三五二年のフィレンツェの都市の総世帯数

一万五五二世帯

調整後のフィレンツェの都市の黒死病直後の総世帯数

一万三二〇世帯

次に問題になるのは、平均世帯規模である。総世帯数がわかっても、この時代の一世帯の構成員の平均値がわからなければ人口は特定できない。これについては、三〇年後の一三八〇年の平均世帯規模がわかっていて、それは、「四・二人」である（表3「イタリアの四つの地方の平均世帯規模」）。では、三〇年経って大混乱が落ち着いた時代の平均世帯規模をそのまま採用できるだろうか（採用すれば、「一万三三二〇世帯×四・二人」から、四万二〇〇〇人の都市人口が割り出せる）。しかし、黒死病の猖獗直後の場合、家族のうちひとりか何人かを失った家もあったはずで、一般的に世帯規模が縮小しているはずである。実際、エンリーコ・フィウーミの研究（一九六二年<sup>⑤</sup>）によると、はつきり平均世帯規模がわかつている近隣のムーネのサン・ジミニャーノの場合、都市ではペスト前に「四・〇人」であったものがペスト後に「三・五人」、農村では同じく「四・五人」であったものが「四人」となった（p.389）。これを参考にして、フィレンツェの場合、一三八〇年の「四・二人」から「〇・五人」を引いて「三・七人」という数値を黒死病直後のフィレンツェの平均世帯規模とすべきである。こうして「一万三三二〇世帯×三・七人」で「三万八一八三人」[\*これは「三万八一八四人」の計算違いであろう]が得られる（p.290）。しかしながら、これでもまだ正確な数値ではない。実際の数値に近づけるために「調整」がなされねばならない。というのは、人口が激減してフィレンツェに仕事を求めて流入してきた人びと、自主的に、あるいはフィレンツェの政策に従って、「ディストレット」

黒死病でどれだけの人が死んだか

表3 イタリアの4つの地方の平均世帯規模（1339～80年）  
(Benedictow, 289)

地域	年	農村部データ	都市部データ
プラート	1339	4.3	
サン・ジミニャーノ	1350	4.0	3.5
モンカリエーリ	1374	4.3	
フィレンツェ	1380		4.2

## 黒死病でどれだけの人が死んだか

と呼ばれるフィレンツェが支配する近隣都市や農村部などからやって来ていた人びとの人数を差し引かなくてはならないからである。疫病後の都市への移住はイタリアのムーネの全般的傾向であったと言える。そこで、比較的近隣の地域にあり、はっきりと都市への移住率のわかっているボローニャの数値、年平均「〇・八パーセント」をフィレンツェに適用して、黒死病後の三年間で「二・五パーセント」の増加があったとみなし——フィレンツェの方が資本主義的な生産形態の規模はずっと大きかったので、これはまだ控えめな数値である——それを差し引く。——こうして最終的に「三万七二五〇人」（「三万七二二九人」を繰り上げる）という黒死病直後の人口が得られる。こうして黒死病の「直前」の人数と「直後」の人口から黒死病死亡率を算出して、死亡率「五九・五パーセント」（「約六〇パーセント」）が得られる（p.291.）。

この「五九・五パーセント」という人口減少率は、フィレンツェの年代記作家マッテオ・ヴィッラーニ（一三六三年没）（ジョヴァンニ・ヴィッラーニの弟）が述べている証言、すなわち「五人中三人が死んだ」（「六〇パーセント」）という証言と見事に一致する。また、ハリーヒーとクラピッシュズベールの死亡率の推定「六五パーセント」にも近い。もちろん、ボッカッチョの提示した数値（「一〇万人死亡」）は誇張として受け入れられないにしても、驚くべきことに、フィレンツェの市壁内で「九万二〇〇〇人」の総人口のうち、「五万五〇〇〇人」もの人びとが、春から夏の数カ月のうちにペスト菌で殺戮されたのである（p.291.）<sup>⑤</sup>。

フィレンツェの都市の黒死病による総人口死亡率

黒死病直前（一三四七年末）の人口

九万二〇〇〇人

黒死病直後の人口

三万七二五〇人

調整による総人口死亡率

五九・五パーセント（六〇パーセント）

シエナ

トスカーナ地方の有力な都市国家シエナ「トスカーナ地方の南部」については、黒死病の猖獗ぶりを再現したボースキーの研究がある<sup>(7)</sup>。しかし、フィレンツェの場合のような、黒死病による人口変動の手がかりとなる世帯中心の史料は、ここには見あたらない。だが、ここには黒死病前後の時期を扱った兵役の可能な男子を記録した台帳が有効である（イタリアのムーネでは自衛のために、下は一六歳から一八歳までの若い男性、上は六〇歳から七〇歳の男性について『兵役適格者台帳』が作成されることがあった）。これによると、黒死病直前にシエナには「四三部隊」が存在したのに、それが黒死病直後に「二一部隊」に減少してしまった。「五一パーセント」の減少である。では、この数値をそのまま全体を示す数値として利用できるであろうか。もうひとつ史料を見てみよう。

シエナの黒死病死亡率についてサン・ドミニコ修道会の教会の『死者台帳』を利用した研究がある。これはトスカーナ地方の歴史人口学の二人の代表的研究者マツシモ・リーヴィ・バッチとロレンツォ・デル・パンタによるものである<sup>(8)</sup>。デル・パンタは、この台帳によると、通常の年は「二〇人」程度の埋葬者であるのに、一三四八年には、それが二〇〇〜二一〇倍の埋葬者となった（四〇〇人〜四二〇人）。このことから、通常の年間死亡率が三〜四パーセントと考えて——いや、実際はもっと高かったであろう——それを二〇倍して黒死病による死亡率を、少なくとも六〇パーセント（三パーセント×二〇）、多くて八〇パーセント（四パーセント×二〇）と見たのである「三パーセント」

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

を採用するか、「四パーセント」を採用するかで、あまりに大きな幅が出てしまうわけである」。

シエナを代表するこの立派な教会に埋葬された人びとが、シエナのすべての人びと（つまり階層・年齢・男女）をそのまま公平に代表しているとは限らない。死亡率が高かったはずの貧困な人びとのほかに、第一章で見たように、多数死んだと考えられる幼児・子どもがいる（シエナの年代記作家アーニョロ・ディ・トゥーラは、年代記に「私は自分のこの手で自分の五人の子どもを全員葬った」と書いているが、これは子どもの高い死亡率を示唆している<sup>(9)</sup>。貧民や子どもなど、当時地位の低かった人びとがこの格の高いこの教会に平均的に埋葬されたかは疑わしい）。

「\*さらに問題がある。一三四八年のペストによるあまりの大量死のために通常の埋葬ができなかったことが考えられる。死者があまりに多く、もはや墓地に埋葬されずに、教会の前に穴を掘って臨時に埋葬した都市も多かったという。この場合、『死者台帳』には記載されなかったであろう。また、埋葬を担当した托鉢修道会の修道士自身が数多く疫病死してしまい、台帳の記録を取っていた修道士さえ死んでしまったようである。フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェツァ聖堂の場合、修道院の二三〇名の聖職者のうち、「六六パーセント」が疫病死したという<sup>(10)</sup>。したがって、シエナの場合でも、埋葬がただけ通常通りにおこなわれ、きちんと『死者台帳』に記録されたかは、大いに疑問である。これについては石坂がおこなったフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェツァ聖堂の『死者台帳』の研究（史料集（七） 第二章「サンタ・マリア・ノヴェツァ聖堂の『死者台帳』より——ペスト死の数量的傾向を読む——」（四一頁）を参照。」

さらに、ずっと家にいてノミやネズミにさらされることの多い女性の考えられる疫病の高い罹病率が考慮されていない。この史料をそのまま利用すれば、それは実際の死亡率を低く見積もるように作用するであろう。

「\*女性の疫病死が高いと考えるベネディクトーに対してそれと対立する研究がある。石坂は、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の台帳を解析してペストに対して男性が圧倒的に弱かったと主張する<sup>(11)</sup>。」

このように考えると、シエナの一般の死亡率は、『兵役適格者台帳』を基本に考えて（「死亡率五〇パーセント」）、それをもっと弱い人びとの存在を考慮して修正し、さらに、他の多くの地域の死亡率の傾向（六〇パーセント）も考慮して、少なくとも「五五パーセント」、いや実際には「六〇パーセント」であつたに違ひなく（p.300-301.）。

#### プラート（p.296-298）

プラートの人口変動はE・フィウーミの一九六八年の研究に負う<sup>(12)</sup>。プラートはフィレンツェ北西二〇キロメートルに位置する。このプラートには人口の把握に役に立つ興味深い史料がある。それが、食糧供給のために実施された人口調査である。一三三九年、プラートのムーネは、一四世紀になって相次ぐ飢饉に備えて、ムーネの人びとを飢饉から守るために非常に前向きな調査をおこなった。心配されていた飢饉に対処すべく、住民への安定した必要量の食糧の供給を考え、人口調査をおこなったのである。この調査に対して貧困層は非常に協力的であつた。なぜなら、自分たちがしっかりと記録されることで、いざ飢饉という時に、ムーネが自分たちに食糧を配給してくれることを願ったからである。こうして、この食糧確保のための調査では、ふつう課税のための調査がしばしば税金逃れのための虚偽の申告を伴うのに対して、ほぼ登録漏れのないものとなり、山間の小村ポピリアーノの記録漏れの例外はあるものの、実際の人口をよく反映したものとなった（p.296.）。

農村人口の変動を先に見る。一三三九年におこなった食糧確保のための人口調査によると、農村部の人口について

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

は、平均世帯規模が「四・三人」で「一七九六世帯」からなる。計「七七三人」が算出されるが、ポピリアーノの「一六世帯」、「七三人」がもれており、それを加えて、「七七六三人」という信頼の出来る数値が得られる（p.296）。それから、黒死病が過ぎ去って三年後、一三五二年に租税調査がおこなわれた。その台帳によると、農村部には「一〇三二世帯」が登録されている。租税台帳に記載されたこの数値にはやはり「調整」が必要である。ここでは貧困層などにおいて生じる登録漏れ分を加えなくてはならない。その標準想定として「六パーセント」が加算される。この調整によって実際の農村部の総世帯数として考えられる数値が、「一〇九八〜一一〇〇世帯」である。だが、これからさらに調整しなくてはならない――

すなわち、黒死病が去って租税台帳が作成されるまでの三年間に結婚した新しい世帯の増加があったはずである（標準想定によると、三年分で「二・二五パーセント」の増加）。しかし、その一方で豊かなプラートの都市部への人びとの流出による減少もあった。というのは、自作農（独立自営農民）など、富裕な農民の一部は、疫病で人口の激減した都市部に有益な職業を求めて移住したからである。結局、ここでは、新婚世帯の増加分と都市への流出による減少分で、両者は相殺されたとみなされる。こうしてペスト直後の農村世帯数は、その平均世帯規模を「三・八人」と見て、合計「四一八〇人」となる。黒死病前の一三三九年から一三四七年末までの飢饉等による人口減少分も考慮して、減少率は「四五パーセント」となる（p.297）【\*いの辺のベネディクトーの計算は若干あいまいなところがある】。

プラートの農村部の黒死病による総人口死亡率



黒死病前の人口

(七七四〇人)<sup>(13)</sup>

黒死病直後の人口

一一〇〇世帯

四一八〇人

調整による最終的総人口死亡率 四五パーセント

次に、プラートの都市人口については、一三三九年の食糧供給のための人口調査のほかにペスト後の一三五一年の租税台帳がある。しかし、租税台帳の方については、プラートの行政区画(市区)であるポルタ・フーイアしか利用できない。そこでポルタ・フーイアに絞って考察することになる。この市区では一三三九年に平均世帯規模「三・五六人」からなる「三四九世帯」があり、この市区の合計は「一二四三人」[\*「一二四二人」(p.297. 18)の間違い]である。この数値は、貧民層も含んだ数値であり、実数を示したものととしてそのまま信頼できるものである。一方、一三五一一年の租税台帳は「一二二世帯」を記載しているが、そこには貧民層を中心とする登録漏れが考えられ、それを補う標準想定にもとづく「六パーセント」分、すなわち「一三世帯」を加える。そして、黒死病直後から調査までの期間に発生した新たな結婚による世帯の増加分と農村部から移住してきた世帯の増加分の両方を合わせて、三年分、計「三パーセント」を差し引く。そして黒死病後の平均世帯規模の縮小を考慮して「三・五六人」を「三・〇人」に直す(pp.296-297)。

この結果、ポルタ・フーイア市区の総人口は一三三九年の「一二四三人」から黒死病直後の「六八五人」に減少する。これによってこの市区の人口減少率は「四二・五〜四五パーセント」となる(p.297)。これは農村部の減少率と同じであり、黒死病が及ぼした被害が農村も都市も変わらなかったことを示唆している(pp.298-299)。

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

「\*なお、ここで私見を言えば、市区の人口の算出法に若干問題が感じられる。それは、プラートのようなフィレンツェの支配下にあるコムーネでは、一部の富裕なプラート市民はその事業をフィレンツェ市内へ次々と移転していった。その数が相当数あることをベネディクトーは見逃していることである。先に第二章で見たように、アレツツォやプラートやピサは富裕層が、地元にいた場合に取られる高い税金のためにフィレンツェに移住するのを余儀なくされたのである（それは、フィレンツェ側からいうと、「優遇策」であるが）。黒死病後、傾向として一部の人びとは、豊かさを求めて農村から都市へ移動したが、また同時に、同じ理由から、一部の者は小都市（プラート）から大都市（フィレンツェ）へも移動したのである」。

プラートの都市部（ポルタ・フーイア市区）の黒死病による世帯減少率と総人口死亡率

一三三九年のポルタ・フーイア市区の世帯と総人口

三四九世帯 一二四三人

黒死病直後のプラートのポルタ・フーイア地区の世帯と総人口 二二八世帯 六八五人「\*「六八四人」の計算

違いではないか」

調整による黒死病による総人口死亡率

四五パーセント

## (二) ピエモンテ地方

——スーザ溪谷の村落群 (pp.303-307.) ——

(一) での研究はC・ロテツリの研究 (一九七三年) とR・コンバの研究 (一九七七年) に負うものである<sup>(14)</sup>。ピエモンテ地方の北西地域) に黒死病の被害を伝える史料がある。「ピエモンテ」は、「山麓」を意味し、ここでは、フランスとスイスへ至る西アルプス山脈からほぼ地中海まで伸びる平野を指している。

ピエモンテ地方で残された黒死病による人口変動の関係の史料は、スーザ溪谷地方の八つの村落に残されている (スーザ地域は、**地図3**「サヴォア伯領とプロヴァンス伯領における黒死病死亡率のわかる地域」では東南に位置している)。これらの村落群は、トリノの都市とスーザの都市の間にある。その二つの都市をつなぐようにドーラ・リパーリア川が東から西へと流れ、その川沿いの街道やその近辺に村落群がある。スーザの町 (**図2**「スーザ溪谷の中心都市スーザとロッチャメローネ山 (三五三八メートル)」) は、それらの村落と商業的につながりをもつ中心地であった。八つの村落のうちのひとつ、ブッソレーノは、**図3**「スーザ溪谷のブッソレーノの牧畜業」からわかるように、アルプスの美しい景色を背景に現在も牧畜業などが営まれている。このように、この地域では農業と牧畜業の両方を営んできた。その村落群のなかには、都市スーザとの間に商業的、経済的関係があり、その交易のルートは、そのままスーザからの疫病の感染ルートにもなったのである。

八つの村落には、黒死病による被害を示唆する史料として、一三三五年と一三五六年の世帯登録の台帳がある (表4「ピエモンテのスーザ溪谷近郊の村落群の世帯数」)。二つの年代には一〇年を越えるほどの期間があるので、そこからそのまま信頼できる情報を得るのはむずかしい。この地域のうち、スーザに近い六村落は、牧畜業が経済の中心

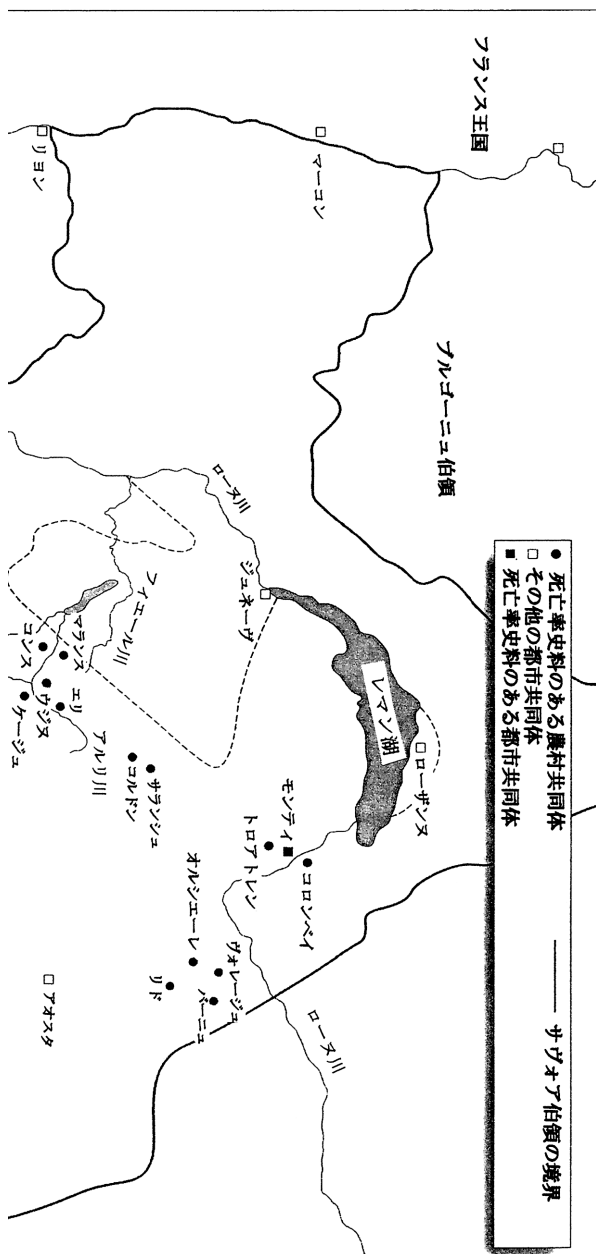
黒死病でただけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

であり、黒死病前の時期における飢饉（一三三九年、一三四七年）に際しては、家畜の肉を食べることで飢饉を凌ぐことができ、人口減少は他の農業地域ほど深刻なものでなかった。

この地域における「黒死病前の平均世帯規模」は、モンカリエーリ（トリノの近郊）において一三七四年に食糧配

地図 3 サゾオア伯領とプロヴァンス伯領における黒死病死亡率のわかる共同体 (Benedictow, 316-7.)



なる。

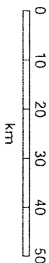


図2 スーザ渓谷の中心都市スーザとロッチャメローネ山(3538メートル)  
スーザの町はトリノから西へ電車で50分。ここをさらに西へ行くとモン・スニ・トンネルがあり、フランスのモダーヌの町に入る



黒死病で  
どれだけの  
人が死んだか

図3 スーザ渓谷のブッソレーノの牧畜業  
スーザ地方の農民の場合、その黒死病死亡率は他より低かったが、それはひとつに  
牧畜によって栄養が補給されたためと考えられる



表 4 ピエモンテ地方のスーザ渓谷近郊の村落群の世帯数  
(1335 年、1356 年、1367 年)

	世帯 1335	世帯 1356	世帯 1367
サンタントーニオ	50	40	24
ヴィッラルー・フォッキアルド	116	61	56
サン・ジョルジョ	129	70	50
キアノッコ	71	45	38
ブッソレーノとフェッレーイレ	217	159	79
計	583	375	247
ボルゴーネ	66	31	
サン・ディデーロ	20	9	
ブルゾーロ	71	44	
計	740	459	

(Benedictow, 304.)

黒死病後にこの地域においても階層変動、すなわち、小作人や日雇い労働者などの無産階級が、所有者のいない土地に引越して、税金を支払う階層に加わるという現象が起こったと考えられる。この階層変動を前提に、標準想定にもとづいて、黒死病流行の直後から一三五六年までの七年間に合計「一〇パーセント」の世帯数の増加があったと想定されるので、これによって一三五五年には「三一七人ゝ三二〇人」、さらに一三四九年には「一三三五人ゝ一六〇〇人」の人口を抱えていたことになる。

このことから、この地域の村落の総人口の黒死病死亡率は五〇パーセントがまず考えられるが、それでもまだ不十分である。非常に貧しい階層の存在を考慮して一般の死亡率を「二・五パーセント」だけ引き上げることを考慮に入れなければならない。こうしてこの村落群の最終的な死亡率は「五二・五パーセント」となるだろう。

スーザ渓谷地方の村落群の調整による総人口死亡率

五二・五パーセント

「以上、イタリアについては、トスカナ地方とピエモンテ地方が扱われるが、このほかに、ベネディクトーは、黒死病でそれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

エミール・ローニヤ地方に属するボローニヤについても言及している。ベネデイクトーは、ボローニヤの人口史料（「兵役適格者名簿」）について言及するなかで、従来からの死亡率の算出法を批判し、新しい歴史人口学を示唆しているが、その一方でその説明はかなり簡略なもので、ボローニヤの死亡率については、私はそれに補足を加えて注<sup>15)</sup>で紹介する。なお、個人ごとに課された塩の税から人口と死亡率を割り出すサン・ジミニャーノの研究（フィウーミの一九六二年の研究<sup>16)</sup>）とその批判的考察があるが、これについては割愛する（この考察はベネデイクトーは、一三三二年に「一万一四四一人」いたサン・ジミニャーノの都市と農村の総人口が、一三四九年に「四四六七人」に減少した（減少率「六一パーセント」と見るものである）」。

## 第二節 ス페인

——ナバラ王国とカタルーニヤ地方——

### (一) ナバラ王国 (pp.273-278.)

ナバラ王国「スペイン北東部、ピレネー山脈の西よりに南北にわたって存在した中世の小国家」の人口史料としては、第一に「モネダへ課税」「王の就任時の「貨幣」(モネダへ) 発行特別税」を王領から徴収した時の台帳、また、第二に、毎年

表5 トスカーナ地方とイタリアのほかの2地域の総人口の推定死亡率  
(Benedictow, 307.)

地方	都市部	コンタート
フィレンツェ	60	
サン・ジミニャーノ	66	52.5
プラート	(42.5-)45	45
シエナ	60	
ボローニヤ	45	
スーザ溪谷		52.5
イタリア	50-60	



ナバラ王国が王領での租税徴収のために記録した「世帯主台帳」（リベラ管区、エステラ管区、パンプローナ管区、サングエサ管区の四つの「メリンダ」（メリンダとは州以下のレベルの区画。管区）がある。これらの史料についてはカラスコ・ペレスの一九七三年の研究、サバロ・サバレギの一九六八年の研究、M・ベルテの一九八四年の研究がある<sup>47)</sup>。

まず、リベラ管区（メリンダ）は一三三〇年に「六五三八世帯」が存在していた。この管区の一三三〇年から後の増減は史料が存在せず不明であるが、他のメリンダを参考に見ると、まず三年間の飢饉の後に、それから「三パーセント」一五パーセントの幅のある人口増加があったと推定される。そして、一三四七年の大きな飢饉があり、「五パーセント」九パーセントの人口減少があった。結局、このメリンダの人口は、こうした増減が相殺されて、一三三〇年の人口とほぼ同じ規模であったと推測される。そして、黒死病を経て一三五〇年には、「二四〇八世帯」に減少した。こうしてリベラ管区の世帯数の減少率は「約六三パーセント」である。

しかし、世帯数の減少率はそのまま総人口の減少率を意味しない。世帯数とは世帯主（つまりふつう男性）の数を意味するが、世帯主が生き残っても家族全員が生き延びたとは限らない。その家族のなかの特に子どもや女性はその以上に疫病死の危機にさらされたかもしれない「極端な場合、先に述べたが、子ども五人を失ったシエナの年代記作家アーニョロ・ディ・トゥーラの場合がそうである」。したがって、世帯数が「六三パーセント」まで減少した場合、実質的に個人のレベルで見ると、もっと減少したに違いない。さらに、黒死病後、人口の大激減を反映して、平均世帯規模が縮小したことも考慮に入れなければならない。標準想定を適用して適正な人口を割り出すと、このリベラ管区の人口の黒死病死亡率は、約「六五パーセント」となる（p.276.）。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの方が死んだか

リベラ管区（メリンダ）の黒死病による世帯減少率と総人口死亡率

黒死病前一三四七年（末） 六五三八世帯

黒死病後一三五〇年 二四〇八世帯

黒死病による世帯の減少率 六三パーセント

調整後の総人口死亡率 六五パーセント

ついでにいうと、このメリンダは、一三六二年から一三六三年に再来した二度目のペストによる打撃を受けて、さらにその「四〇パーセント」の人口を失い、結局のところ、ペスト前の総人口の「七五パーセント」も失ってしまった（残った世帯数は「一四五八世帯」であり、世帯減少率は「六七・七パーセント」）。一四世紀後半の時代は、この地域の人びとにとって悲惨極まりない黙示録的な時代となった。

次に、パンプローナとサングエサのメリンダであるが、この二つのメリンダの王領を保有する農民世帯の「二一五の村落」のうち、「二〇〇の村落」が黒死病に見舞われた。周辺にあったごく小さな村落（「七パーセント」のみがペストを免れたにすぎない。こうして黒死病前（一三四八年）に比べて、世帯数は、「二二五の全村落」でいうと、「二九三三世帯」のうち、「一一四一世帯」（三九パーセント）が消滅した。パンプローナのメリンダでは「四四パーセント」、サングエサのメリンダでは、「四二パーセント」も減少したのであった。

研究者ベルテは、ここから少し独断的に住民の死亡率を「五〇パーセント」と結論した。しかし、ここには二つの問題がある。まず、このメリンダの「世帯主台帳」は、王領を保有する農民だけしか記載していないが、実は、その

他にも、借地人や土地を持たない下層の貧しい農民がいた。彼ら貧しい農民を含めることで全体の死亡率はもっと高くなるだろう。次に、ここでは「階層変動」の問題が忘れられている。ここには階層的に上昇した者たち、すなわち、以前は下層の貧しい農民だったために課税台帳に記載されていなかったが、黒死病を生き抜いて、台帳が改訂されるまでの二年間のうちに、王領の農地の耕作者として参入した者がいる。彼らは、疫病死した以前の王領の耕作者に代わって、台帳に記載されることで、王領の耕作者があたかもまだ生きているかのように見せかけた。ペスト前には登録されずに姿をくらませていたが、ペスト後の階層変動によって、死んだ王領の耕作者に成り代わって、その地位のなかに再びその姿をくらませたのである。彼らは、ペスト前では、人口を実際よりも少なく見せかける存在であったが、ペスト後には、今度は疫病死した人々の数を少なく見せる存在となったのである。こうしたことを考慮すると、こいでの総人口の死亡率は「五〇パーセント」ではなく、「五五〜六〇パーセント」にまで高くなるだろう（p.277）。

ナバラ王国では圧倒的に多くの人びとが農民であった。人口の「三〇パーセント」が都市民とされるが、実は、そのうちのほぼ半分は農民か農業労働者であった。ナバラ王国の都市に存在していたのはたった「一五パーセント」だけであった。こうした農民中心のナバラ王国の社会において、総人口の黒死病死亡率が、「六〇パーセント」どころか、「六五パーセント」よりも高い死亡率であったと見ることも決して困難ではない（pp.277-278）。

サングエサ管区（メリンダ）の黒死病による世帯減少率と総人口死亡率

黒死病前（一三四八年）      二九三三世帯

黒死病でどれだけの人死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病後（一三五〇年末） 一七九二世帯

世帯減少率 四二パーセント

調整後の総人口死亡率 五五〜六〇パーセ

ント

(11) カタルーニャ地方 (pp.239-280.)

カタルーニャ地方の黒死病による人口変動については、プラデバルによる教区民の研究（一九六三年）とギュグの司祭の研究（一九八三年）がある<sup>98)</sup>。総じてこの地域の黒死病死亡率もナバラ王国のものとよく似たものとなっている。この研究は、主として、バルセロナの六五キロメートル北東に位置するピーク平野の農村共同体についてのものである。このカタルーニャ地方の内陸には肥沃な田園地帯が広がっている（図4「カタルーニャ地方の田園に立つポブレ修道院（一七世紀建）」）。

図4 カタルーニャ地方の肥沃な田園に立つポブレ修道院  
カタルーニャ地方のサン・アンドレウ村の農民の黒死病死亡率は74パーセントと考えられる



グルブ地区のサンタアンドリュー教区において、黒死病前に「一六〇世帯」あったものが、一三五二年にたった「四一世帯」に減少した——これは「七四パーセント」の減少である。タラデレ教区の場合、黒死病前に「一一一世帯」あったものが、一三五二年に「三八世帯」にまで減少した——これは「六六パーセント」の減少である。これに「税を払えない人びと」（この時代のこの地域の言い方で *impotentes*）や納税を免れ、文書に現われない人びとを加えると、全体の死亡率がいつも高くなるであろう（p.278.）【\*ベネディクトーは、この二つの教区（納税世帯）の世帯減少率が「七四パーセント」と「六六パーセント」であることに驚いてか、もはやいつもの調整をおこなっていない。しかし、これまでのように「見えざる貧民」の高い死亡率、黒死病直後から二年半の間に流入したはずの世帯や結婚世帯の増加分を考慮した調整をおこなうべきであろう。これまでのやり方に従って試算すると、総人口死亡率はサンタアンドリュー教区が「七九パーセント」、タラデル教区が「七二パーセント」となるだろう」。

バルセロナ北方のピーク平野の二つ教区の黒死病による世帯減少

サンタアンドリュー教区の黒死病前      一六〇世帯

一三五二年      四二世帯      減少率      七四パーセント

タラデレ教区の黒死病前      一一一世帯

一三五二年      三八世帯      減少率      六六パーセント

ギユグの研究（一九八三年）によると、バルセロナの司教区には一三四四年に「六一六」以上の司祭職があったこ

黒死病でどれだけの人が死んだか

## 黒死病でどれだけの人々が死んだか

とが史料からわかる。それは一三五〇年になっても大体同じであった。この期間において、司祭の最初の犠牲者が出たのが一三四八年五月、最後の犠牲者が出たのが一三四九年であった。この期間において、死亡によって空位になった司祭職に「三八〇」の新たな叙階（叙任）がおこなわれた（p.278）。「六一・七パーセント」という著しい死亡率である。疫病のない年の司祭の通常の死亡率は、「三パーセント」から「三・五パーセント」と思われる。これは総人口の死亡率よりも低い。総人口の場合では、おそらく通常の年間死亡率は「四パーセント」から「四・五パーセント」であろう。疫病そのものによる死亡率はおよそ「六〇パーセント」であったように思える。「約一・七パーセント」がペスト以外の原因で死亡したであろう（通常の年でもその程度が死去しているからである）。

司祭が、一三四八年五月から一三四九年四月の一二月の間に「三七四人」が死亡したことは、疫病の年における死亡率が平年より「一五・二〇倍」高かったことを示している。それらの司祭のうち、黒死病のピーク時である一三四八年の六月から九月までの四カ月間に死亡したのが「三七人」であった。バルセロナの全司祭の「四〇パーセント」がこの短い期間で死亡し、七月だけでその死亡数は「一〇四人」であった（p.279）。

バルセロナの司祭のこの高い司祭の死亡率は、ナバラ王国とビーク平野の総人口の死亡率と非常に似ているが、もっと踏み込んだ分析がなされなければ、このままでは受け入れられない。というのは、司祭の死亡率は、一般の人びとや貧困階層の人びとより、低かったはずだからである。多くの教区司祭と代理司祭の生活はかなり質素なものであったにしても、それでも衣食住については平均的な人々よりもずっとよい状態に置かれていた。病気になる場合、彼らはずっとよい看護を受けただろう。確かに、彼らは終油の秘蹟をおこなうために疫病のために臨終にあった教区民の家を訪れるという点で、職業上、特に高い程度で危険なペストノミにさらされた。しかし、彼らが石造りの家に

住み、部屋は清潔で衛生的であったので、彼らの感染の危険は、仕事がなく家にいる時間帯には平均よりもかなり低かっただろう (p.279)。

生活環境という点において、司祭について言えることは、法曹関係者についてもいえる。現在ではフランス領でありカタルーニャ地方ではないが、当時そうであったペルピニャンの公証人、弁護士、裁判官の死亡率を調べた P・W・エメリーの興味深い研究がある<sup>(19)</sup>。彼は、黒死病前の一三四六―一三四七年に法曹の文書に記載された「一二五人」について黒死病後の生死を追跡した。そして、疫病が去ってからその法律活動が文書に認められる (つまり、生き残った) 人びとの数を特定して、そこから最小死亡率「五八パーセント」、最大死亡率「六八パーセント」という数値を得た。公証人たちもまた、遺言作成のために、疫病にかかった人びとと接する機会が多かった。それにもかかわらず、その司祭と同じく恵まれた住環境のゆえに、また、疫病にかかってからの栄養補給や看護がかなり十分に与えられたためにその死亡率は一般の人びとよりも低かったと考えられる (p.283)。

なおジローラ (バルセロナとペルピニャンの中間にある都市) の公証人の場合、黒死病によってその人数は「五〇パーセント」に減少した。バルセロナほど激減していないが、これは、公証人等の裕福な人びとが、先行したバルセロナの出来事を教訓にして、いち早く農村部に移住したせいかもしれない。

黒死病でどれだけの人が死んだか

表 6 スペインの地方別黒死病死亡率 (Benedictow, 284.)

地域・国	納税・借地世帯主	納税・借地世帯人口	総人口
ナバラ王国	55-60	60-65	60-65
カタルーニャ地方	(71)	(74)	(60-70)
スペイン	55-60	60-65	60-65

黒死病でどれだけの方が死んだか

バルセロナの司祭の黒死病による死亡率

一三四四年・一三五〇年のバルセロナの司祭職 六一六

黒死病で空位になった司祭職 三八〇

司祭の疫病期の死亡率 六〇パーセント

ペルピニャン（現フランス）の法曹関係者の死亡率

黒死病前に確認された法曹関係者 一二五人

黒死病後に確認された法曹関係者 四五人

法曹関係者の死亡率 五八〜六八パーセント

### 第三節 フランス

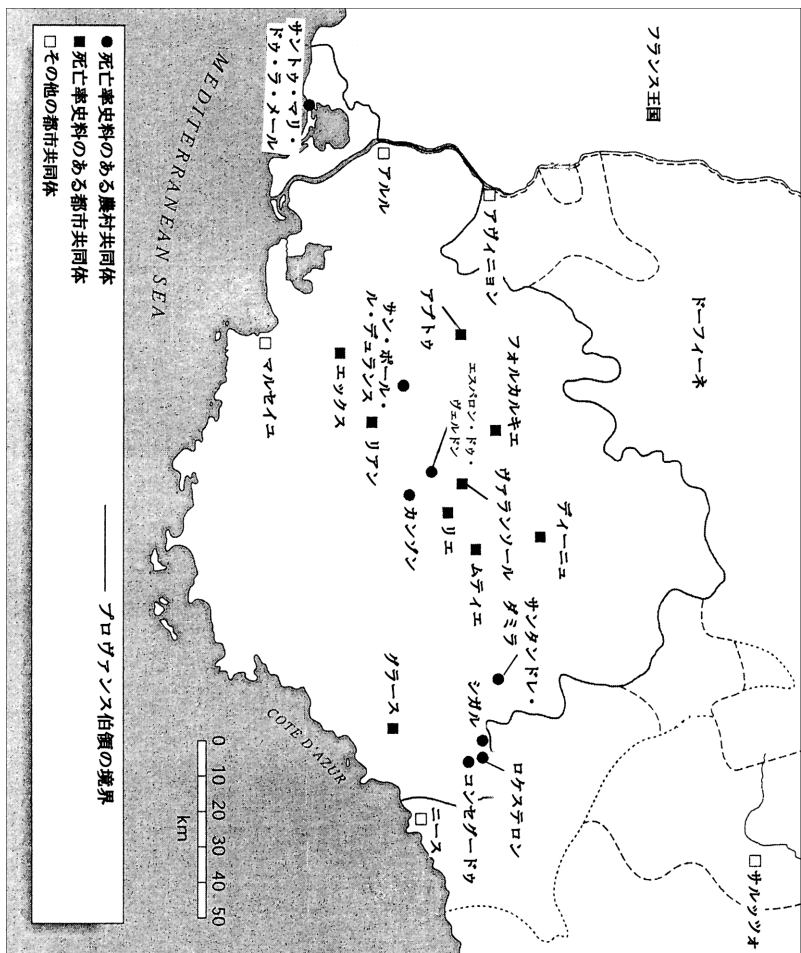
——旧プロヴァンス伯領、旧サヴォア伯領その他——

(1) プロヴァンス伯領 (pp.309-315.)

一四世紀のプロヴァンス伯領の歴史人口学の優れた研究は、まず、E・バラティエがおこなった『世帯台帳』(一種の財政台帳)の研究(一九六一年)がある<sup>20)</sup>。それは地図4「プロヴァンス伯領における黒死病死率のわかる共同体」にあるように、対象とする一六の共同体はプロヴァンス伯領(プロヴァンス地方)にほぼ万遍なく広がっている。この台帳は貧民の世帯も含めたすべての世帯が記録されていたが、ただ全体の「八パーセント」に相当する聖職



地図 4 プロヴァンス伯領における黒死病死亡率のわかる共同体



黒死病でどれだけの人が死んだか

(Benedictow, 309.)

黒死病でどれだけの人が死んだか

者・貴族は原則として免税者として記録から除外されていた。この特権階級の死亡率がかなり低かったということはありそうなことだが、全体の死亡率に影響するほどのものではないだろう (p.308.)。

バラティエによると、一四世紀の前半のプロヴァンス地方(地図3「プロヴァンス伯領における黒死病死亡率のわかる地域」)ではその人口の四分の一から三分の一が「都市共同体」であったという。すなわち、共同体は、ペスト前の時期において「一〇〇〇人」の住民数を越えると「都市共同体」、それ以下は「農村共同体」に分類される。この「一〇〇〇人」の規模は、ペスト前の世帯規模で「二二〇〜二五〇世帯」に相当する (p.310.)。表7「黒死病前後のプロヴァンスの都市・村落の世帯数の変動」は九つの都市共同体と七つの農村共同体を示すものである。すなわち、「都市」は、エックス、グラス、アプトゥ、リエ、ヴァランソール、ムティエ、フォルカルキエ、ディーニ

表7 黒死病前後のプロヴァンスの都市・村落の世帯数の変動  
(Benedictow, 311.)

都市・村	1340	1345	1349	1350	1352	1354	1355	1356	%
エックス		1486						810	45.5
グラス	1360			738					45.5
アプトゥ		926					444		52.0
リエ	680					213			69.0
ヴァランソール	660					226			66.0
ムティエ	622					204			67.0
フォルカルキエ	600			281					53.0
ディーニュ	444						260		41.5
リアン	300		213						29.0
シガル		144			75				48.0
コンセグードゥ		40	12						70.0
ロケステロン		110			49				55.5
サントンドレ		40	11						72.5
サン・ポール		92	40						72.5
カンゾン			122						46.0
エスパロン		29							24.0
計	7655				3664				52.0

ユ、リアンであり、「農村」は、シガル、コンセグードウ、ロケステロン、サンタンドレ・ダミラ、サン・ポール、カンゾン、エスパロン・ドウ・ヴェルドンであった。

エックスは、ほぼ「六〇〇〇人」、格拉斯はほぼ「五四〇〇人」の住民からなる中都市であった。この二つを除いてほかは小規模であった。一方、農村共同体については、一番大きなもので、わずか約「六五〇人」のシガルであった。農村共同体のいくつかは、おそらく「二〇〇人」を下回っていた。都市（町）の人口は、プロヴァンス地方のペスト前の総世帯数「一万八〇〇〇世帯」のうち「七〇〇〇世帯」以上、すなわち「三九パーセント」を占めている（p.310）。

プロヴァンスにおいて農村世帯は人口の四分の三を構成しているが、表7のなかの七つの農村共同体は、ペスト前に登録されたプロヴァンス伯領の全農村世帯「四万五〇〇〇世帯」のうちのわずか「一・三パーセント」にすぎない。しかし、これは一三四〇年代と一三五〇年代の様々な場所での記録を反映しているので、全体的傾向をよく反映しているといえる。たとえば、そのひとつとして、黒死病による世帯減少率が都市と農村においてよく似た数値で認められる。すなわち、都市世帯で「五二パーセント」、農村世帯で「五二・五パーセント」である。

しかし、実際には黒死病による減少はもっと激しかったことが考えられる。というのは、九都市のうち七都市は、「一三五二年～一三五七年」の世帯数であり、また、七つの農村のうち、四つの農村は「一三五二年～一三五五年」の世帯数であり、いずれも黒死病直後のものではない。一三四八年には猛威を振った黒死病の後、新たな結婚のラッシュや、農村部から都市部への移住が多くあり、都市部で世帯数が増加したことが考えられる。この都市の世帯の増加は、控えめに見ても年率「約一パーセント」、農村部は「〇・七五パーセント」あったと見なされる。こうしたこ

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

とから見て、実際には黒死病直後には都市では「三二〇世帯」、農村では「二六五世帯」、合わせておよそ「三四六五世帯」であっただろう。こうしてその数を黒死病前の世帯数と比べると、黒死病による世帯数の減少は農村部で「五四パーセント」、都市部では「五五パーセント」となる (pp.310-312.)。

次に、世帯数から人口を割り出さなくてはならない。この際に、黒死病によって引き起こされた平均世帯規模の減少を考慮に入れなければならない。すなわち、標準想定によると、世帯規模の平均は、黒死病によって農村で「四・五人」から「四人」に減少し、都市においては「四人」から「三・五人」に減少した。この結果、全人口は、黒死病直前の「三万九五〇人」から黒死病猖獗直後の「一万二二六〇人」に減少したことになる。すなわち、プロヴァンス地方は、およそ都市部で「六〇・五パーセント」の減少、農村部で「五九パーセント」の減少である (p.312.)。これまで黒死病によってもたらされた死亡率は、都市の方が農村より高かったと推論されてきたが、これには何も根拠がないことがわかる。

そのほか、黒死病後の「見えざる貧民」の問題、一三四〇年代の増減を考慮して、最終的に納税世帯の減少率が「五四・五パーセント」、納税人口の死亡率が「六〇パーセント」であり、総人口死亡率も「六〇パーセント」と判断される (p.337.)

プロヴァンス伯領の九つの都市共同体と七つの農村共同体の黒死病による総人口死亡率

黒死病直前の人口 三万〇九五〇人

黒死病直後の人口 一万二二六〇人

調整後の総人口の黒死病死亡率 六〇パーセント（都市 六〇・五パーセント、農村 五九パーセント）

(二) サヴォア伯領（現フランス領の部分）

ウジヌ村の五教区の場合

プロヴァンス地方の北に、現在フランスに属する「サヴォア」がある。一四世紀には神聖ローマ帝国の内の「サヴォア伯領」であった。しかしそれは独立した「サヴォア国」として機能した。この地域には上質の史料として注目される人口財政台帳が残され、それについてR・ブロンディとB・デモとR・ルガリによる優れた共同研究（一九八四年）がある<sup>(2)</sup>。この地域はとても広く、現在のスイスのヴァレー州、イタリアのピエモンテ州とヴァッレ・ダオスタ州のそれぞれの一部をも含む地域であった。まず、シャンベリー（現フランス・サヴォア県）の北東六〇キロメートルに位置するウジヌ村から五つの教区（全部で七つ教区がある）、すなわちウジヌ教区、コンス教区、マリーーン教区、ケージュ教区、エリ教区を取り上げる（表8「ウジヌ村の五教区の上納金支払い世帯数の減少——一三三一～一三五三年——」）。

ウジヌ村には納税世帯主を記録する「上納金報告書」があり、それは黒死病前の

黒死病でただけの人が死んだか

表8 ウジヌ村の5教区の上納金支払い世帯数の減少（1331～1353年）  
（Benedictow, 319.）

教区	世帯数 1331	世帯数 1353	減少率 （％）
ウジヌ	333	156	53
コンス	31	17	45
マランス	120	32	73
ケージュ	174	111	36
エリ	163	84	48
計	821	400	51

## 黒死病で死んだだけの人が死んだか

一三三一年のものと黒死病後の一三五三年のものとがある。両者の間には一二年もの開きがあり、人口の増減があったはずなので、そのままでは比較できないが、黒死病の死亡率の大ざっぱな推定は可能である。表8に示すように、領主に上納金を支払っている教区の世帯数はこの間に「五一パーセント」減少した（一九七五年のB・デモの研究）<sup>2)</sup> (p.315)。

黒死病死亡率を割り出すためには、「黒死病直前の世帯数」と「黒死病直後の世帯数」が確認できなければならぬ。現在得られている、かなり離れた年代の二つの史料から、その両者の世帯数を推定するには、次の調整が必要である。まず、一三三一年から黒死病直前までの人口推移（増減）を考え、黒死病直前に存在したと考えられる世帯数を割り出すこと、次に、黒死病直後の人口を割り出すために、黒死病直後から一三五三年に至るまでの人口推移を考え、黒死病直後に存在したと考えられる世帯数を割り出すことである。

一三三一年から黒死病直前までにあったかもしれない人口の増減の問題については、この史料を扱った研究者デモは問題にしていないが、サヴォア伯領の地域研究をおこなったほかの研究者は、皆一様に、増減を問題にしている。いずれにしても、この地域は畜産業がおこなわれていたので、黒死病前の飢饉による食糧不足をそれによって補うことができ、人口減に歯止めがなかったことだろう。結局、黒死病直前の世帯数は一三三一年のものと同じと見る。

次に、黒死病直後から一三五三年までの五年間については、どの地域についても特徴的である結婚等による世帯数の増加を考慮し、標準想定を適用して、世帯数は五年間、毎年「〇・七五パーセント」の増加があったと仮定する。そこで得られた世帯数の増加分は「一五世帯」であり、一三五三年の時点の「四〇〇世帯」から「一五世帯」を差し引いて「三八五世帯」（黒死病直後の世帯数）が得られる。このように見ると、黒死病による世帯数の減少率は、「五

三パーセント」となる (p.318)。

しかし、この五三パーセントという数値は「総世帯」についてのものであって、「総人口」についての減少率（死亡率）ではない。世帯が残っても、その家族のなかには黒死病によって失われた者がいたので、人口の減少は世帯数の減少よりも大きかったに違いない。また、農村部の平均世帯規模は黒死病後に「四・五人」から「四・〇人」に減少しているので、この標準想定を適用すると、上納金を支払う世帯、すなわち農民人口の比較的富裕層の減少率は「五八・三パーセント」となる (p.318)。

さらに、上納金の支払いを義務づけられなかった貧困層では、富裕層以上の大量死があったことを想定して、「二・五パーセント」を加えると「約六〇パーセント」という総人口死亡率が妥当な推定として得られるのである (p.318)。

なお、参考として、一三五三年から一三五六年までにどれだけ目覚ましい世帯数の増加があったかを見てみよう。表9「黒死病後のウジヌ村における世帯数の増加——一三五三年～一三五六年——」を見ると、この三年間における階層変動や結婚ラッシュによる世帯数の増加が如実に示されている。

これによると一三五三年から一三五六年までの三年間に世帯数が実に「一六・五パーセント」も増えたのである。この増加率は黒死病直後からずっと続いて継続さ

黒死病でどれだけの方が死んだか

表9 黒死病後のウジヌ村における世帯数の増加 (1353年～1356年)  
(Benedictow, 319.)

教区	世帯数 1353年	世帯数 1356年	増加率 (%)
ウジヌ	156	192	23
コンス	17	21	23.5
マランス	32	39	22
ケージュ	111	118	6
エリ	84	96	14
計	400	466	16.5

## 黒死病でどれだけの人死んだか

れていた人口移動を示すものである。すなわち、このような高い増加率は、空になった優良な家屋へ移り住んだ小自作農世帯・小作人世帯・転借人世帯・季節労働者世帯などの、農村部の土地を持たない世帯による社会的移動によるところが大きいに違いない。貧困者世帯による長距離の移動と移住は、達成するのに時間のかかる、骨の折れることであつたけれども、多くの人びとがそれを実行して、新しい好ましい生活に転向できたのである。黒死病で人口が半減したにもかかわらず（いや、「それゆえに」といふべきか）、この地域は激しい世帯増加を見せているのである。これは、幸運にも生き残つた者たちの、富と豊かさを求めた社会変動を如実に示す生々しい記録である。なお、ケージュの教区があまり増加していない（「六パーセント」）——これはケージュ教区に魅力がなかったのではない。むしろ魅力があつたがゆえに、先に埋まつてしまつてもはや入る余地がなかったのである。一方、ウジヌから三〇キロメートル離れた小作農地域、サランシュ教区では、ウジヌの世帯増加と対照的に大幅の世帯数の減少が認められるのである。

「\*一三三三年からの三年間で「一六・五パーセント」、つまり年率「五・五パーセント」もの大変な世帯増加率を示しているなら、この地域が通常の標準想定 of 枠に入り切れないことを示すものである。したがって、この地域の黒死病の直後の年から一三三二年までの期間の増加率も、ベネディクトーのいう標準想定「年〇・七五パーセント」程度のもではなかつた可能性が高い。最初からもっと高めにすべきであるように思われる」。

ウジヌ村（五教区）の黒死病による世帯数の減少率と総人口死亡率

黒死病直前（一三四八年末）の世帯数      八二一世帯



黒死病直後（一三四九年）の世帯数

三八五世帯

世帯数の減少率

五三パーセント

調整後の総人口の黒死病死亡率

六〇パーセント

シャンベリー近郊の教区

——薪集めの許可料の台帳から——

研究者R・ブロンディがその著書『シャンベリー』（一九八八年）<sup>23</sup>において紹介するシャンベリー（リヨンの南東、約八〇キロメートル）近郊の三つの教区の史料は、非常に興味深いものがある。シャンベリーは、ブロンディの著書が示すように、サヴォア伯領（伯国）において首都の機能を果たし、政治・経済・宗教の中心地であった（図5「サヴォア家の居城シャンベリー城の塔」（一五世紀建）、図6「シャンベリーのフランシスコ教会」（一六世紀初頭）。なお石坂史料集（三）第一七章が示すように、サヴォア伯領は、黒死病を機に燃え上る反ユダヤ人運動、ユダヤ人虐殺の司令塔となった地域である。

この地域では、暖房用の薪や料理用の薪を集める場合、誰でも皆、公から許可を得なくてはならず、その際に各世帯が支払った小額の支払いが台帳に記録されたのである。そこには土地を持たない貧困な階層が含まれていたことから、ほぼすべての階層を含んでいたと考えられる。しかも、台帳への記録は毎年作成されたのである。このおかげで、黒死病直前（この地域では一三四八年）の記録と、黒死病直後（一三四九年）の記録の両方が、好都合にも存在するのがある（p.320.）。

黒死病でどれだけの人々が死んだか

図5 サヴォア家の居城シャンペリー城の塔（一五世紀建）  
 シャンペリーは、サヴォア家の支配する地域の都として（後にトリノに移されるまで）政治・経済・文化の中心として栄えた。それは R・ブロンディーの著書にまとめられている

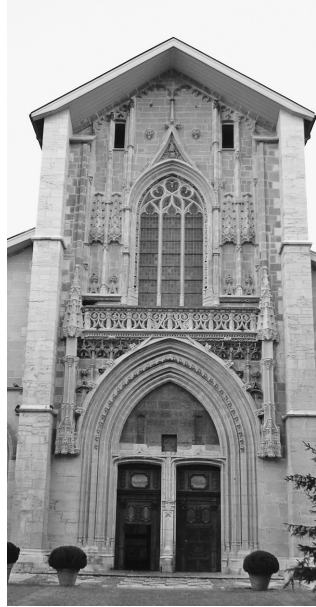


表 10 1348 年から 1349 年におけるシャンペリー近郊の教区の世帯数と人口規模の減少（Benedictow, 321.）

教区	世帯数 1348 年	世帯 1349 年	減少率 (%)
クズ、ヴィミンス	129	64	50
サン・スルピス	127	72	43
サン・ジャン・ダルヴェイ	147	48	67
世帯	403	184	54
人口	1814	736	59

表 10 「一三四八年から一三四九年におけるシャンペリー近郊の教区の世帯数と人口規模の減少」からわかるように、この三つの教区では、黒死病によって世帯の「五四パーセント」が消滅した。三つの教区の間の死亡率は、「四三パーセント」から「六七パーセント」という、かなりの幅がある数値が示されているものの、いずれにしても非常に激しい世帯減少率である。そ

図6 シャンペリーのフランシスコ会教会（一六世紀初頭建）



ば、黒死病死亡率は「六〇パーセント」に切り上げることができただろう（p.321.）。

して、ここでも、他の場合と同様に、世帯数から人口を割り出すために、標準想定を適用すると、三つの教区の総人口は、黒死病前が「一八一四人」、黒死病後が「七四〇人」となり、黒死病による納税者の減少率は「五九パーセント」となる。この総人口のなかには、封建的な税を払うことを免除された転借人や、払う術がなかった貧困な世帯が少し抜け落ちていることを考慮するなら

シャンペリー近郊の三つの教区における黒死病による世帯減少率と総人口死亡率

黒死病前（一三四八年） 一八一四世帯（一八一四人）

黒死病後（一三四九年） 七三六世帯（七三六人）

世帯減少率 五四パーセント

調整後の総人口死亡率 六〇パーセント

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

## モンメリアン近郊の教区

—— 橋の通行税台帳から ——

これはP・ドウパルクによる一九六五年の研究によるものである<sup>(24)</sup> (表11「モンメリアン近郊の八教区における小作人世帯の減少——一三四七〜四九年——」)。シャンペリーの南東の約一三キロメートルのところにモンメリアンがある(図7「モーリエヌ地方の中心モンメリアン」)。この町はイゼール川沿いの町である。ここでは橋を渡るのに通行料が課された。そこから、興味深い情報が得られる。イゼール川左岸には八つの教区があり(地図5「モンメリアン近郊の八教区の黒死病」)、そこに住む農民たちはモンメリアンやシャンペリーへ農産物を売るために出向いたが、その橋を渡る時に払った通行料が記録されており、それも黒死病の直前の年と直後の年の両方が残っている(p.22) (図8「モンメリアンを流れるイゼール川と橋」)。

モンメリアンの橋の通行料台帳から、サン・ピエール・ドウ・スシ教区(図9「黒死病で一〇八世帯から五五世帯まで減少したサン・ピエール・ドウ・スシ」)、コアズ教区、ヴィラール・デリ教区、ピエ・ゴーティエ教区、オートヴィル・エ・シャトールヌフ、サントゥ・エレーヌ(図10「黒死病で一〇八世帯から六一世帯まで減少したサントゥ・エレーヌ」)、プラネーズ教区(図11「フランス・アルプスの麓の村プラネーズ」)などの八教区について世帯数の変動を知ることができる。すなわち、黒死病前

表 11 モンメリアン近郊の八教区における小作人世帯の減少 (1347～49 年)  
(Benedictow, 322.)

教区	世帯数 1347 年	世帯数 1349 年	減少率 (%)
サン・ピエール・ドウ・スシ	108	55	49
サントゥ・エレーヌ・ドウ・ラック	108	61	44
コアズ	195	81	59
7 つの教区	303	142	53
8 つの教区	411	197	52

図7 モーリエヌ地方の中心モンメリアン



黒死病で  
とれだけの  
人が死んだ  
か

地図5 モンメリアン近郊の8教区の黒死病 (Benedictow, 323.)

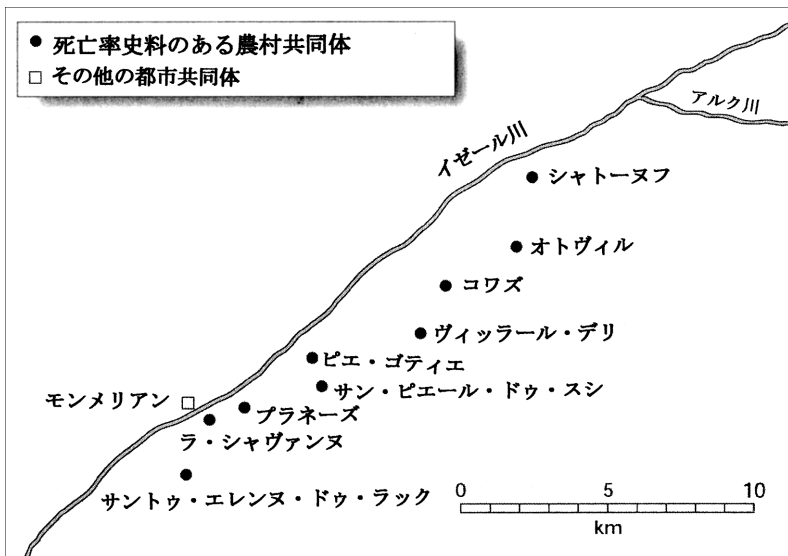


図8 モンメリアンを流れるイゼール川と橋  
イゼール川の左岸の農民は、モンメリアンへ作物を売りに出た。イゼール川にかかる橋を渡る時に料金を課され、その記録が現在、当時の人口把握に利用されている



黒死病で  
どれだけの  
人が死んだか

図9 黒死病で108世帯から55世帯まで減少したサン・ピエール・ドゥ・スシ



図 10 黒死病で 108 世帯から 61 世帯まで減少したサントウ・エレヌ・ドウ・ラック

黒死病で  
どれだけの  
人が死んだ  
か



図 11 フランス・アルプスの麓の村プラネーズ（現在の人口約 500 人）



黒死病でどれだけの人が死んだか

の一三四七年に存在した「四―一世帯」が、黒死病後の一三四九年に「一九七世帯」にまで減少している。これはすなわち「五二パーセント」の減少率である。ただ、これら八教区のうち、残念ながら三つの教区からしか、個別の正確な史料は残っておらず、あいにく、残る五つの教区については、教区ごとの個別の死亡率の変化は確かめることはできない。そのため表10のような記載になっている。

この情報から、ペストによる平均世帯規模の縮小を考慮して、標準想定を運用することで、人口を割り出して得られる人口死亡率は「五七パーセント」となる。総人口死亡率をさらに実際の状態に近づけるには、土地を持たない貧困階級的大量死を考慮しなければならない。それは標準想定によると「二・五パーセント」が加算される。これによって総人口死亡率は、結局およそ「六〇パーセント」になる (pp.322-323)。

モンメリアン近郊の八教区における黒死病による世帯減少と総人口死亡率

黒死病前 (一三四八年)

四―一世帯

黒死病後 (一三四九年)

一九七世帯

世帯減少率

五二パーセント

調整後の総人口死亡率

六〇パーセント



モリーエンヌの農村 (pp.323-327.)

——サン・ミシエル、サン・ジュリアン、グルニ——

デンマークの研究者M・ゲルティンの優れた研究（一九九一年）は、一三四六年と一三五九年の上納金報告書に含まれた租税一覧、さらに、毎年作成された相続税一覧にもとづく史料を活用する。それによってイゼール川沿いのモリーエンヌに数多く存在した教区の農民の人口変動を明らかにしている<sup>55)</sup>。まずサン・ミシエルの六つの教区を見る。そこには、特権市場村（サン・ミシエル）やイゼール川の流域でブドウ栽培をおこなう教区（サン・マルタン・ラ・ポルトウ）、さらに、山岳教区（オルル、ボース、ル・トゥル、モンデニ）など、地理的、経済的に様々な教区が含まれる (pp.323-324.)。

ゲルティンは、一三四六年の時点において確認できたサン・ミシエルの六つの教区の男子納税者「三二七人」を調査対象として選び、その動向を探る。そして、生命表や年間死亡率等を検討して、一三四八年の黒死病の発生直前までの二年間について「一・六パーセント」の死亡率を採用し、「三一七人」のうち「一〇人」の死亡を見込む。これは適正なものと判断される。これによって黒死病直前には「三〇七人」の男性納税者がいたとする。そして問題の黒死病の猖獗によってそれらの男子納税者は「一三二人」にまで減少する。ここから「五七パーセント」の世帯減少率が得られる (pp.325-326.)。さらに、これに黒死病後の平均世帯規模の縮小を考慮して、この教区（中層・上層農民）の人口死亡率を「六二パーセント」とする。さらに、ここでは史料に出てこない「見えざる」無産階級が存在とその非常に高い死亡率を考え、全体の死亡率に「二・五パーセント」を加えて、この教区に住む総人口の死亡率は「六五パーセント」である (p.326.)。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

中規模の村サン・ジュリアンは、サン・ミシエルと同じく特権市場村であり、比較的活発な商業的交流をおこなっていた。一三三二年の上納金台帳での記載から、納税義務のある農家の世帯主の数は、「一一一人」と推定される。そして、その数は一五年後の一三四七年の終わり（つまり黒死病の直前）までには、一三四〇年代の飢饉等の危機的状况によってかなり減少したと考えられる。そこで、それを差し引かねばならない。ここで「一・六パーセント」というやや控えめな年間死亡率を適用して、この集団の数は「一一一人」から「八七人」にまで減ったと判断される。結局、黒死病後に、これらの集団のうち「三五人」が生き残ったことが確認される。そのことから、黒死病によるサン・ジュリアンの農民の死亡率「六〇パーセント」が得られる。しかし、もし年間死亡率を「一・六パーセント」ではなく、「二パーセント」を適用した場合、黒死病直前には「八二人」の世帯主が生き残ったことになる。この場合、黒死病によるサン・ジュリアンの世帯主の死亡率は、少し減って「五七パーセント」になる（pp.326-327）。

「\*ベネディクトー」は、一三三二年から一三四七年までの間に、世帯主の数が、適用する年間死亡率に応じて世帯主の数が異なることを問題にしている。それは正当なことであるが、他方、この一五年間に新たに結婚によって発生した世帯もあったはずで、それが全く問題にされていないのは問題ではないだろうか。」

標準想定では、黒死病によって農村部では「四・五人」の平均世帯が「四・〇人」に縮小したと見る。つまり、一家族あたり「〇・五人」が減少したとみる（この標準想定は、次に具体的に見るグルニの家族の動向の事例から判断すると、慎重過ぎるほど控えめなものであることがわかるであろう）。この標準想定によってサン・ジュリアンの中層・上層の小作農死亡率は「六四パーセント」となる。これに加えて税金を免除された貧しい無産階級が存在とその高い死亡率を考慮される。こうして総人口死亡率は「六七パーセント」となる（黒死病直前の年間死亡率を控えめに

設定した場合、「六五パーセント」<sup>2)</sup> (p.327)。

サン・ジュリアンの近郊の山間部に小村グルニがある。ここには一三四六年に「一〇人」の男性世帯主（納税者）が住んでいた。研究者グルタンは、グルニの小村を構成する一軒の農家（納税世帯主）のうち、一〇軒について、家族の構成員がたどった運命を伝える史料を発見した。次にそれを示す（p.268）。黒死病の恐るべき病魔が、それぞれの家族において「一人」以上を死に至らしめ、不幸のどん底に陥れたことが想像される。ここでは、「〇・五人」とどまらない世帯規模の縮小が認められる「家族についての付記（\*以下）は石坂による。世帯主の死去は●、生存は○を付けている」。

一 ヨハンネス・デ・グレニアークとその兄弟（複数）は死去した。おそらく嫡出子はいない。

\*家族のうち「三人」が死去か。そのうちの一名の死者が世帯主●。

マイナス三

二 ヤコブス・コステはおそらく死んだ。嫡出子はおそらくいなかった。妻が生き残った。

\*家族のうち「二人」死去。そのうち世帯主も死去●。

マイナス二

三 故ヨハンネス・ロイマンには二人の子どもがいた。ヨハンネスとヨハンナである。ヨハンナの方は疫病で死んだ。彼女の兄弟（ヨハンネス）の方は生き残った。

\*家族のうち二名死去。

マイナス二

四 アイモ・デ・モラーリオは生き残った。しかし、甥（または孫）のアイナルドゥス・デ・モラーリオは死んだ。

\*家族のうち一人死去。世帯主は生存○。

黒死病でただけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

マイナス

五 アイモ・デ・フルノは二人の娘を残して死んだが、ひとりの娘は、その後、遅れて疫病で死んだ。

\* 家族のうち二人死去。そのうち世帯主も死去●。

マイナス二

六 ヨハンネス・デ・フルノは死去した。寡婦と幼い子が残された。

\* 家族のうち一人死去。その死去した一名が世帯主●。

マイナス

七 ヨハンネス・デ・フルノ「六とは別人」は、一三四六年に幼い娘を三人残して死んだ。

この三人の娘は疫病「黒死病」の後にどうも名前は見あたらない。

\* 家族のうち少なくとも一名は死去。その死去した一名が世帯主●（ことによるとさらに三名死去か。）

マイナス一（またはマイナス四）

八 アンセルムス・カステッリにはミカエルとペトルスの二人の息子がいた。ペトルスとその母親アニエソーナは疫病で死ん

だ。ミカエルは生き残った。

\* 家族のうち二名死去。世帯主は生存○。

マイナス二

九 ステファヌス・デ・グリニアークは死んだ。少なくとも三人の子どもが残された。

\* 家族のうち一名死去。その死去した一名が世帯主●。

マイナス一か

一〇 ヨハンネス・アメデイは生き残ったが、妻は死んだ。

\* 家族のうち一名死去。世帯主は生存○。

マイナス一

この一〇軒のうち、六軒の家の世帯主が疫病死したと考えられる。グルニの黒死病前の人口は、黒死病前の平均的な世帯規模「四・五人」によってから「四五人」と算定され（一〇×世帯規模「四・五」「四五人」）、さらに、黒死病前の人口については、黒死病後に適用される平均世帯規模「四・〇人」によって人口は「二六人」が算定される（世帯規模「四・〇」×四世帯「四〇人」）。黒死病前の「四五人」の人口は、ペストによって「二九人」が死去して「二六人」が生き残ったと考えられる。この計算から黒死病による納税世帯の死亡率は、「六四・五パーセント」となる。さらに、周辺の土地を持たない無税の貧困者の存在を想定して、結局グルニの総人口死亡率は「六五パーセント」七〇パーセント」と想定される（p.327）。

「\*このグルニの小村の場合、分母が極めて少ない集団であり、ひとりの存在が大きく傾向を変えるので、それが一般的な傾向を反映するものか、一定留保すべきであろう」。

小村グルニの黒死病前の世帯主の死亡率と総人口死亡率

黒死病前（一三四六年） 一〇世帯

黒死病後（一三四八年） 四世帯

世帯主の死亡率 六〇パーセント

調整後の納税人口死亡率 六四・五パーセント

調整後の総人口死亡率 六五〜七〇パーセント

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

### (二) その他の地域

アルビ

アルビ（ミディピレネー地方）の黒死病については、ヴォルフの指導を受けたG・プラによる興味深い研究（一九五二年）がある。これにもとづいて見ていこう。アルビは、ミヨールのおよそ八〇キロメートル西にある小都市である。ここもミヨールと同様にタルン川が流れている。このアルビの古文書館には、一三四三年と一三五七年の二つの「財産査定調査」が残されている。それは各世帯の納税能力を査定するための調査であった（残念ながら、一部が欠損している）

一三四三年の調査には「二六六九世帯」が認められるのに対して、一三五七年の調査には欠損部分があり、「九五二世帯」しか残っていない。そこで約二五〇人の世帯主の名前を補い、黒死病直前の世帯数は合計「一二〇〇世帯」に達する。そして、黒死病後の人口は、ミヨールなどの近隣地域での人口減少の傾向をあてはめて、一三五三年から一三五七年までの間に、ミヨールの特殊な場合と同じく農村の荒廃によって都市も経済的打撃を受けたと判断して、数パーセントの人口減少を想定する。結局、黒死病直後の総世帯数は「一二二五世帯」と調整される。こうして、世帯減少率は「五四パーセント」となる。

総人口の死亡率を割り出すために、都市での平均世帯規模の「四人」から「三・五人」への減少を考慮する。これで、記載された人口は黒死病直後に「六〇パーセント」減少したと考えられる。さらに、深刻な被害にあったと想定されなければならない貧困世帯の未登録分を考慮に入れて、黒死病によるアルビの人口減少は、「約六二・五パーセント」と推定される（p.333.）。

「\*ここでは欠損した史料の問題があり、気になるままに考察が展開されてしまっている。史料の欠損した部分について約二五〇名を補ったというが、その史料操作の妥当性について言及すべきである。また、ここでのベネディクトーによる人口変動の考察は他の都市・村落の場合と比べて弱い。まず、アルビの都市に生じたはずの二三四年から一三四七年までの人口変動が触れられていない。さらに、黒死病直後から一三五三年までの人口変動をどう処理するかについても触れられていない（ミヨールと同様に変動がなかったと見るのだろうか）」。

#### サン・フルール

「\*ミヨールから一〇〇キロメートル北東にある都市サン・フルール（オーヴェルニュ地方）については、ここでは、ベネディクトーの最終的な数値のみを紹介し、考察内容は割愛するが、ここでもアルビの場合と同様、史料の不足のために、ややきめ細かさの欠くところがある。すなわち、サン・フルールについて、「一三四五年」の世帯数「一五四〇世帯」と「一三五六年」の世帯数「八〇五世帯」から、これまでやってきた調整を抜きにして、アルビの場合と同様に、いきなり黒死病による世帯減少率を割り出し、それを「四八パーセント」としてしまう。つまり、黒死病の年までの人口変動や黒死病後の人口変動について、他の都市とは異なって、論じられていない。そして、黒死病による総人口死亡率については、今度はアルビとは異なって、黒死病直後からのある程度の人口増加を想定して、「五一・五パーセント」を割り出す」<sup>26)</sup>。

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

アルビの黒死病による課税対象世帯の減少率と総人口死亡率

黒死病前の課税対象世帯数（一三四三年） 二六六九世帯

黒死病後の課税対象世帯数（一三四八年） 一二二五世帯

課税対象世帯の減少率 五四パーセント

調整後の総人口死亡率 五七・五パーセント

サン・フルールの黒死病による課税対象世帯数の減少と総人口死亡率

黒死病前の課税対象世帯（一三四五年） 一五四〇世帯

黒死病後の課税対象世帯（一三五六年） 八〇五世帯

課税対象世帯の減少率 四八パーセント

調整後の総人口死亡率 五一・五パーセント

#### 第四節 スイス

——ヴァレー地方の共同体（モンテイ、トロアトラン、コロンベイ）——

現在のスイスの西端、レマン湖のすぐ南のヴァレー地方に、サヴォア伯領の一部であった町モンテイ、教区トロアトラン、村コロンベイがあった。すべて納税農民の世帯、すなわち中層・上層の農民世帯であった。

ここには、表12「モンテイの村落における登録された納税小作人の人数の減少」からわかるように、一三二九年の



時点において、三つの共同体を合わせて納税世帯が「六八五世帯」あったが、それが一三五二年の時点で「四〇四世帯」にまで減少した。世帯そのものの減少率は「四一パーセント」である。しかし、実際の総人口死亡率を特定するには、いくつかの調整がなされなければならない。まず、黒死病直前の世帯数を想定しなければならない。研究者バラティエがプロヴァンス地方全般について増加を認めており、さらにデュビも近隣の地域で二〇パーセントの増加があったことを認めていることから、一三三〇年代にはこの地域も人口増加があっただろう。その後一三四〇年代の停滞・減少が続いただろう「この三つの共同体が増加していき、黒死病に見舞われる直前にはその数は「六九〇世帯」になったであろう。ベネディクトーはその数には触れていない」。

また、黒死病（一三四八年）が過ぎ去ってから、一三五二年までの期間に世帯数の増加があったと考えられる。すなわち、黒死病が終息して三年から三年半（一三四九年から一三五二年）の間に、社会的な人口変動があり、まず土地を持たない下層の貧しい人びとの流入が想定されるが、これは年率一パーセントであるが、黒死病直後の状況については慎重に、控えめに加算していかねばならない。また、結婚世帯の増加（年率〇・七五パーセント、三年半分で約二・五パーセント）などを想定しなければならない。結局、こうした増加分、合計年率五パーセントを差し引いて（つまり一三五二年の「四〇四世帯」から計「五パーセント」、つまり「二〇世帯」を差し引く）、この三つの共同体

黒死病でどれだけの人が死んだか

表 12 モンティの村落における登録された納税小作人の人数の減少  
(Benedictow, 330.)

地域	世帯数 1329 年	世帯数 1352 年	減少率 (%)
モンティ	264	152	42.5
トロアトロンの教区	270	142	47.5
コロンベイ	151	110	27.0
計	685	404	41.0

黒死病でどれだけの人が死んだか

を合わせた黒死病直後の世帯数は、「三八四世帯」と見なされる。これは「約四四パーセント」の世帯減少率である。これに黒死病後の世帯規模の縮小を考慮する。すなわち、標準想定によると、黒死病前は平均「四・五人」であったのが、平均「四人」にまで減ったとされる。これを適用して人口の減少率は「五〇パーセント」となる。さらに、これに想定される貧困層の高い死亡率を加算して、黒死病による総人口死亡率は、「五二・五パーセント」となる。

ヴァレー地方のサヴォア伯領（モンテイ、トロアトラン、コロンベイ）の黒死病による世帯減少率と黒死病死亡率

黒死病直前（一三四七年）	六九〇世帯
黒死病直後（一三四九年）	三八四世帯
世帯減少率	四四パーセント
調整後の総人口死亡率	五二・五パーセント

## 第五節 ベルギー

研究者W・P・ブロックマンズによると、ネーデルラント（低地

表 13 サヴォア伯領の黒死病死亡率（上サヴォア地方、シャンベリー近郊、モーリエヌ村、ヴァレー地方）（Benedictow, 331.）

上サヴォア（1～2）、シャンベリー近郊（3～5）、モーリエヌ村落（6～8）、ヴァッレのサヴォア領（9～10）

	地域	小作人世帯主	小作人人口	総人口
1	ウジヌの村	53	58	60
2	サランシュとコルドンの教区	52.5	57.5	60
3	シャンベリー近郊の3教区	54	59	60
4	モンメリアン近郊の8教区	52	57	60
5	エギュベル近郊の4教区	44	50	52.5
6	サン・ミシュルの6教区	57	62	65
7	サン・ジュリアン村	60	64	65-70
8	グルニ村	60	64	65-70
9	アントルモンの4教区	46.5	52.5	55
10	モンテイの3共同体	44	50	52.5

地域」、現在のベルギー、オランダ、北フランスの一部）は、黒死病による死亡率がヨーロッパのなかで最も低かった地域のようなものである<sup>70</sup>。ヨーロッパで最も死亡率が低いとされるこの地域において、死亡率がどの程度のものであったかは、興味深いことである。

しかし、この地域の死亡率を推測する史料は少ない。そのなかでもエノー伯領（現在のベルギーの一部）には、小作農が死亡した時に差し出す一種の相続税、つまり「相続上納物」（死者の所有した最上の家畜・動産の上納）の台帳が残っている（G・シヴェリの一九六五年の研究）<sup>71</sup>。台帳によると、この伯領の南部と中部において一三四九年夏に急激に死亡者が増加するのが台帳で認められ、これが黒死病によるものである。あいにく、黒死病以前の台帳がなく、死亡者の数を直接比べることができない。黒死病から一〇年近く経った時期の同じ地域の相続税の記録と比べると、すなわち、一三五八年～一三五九年の一年間を「一〇〇」の指数とすると、一三四九年六月二十四～一三五〇年四月一日の時期の場合、アト（Ath）地区（ヴァランシェンヌの三五キロメートル北）では「五三三」、モブージュ（Maubeuge）地区（ヴァランシェンヌの約三五キロメートル東）では「四八〇」、ソワニエ（Soignies）（モンスの一五キロメートル北）では、「二五三」となる。黒死病の時は、五倍から二倍半も多い死亡者を出していることになる。しかし、人口の分母が異なるので死亡率の比較はできない。残念ながら、この史料ではこの地域の死亡率は特定することはできない。

しかし、G・シヴェリの研究によって、黒死病によって村人（小作人）の多くが死亡したことを示唆する史料が紹介されている。すなわち、エノー伯領の西のアト地区の中央にイヨン（Hyon）とオン（Hon）の二つの小さな村があった。一三四九年～一三五〇年の時期、すなわち、黒死病に見舞われた時期に、それぞれの村の小作人がかなり死亡

黒死病でただけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

し、その結果として相続税として家畜の上納がおこなわれている。その記録によると、前者の村では一四件の上納がおこなわれ、後者の村では七件の上納がおこなわれた。それが、一三五三年～五四年になると、前者の村ではわずか一件だけの上納がおこなわれ、後者の村では上納は一切おこなわれなかった。このことが示唆することは、いずれの村においても黒死病で多くの村人が死んでしまつて、一三五三年～五四年には、死ぬ人が少なくなつてしまったということである。

東部アルトアにある二つの小村イゼルとエスケルシャンに残された史料は、具体的に死亡率を示唆してくれる。

表 14 「アルトアの二つの小村の世帯数の減少——一三四七～八六年——」からわかるように、この小村の納税世帯主の数は、黒死病前の一三四七年に比べて一三五一年にはかなり減少している。前者の村が「二六パーセント」、後者の村が「一八パーセント」の減少である。農村部では黒死病前の世帯規模「四・五人」が黒死病後に「四・〇人」になつたという標準想定を用いて、世帯数から人びとの総数を割り出し、それによつて村人の総人口の死亡率を出すと、前者の村が「三四・五パーセント」の死亡率、後者の村が「二七パーセント」の死亡率となる (p.339)。

この数値はあくまで表面に現われた数値である。確かに、この村のペストによる死亡率の実態は、表面に現われたとおりであつたかもしれない。すなわち、ヨーロッパの他の地域が六〇パーセント前後の死亡率であつたのに対し

表 14 アルトアの二つの小村の世帯数の減少 (1347～86 年)  
(Benedictow, 339.)

年	イゼル	エスケルシャン
1347	61	28
1351	45	23
1377	31	20
1385	23	11
1386	29	10

て、特別であったかもしれない。しかし、別の可能性もまたある——すなわち、疫病死せずに生き残った者たちのなかには、極めて貧しい納税免除の小作人や日雇い労働者がいて、彼らは黒死病が終息した直後に自分たちのあばら屋をいち早く立ち去り、誰も住まなくなった立派な空き家に移り住んだ者がいたかもしれないのである。彼らは、疫病死した住民に成り代わって、そのまま納税者となり、姿を隠したかもしれないのである。その場合、実際の疫病による死亡率はここに現われた数値よりもずっと高かったはずなのである。なお、表14からわかるように、たとえ最初のペスト（狭い意味の黒死病）による死亡率が低くても、六〇年代以降の第二・三波のペストによって甚大な世帯数の減少が生じたのである。

「\*ここではベネディクトーの死亡率の推定は少し大まかすぎている嫌いがある。すなわち、いつも黒死病死亡率の算定において彼が最終的な調整としておこなわれること、すなわち、租税の免除された貧しい人びとの存在とその高い死亡率の考慮が、ここで抜け落ちている。したがって、それぞれの村の死亡率に「二・五パーセント」が追加されるべきであろう。よって二つの村は、死亡率がそれぞれ「三七パーセント」と「二九・五パーセント」となる。このように見ると、黒死病による被害が最も少ないと言われるネーデルラント（一部）においてさえ、黒死病死亡率は、通説と考えられている「三分の一」に達するのである。なお、最近の研究はネーデルラントの黒死病の実態を次第に明らかにしつつあるという。ベネディクトーは、ネーデルラントの黒死病の被害について、こう述べている——「要するに、ネーデルラントの南部やベルギー地方が広く黒死病の被害を免れ、その周辺だけが黒死病の被害を被ったと主張することははや不可能である。ゆつくりと、わずかながら新しい証拠が出てきて、実際にはほとんどの領域で黒死病が猛威を振るったというを示す証拠が付け加えられてきているのである（p.117）。」

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの方が死んだか

アルノアにある二つの小村の世帯減少率と総人口死亡率 イゼル

エスケルシャン

黒死病前の世帯数（一二三四年）

六一世帯

二八世帯

黒死病後の世帯数（一二三五年）

四五世帯

二三世帯

世帯減少率

二六パーセント

一八パーセント

調整後の総人口死亡率

三四・五パーセント

二七パーセント

## 第六節 イングランド

「イングランドの黒死病死亡率についての研究は別格である。ベネディクトーがここで紹介・考察するものは、イングランドの史料の豊富さと、これまでの研究の伝統がもたらした高い成果にもとづくものである。イングランドの人口については、黒死病が発生する前の時期の史料と、黒死病が発生した後の時期の史料がともに豊富に存在し、その比較によって黒死病による人口減少の実態が把握しやすい。しかも人口関係の史料は国中にはば万遍なく認められ、また、その種類も多い。さらに、その史料は、当時イングランドにおいて極めて例外的であった都市民の史料ではなく、この時代の「八五パーセント〜九五パーセント」を構成した農民の史料が中心となっている。さらに、それに加え、当時あまりに困窮していたために納税義務が免除され、それゆえにふつう公的な文書には現われにくい最下層の貧民、すなわち「見えざる貧民」さえ、よくその実態がよく「見える」ような史料まで残されている（グラストンベリー修道院の荘園）。我々は、こうした極めて好都合な史料の残存状況から、（それでも史料批判はなおも必要であるのだが）イングランドの全般的な死亡率に迫ることがかなりの程度まで可能となるのである。およそこれが可能

となるのは、イングランドでは国中において、領主によって荘園の支配・運営体制が確立され、きめ細かく小作人を文書（荘園領主の土地登録台帳、地代表、会計簿）で掌握する仕組みが確立されていたことによるものである。そうした恵まれた史料にもとづいて、数十人の黒死病研究者が達成した成果を私が一覧にしてみたものが、表2―2「イングランドにおける黒死病死亡率のわかる共同体の一覧」である。そうした研究成果に対して、ベネディクトーは、これまでのようにあまり詳しく史料批判や「調整」をしていない。それはおそらくイングランドの史料は、史料の欠損が少なく、時期による大きな空白が少ないことと、研究成果

黒死病でどれだけの人が死んだか

表 15 イングランドの小作人の黒死病死亡率（ウスターシャー司教区、ダーラム修道院、グラストンベリー大修道院）（Benedictow, 364.）

荘園主	州	荘園	英語	死亡率
コーンウォール公所領	コーンウォール	カルストック	Calstock	62%
コーンウォール公所領	コーンウォール	クリムスランド	Climsland	42%
グラストンベリー公所領	サマセットほか(計4州)	*17の荘園	—	57%
ウインチェスター司教所領	ハンプシャー	ウォルサム	Waltham	65%
ウインチェスター司教所領	オックスフォードシャー	ウィットニー	Witney	65%
ティッチフィールド大修道院	ハンプシャー	コーハンプトン	Corhampton	54.5%
ウインチェスター司教所領	ウィルトシャー	ダウントン	Downton	66%
ウインチェスター司教所領	バークシャー	ブライトウェル	Brightwell	29%
マートン・カレッジ所領	オックスフォードシャー	クックスハム	Cuxham	65%
クローランド大修道院所領	ケンブリッジシャー	コッテンハム	Cottenham	57～49%
クローランド大修道院所領	ケンブリッジシャー	オーキングトン	Oakington	70%
クローランド大修道院所領	ケンブリッジシャー	ドライ・ドレイトン	Dry Drayton	47%
オックスフォード伯領	エセックス	フィングリス	Fingrith	63%
サフォーク伯領	サフォーク	ウォルシャム・ラ・ウィローズ	Walsham-le-Willows	60%
レー領主	ノーフォーク	ヘイクフォード・ホール	Hakeford Hall	+ 50%
ハールズオーエン大修道院	ウスターシャー	ハールズオーエン	Halesowen	40～46%
ウスター司教所領	ウスターシャー	*15の荘園	—	(+) 50%
マートン・カレッジ	レスターシャー	キプワース・ハーコート	Kibworth artcourt	64～70%
ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	ビルingham	Billingham	55%
ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	ニュートン・バーリー	Newton Bewley	59%
ダーラム大聖堂修道院所領	ダーラム	ウォルヴィストン	Wolviston	41%
ダーラム大聖堂修道院所領	ノーサンバーランド	*28の村	Willington	+ 50%

黒死病でどれだけの人死んだか

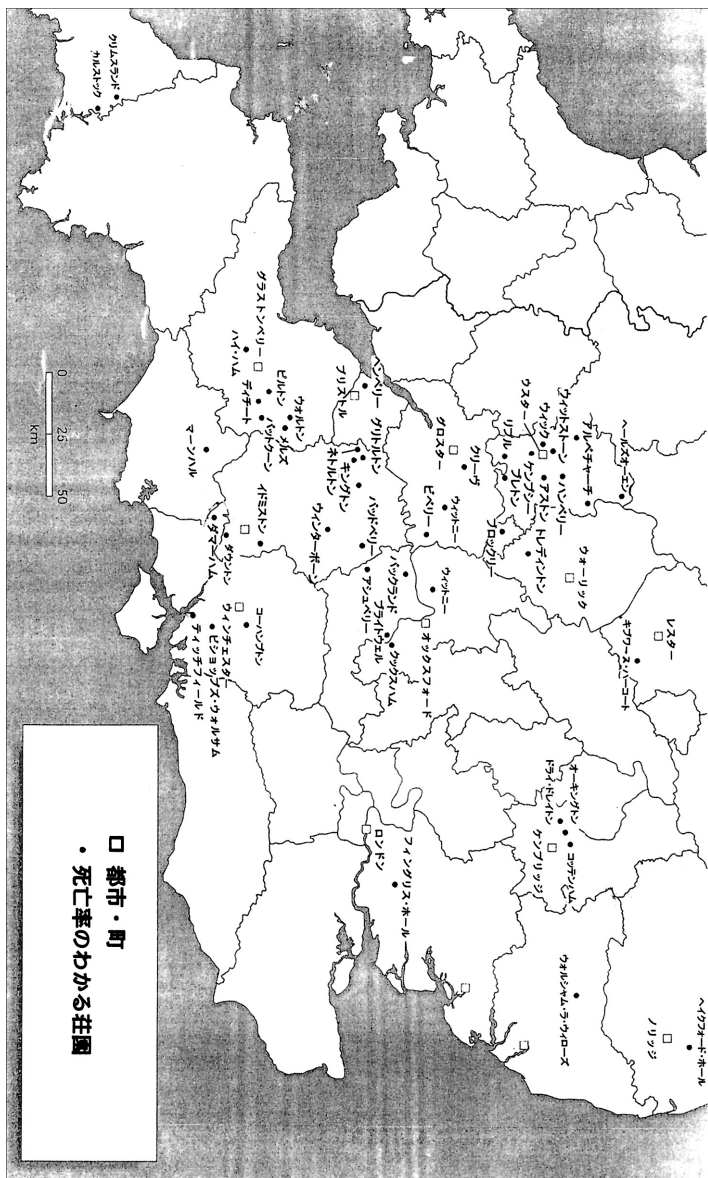
の水準が一定レベルに達しているせいであろう。」

まずイングランド王国の死亡率の全体を展望できる研究成果をみよう。表15「イングランドの小作人の黒死病死亡率（ウスターシャー司教区、ダーラム修道院、グラストンベリー大修道院）」は、イングランド王国の全域に及ぶ、極めて実証性の高い史料である。この表は、M・エクレストンやC・ダイヤー、B・M・Sキャンベルなど、十数名の研究者が各荘園の史料から推定した小作人の黒死病死亡率をそのまま並べたものである。これを見るだけで、イングランドのほぼ全土に及ぶ七九もの共同体の人口変動の実態がある程度示されるであろう。特に南部のウスターシャーを中心とする地域と北東部のダーラム州を中心とする地域は、地図6「イングランド南部の黒死病死亡率のわかる荘園、地図7「イングランド東北部における黒死病死亡率のわかる荘園」からわかるように、申し分ないといえるほどよく史料が広域にわたって数多く存在している（pp.360-368）。

これらの黒死病死亡率の史料は、荘園で働く「慣習小作人」the customary tenantry と呼ばれる正規の男性小作人（彼らは主として世帯主であった）を中心とするものである。「慣習小作人」とは、平均的な規模の小作人世帯が、収入をほかで得ることなく自活できるだけの必要な農地——最近の研究によると、それは「一八エーカー」であった（p.376）——を保有する富裕な部類の農民であった。ここには五一の荘園の史料から得られた死亡率ほかに、ダーラムの二八の村落の史料などから得られた死亡率も含まれている。数において突出しているのは、ダーラムの二八の村落の荘園、グラストンベリー修道院の一七の荘園、ウスターシャーの司教区の一五の荘園であり、なかには「五七パーセント」のものがあり、いずれも「五〇パーセント」を越える死亡率である。いくらか高い死亡率を示す約二〇の荘園も加えて概算すると、イングランドの慣習小作人——すなわち、納税小作人（中上層農民）——の死亡率はおよ

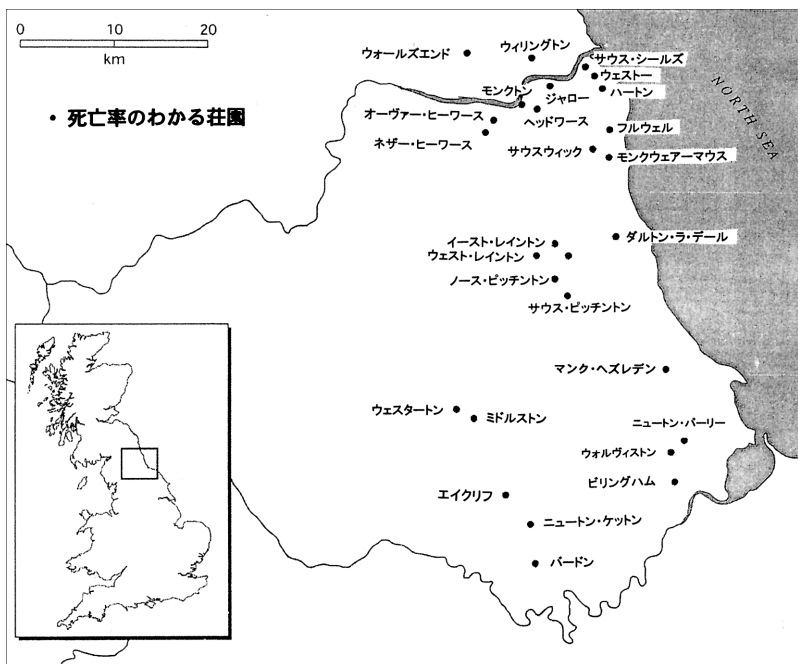


地図6 イングランド南部の黒死病死亡率のわかる荘園 (Benedictow, 361.)



黒死病でどれだけの人死んだか

地図7 イングランド東北部における黒死病死亡率のわかる荘園 (Benedictow, 366.)



黒死病でどれだけの人死んだか

そ「五五パーセント」になる (p.377)。

ここで得られた「五五パーセント」という死亡率の数値は、主に世帯主であった小作人の死亡率であり、それは実質的に「世帯減少率」を示したものである。したがって次に「総人口死亡率」を求めなければならない。そこで、まず、比較的強壮な成人男性からなる世帯主は、疫病に弱い幼児・女性よりも黒死病死亡率は低かったはずであり、全体の黒死病死亡率を反映しておらず、実際にはもっと高くなる。さらに、黒死病後の世帯規模が縮小したことも考慮して、標準想定を適用することで、世帯人の家族を含んだ、黒死病による人口死亡率としては「六〇パーセント」という数値が得られる。さらに、加えて考慮すべきは、「見えざる貧民」の存在である。正規の慣習小作人よりも貧しい無税の無産農

民の存在は、全体の死亡率を「二・五パーセント」ほど高める。こうしてイングラント全体の平均的な黒死病死亡率は、最終的に「六二・五パーセント」となる (p.377)。

「六二・五パーセント」という数値は、これまでヨーロッパの各地域でしばしば認められた死亡率「六〇パーセント」と大差のない数値である。「このように見ると、黒死病は、都市に対しても、また農村に対しても同程度の打撃を与えたように、ヨーロッパの「大陸」に対しても、またイングラントのようない「島」に対しても同程度の打撃を与えたということになる」。

「土地を持たざる男」 (*landless men*)

富裕であった慣習小作人の階層と比べてもっと貧しい人びと、さらには最も貧困な層の

黒死病でどれだけの人が死んだか

表 16 グラストンベリー大修道院の 17 の荘園に住む「土地を持たざる男」の黒死病死亡率 (S=サマセット、W=ウィルトシャー、B=バークシャー、D=ドーセット) (Benedictow, 375.)

荘園	人数 1348 年	死者数 (記録)	死亡率 1348 年 (%)	1350 年 での人数	減少率 1350 年 (%)
ハイ・ハム S	65	27	42	26	60
ディチート S	46	25	54	18	61
ピルトン S	75	46	61	22	71
バットクーン S	39	21	54	9	77
メルズ S	79	46	58	19	76
ウォルトン S	31	19	61	12	61
マーンハル D	28	10	36	9	68
ダマーハム W	156	100	64	57	64
イドミストン W	58	29	50	21	64
ウィンターボーン W	24	9	38	15	38
キングトン W	57	32	56	9	84
ネルトン W	62	30	48	21	66
グリルトン W	43	27	63	13	70
クリスチャン・マルフォード W	79	52	66	15	81
パッドベリー W	45	34	76	7	84
アシュベリー B	20	11	55	5	75
バックランド B	70	42	60	22	69
計	977	560	57	300	69

黒死病でどれだけの人々が死んだか

無産農民（「見えざる貧民」）も存在した。研究者M・M・ポスタンは、黒死病前の時代において「一八エーカー」の農地を保有していない農民が高い割合で存在したことを強調する。ポスタンは、一〇エーカー以下の小作人が莊園世帯の半数以上存在していたことを確認している。この階層が、実は、深刻な死亡率を被ったのである。彼らの高い死亡率は、M・エクレストンのグラストンベリー修道院の研究（ほかにラツイのヘルズオーエンの研究など）によって明らかにされている。それがエクレストンの作成した表16「グラストンベリー大修道院の一七の莊園に住む「土地を持たざる男」の黒死病死亡率」である<sup>(29)</sup>。彼ら最下層の無産農民（「土地を持たざる男」*landless men* すなわち「ガーシオンズ」*garciones* と呼ばれる人びと）は、一二歳以上の男子からなり、保有財産（家督）をもたないことから相続税——死者の最上の家畜等の領主への上納——も払わず、また、借地料も払わなかった。しかし、人頭税のみは払ったことから、かろうじて記録に残されたのである（p.376）。

表16は、黒死病の直前と直後の人数を伝える上質の史料である。この表によると、これらの莊園で人頭税を払う義務のあった男性の何と「五七パーセント」もの人びとが疫病死したのである。さらに、この研究者は「記録されていない人びともいたので死亡率は低く見積もられているかもしれない」と述べているので、実際の死亡率がほぼ「六〇パーセント」であったことを示している「さらに言えば、ベネディクトーの立場から言うと、ガーシオンズは、主に青壮年の男性（多くは世帯主）であり、そのもとで生きる子どもや女性などの疫病に弱い家族を含めてその人口死亡率を算出すると、死亡率はさらに高くなるであろう」。

したがって、ガーシオンズは、先に見た正規の小作人の死亡率（「五五パーセント」）よりも「五パーセント」高くなるのがわかる「まさに、貧困とそれに伴う生活環境の劣悪さは、そのまま高い黒死病死亡率に反映されているの

である」。

「イングランドにはこのような最下層の貧民——他の国々では「見えざる貧民」としてあいまいに扱われてしまう存在が、まさに「目に見える」かたちで存在し、その死亡率が特定できることは、ヨーロッパ的展望から見て極めて重要である。つまり、エクレストンによって見出されたグラストンベリー修道院の荘園の「土地を持たざる男」の存在とその高い死亡率は、これまでヨーロッパのほかの国々で想定したこと、すなわち、史料から見えない最下層の貧民が実際に存在し、それが全体の死亡率をつり上げるということ（標準想定として「二・五パーセント」の加算）がほぼ妥当なものであることを証明するものである。」

#### 最下層民と階層変動

イングランドの農村社会において、最下層の貧民やそれに準ずる人びとは、黒死病が発生する以前の時代にどのような生活をしていたのだろうか。そして、その後、黒死病を生き延びた場合、人口の激減した時代をどのように生きたのであろうか。

豊穡な一三世紀において生産性の画期的な向上によってイングランドの人口は倍加したが（J・ギャンペルによると「イギリスの人口は、一〇六八年から一三四八年のあいだに三倍になった<sup>(30)</sup>」）、一四世紀に入ってから、相次ぐ凶作や、すでに前世紀に増加していた人口のおかげで食糧は不足し、人びとの生活は圧迫された状態に陥った。荘園では、生産される食糧を上回る人口が存在し、慢性的な飢餓が支配していた。この状況では、生きていくことに必死な下層の農民は、生活の糧のために、荘園の領主から課される高い借地料、さらに、重い賦役や相続税を飲まざるを

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

えなかったのである。特に、最も下位に位置した土地のない人びと、すなわち「ガーシヨンズ」は、生計のためにわずかな賃金で季節労働や日雇いで重労働に耐えて生きていかねばならなかった。

黒死病が勃発した時点でのこの貧困農民の階層——無産労働者、小土地労働者、季節労働者、日雇い労働者——の数は非常に多かった。彼らは、一三世紀から一四世紀半ばまでの間にその数を増加させ、その人数は「一人前の慣習小作人 (fully-fledged customary tenants)」(一五エーカー以上の土地を持つ小作人、または一八エーカーの土地を持つて自営農業で自活できる小作人)と同じ位に達するか、それを凌いでいた (pp.360-362)。このように、荘園のなかの半数か、それ以上の人びと——すなわち「貧民」——が、生きていくに十分な土地を持つことを夢見ていた存在であった。

こうした状態のイングランド農村を黒死病が襲った。大量の農民が死んだが、そこには多くの「一人前の慣習小作人」も含まれていた。そうした慣習小作人が、跡継ぎのないままに疫病死した場合、世帯主のいない土地は相続税が支払われなかったことから、領主に直ちに没収された。こうして、没収された土地は、運良くペストを生き残いた「土地を持たざる男」たちに次々と貸し与えられたのである。「土地を持たざる男」たちは、突如として農地を得たことから、長年抱いていた夢をようやく叶えることができたのであった。ここに彼らは、無産農民から慣習小作人へと一気に階段を上り詰め、階層変動に身を任せたのである (p.362)。

この階層変動は、実は、慣習小作人が疫病死した直後から間髪入れずに開始され始めた (そして、疫病後も何年もかけて進行した)。「領主」と「新しい小作人」の間で契約は次々と交わされ、死んだ慣習小作人から、新しい慣習小作人への入れ替えは、大きな混乱もなく進んだという。研究者 A・E・レヴェットのことばによると、ペスト後の

新たな登録は、「莊園の会計簿が保存されているイングラント南部の六〇の莊園では、ペストの二年間の期間においても形式上いかなる亀裂も変化も会計簿には認められず継続されたのである」(pp.371-372)。

こうして新しい小作人は疫病の後に間髪入れずにのし上がり、慣習小作人の埋め合わせをしたので、疫病前には無税ゆえに登録されずに姿を見せず、疫病後は元の慣習小作人があたかも生きているかのように成り代わって姿をくらませて、研究者を欺いたのである。それで黒死病死亡率を低く算定するように作用したのである。

研究者C・ダイヤーは、ウスターシャーの司教区に属する一五の莊園において、全部で「四二パーセント」の小作人の数が減少したと判断しているが、この数字は小作人の間の実際の死亡率を表わしたものと取れない。というのは、その判断は、ペスト（この地方は一三四九年に到来）が過ぎ去って二、三年から四年も経過している時点、すなわち一三五一年と一三五三年の時点での新しい小作人の登録にもとづいているからである。この時期は、すでに「土地を持たざる男」たちや数多くの貧困小作人、借地人（転借人）が、新たな土地、すなわち、跡継ぎがいなくて領主に没収された立派な所有地を手に入れていた時期であった。

この実態のより明快な解明の鍵は、黒死病前後の時期のキブワース・ボーチャンに隣接した莊園の様子についての研究成果から得られる。それが、表17「キブワース・ビーチャンの十人組の農村人数の変動」のデータである。

すなわち、キブワース・ビーチャンには、一三四八年の時点で「一二二人」のメンバーが存在していたのに、一三四九年にはペストの惨禍によって「四〇人」

表 17 キブワース・ビーチャンにおける十人組の人数の変動  
(Benedictow, 374.)

年	男
1346	96
1347	108
1348	122
1349	40
1350	72
1351	84
1354	96

黒死病でただけの人が死んだか

## 黒死病でどれだけの人々が死んだか

にまで激減してしまった。これはほかならぬ黒死病による直接の影響である。十人組の組員の黒死病死亡率は「六七パーセント」である。ところが、それから、翌年の一三五〇年には、数が増加し始め、「七十二人」となる。さらに、その翌年の一三五一年には「八四人」に増加。そしてペストから五年後の一三五四年には、「九六人」にまで回復しているのである。この増加は下層の「土地を持たざる男」がはい上がって前任の小作人の地位を充填したことによるものである（無税の者は納税者に姿を変えた）。黒死病に続く年のそこでの成り上がりの慣習小作人（十人組）の数の増加は、ペストの実際の衝撃を隠すものだろう。

このキプワース・ビーチャンの史料では、小作人の数が黒死病の年である一三四九年から一三五〇年代半ばまで、途切れることなく残っている。で、実態が我々に伝わり把握しやすいが、ふつうの場合、いきなり一三五五年の史料を与えられ、そこで得られた人数が誤まって黒死病後の生き残りの実数と判断され、黒死病死亡率は実際よりも低く算定されてしまうものである。この荘園の史料のおかげで、慣習小作人の地位を補填する存在としての「見えざる貧民」の存在、すなわち黒死病前には姿を見せず、黒死病後には納税階級に姿を隠す存在が如実にわかるのである。

同様のことはエクレストンの先の成果である表16「グラストンベリー大修道院の荘園に住む「土地を持たざる男」の黒死病死亡率」からもわかる。ここでは「一三五〇年での人数」の項目に注目したい。

エクレストンは、この表では最初に一三四八年での「土地を持たざる男」の非常に高い死亡率（「五七パーセント」）を問題にする。しかし、今問題なのは、もはやペストの惨禍が過ぎ去った時点、すなわち一三五〇年の時点で、どうしてなおも「土地を持たざる男」がかくも減少していたのかということである。すなわち――

一三四八年 九七七人



一三五〇年 三〇〇人

この減少ぶり（「六九パーセント」の減少）はどういうことだろうか。実は、彼らは死んだのではない。彼らは、小作人が疫病死して空き地となった土地に移り、そこで、長年の夢であった土地を獲得し、立派な納税者となって、そこに姿をくらませたと考えるべきなのである。「一三四九年」の一二カ月間とその前後の間に一気に階層変動を達成したのだ。

### 司祭の死亡率

「ベネディクトーはこれまでイングランドの司祭の死亡率において蓄積された優れた研究に対して、なおも史料批判の必要性を説く——。ローマ・カトリック教会において、教区民の「靈魂の救済」のための活動、つまり聖職者による日々のミサや秘跡は、キリスト教の本質的な事柄であり、司祭の重要な任務であった。特に死への旅立ちは「来世での永遠の生」に向かうものとして宗教的に大きな意味をもつものであった。そうしたなか、疫病による大量死に襲われたのである。そこでは信徒のみならず、多くの司祭も命を落とした。そして、司祭が疫病死した場合、欠員補充として、ふつう直ちに新しい司祭の叙階（就任）がおこなわれるべきであった。そして司祭の叙階は司教によって記録された。そうした、これまでの研究者の成果をまとめたものが地図8「イングランドの教区司祭の黒死病死亡率」である。司祭の黒死病死亡率は、平均すると、およそ「四五パーセント」である。この数値はさらに史料批判して検証されねばならない（p.333）。

まずここにひとつ大きな問題があった。「司祭の死亡率」と「社会全体の死亡率」との関係である。司祭は一般の黒死病でそれだけの人が死んだか

地図8 イングランドの教区司祭の黒死病死亡率(%) (Benedictow, 357.)



黒死病でどれだけの人が死んだか

人びとと比べてその疫病死は多かったのか、それとも少なかったのか——これについて従来は、司祭の疫病死は一般の人びとより多かったと考えられた。それは、職務上、司祭が被る高い感染の可能性が考えられたからである。すなわち、信徒がペストに罹って臨終にあった場合、受けなければ地獄行きとされた終油の秘跡を切実に望んだ。そして、連絡を受け、司祭はみずから患者の家に赴いて、最後の秘跡を授けたと考えられた。こうして司祭は疫病患者と接する機会が非常に多いと考えられたのである（同じように疫病患者を診察しなければならなかった「医師」、臨終にある遺言者から直接口頭で遺志を確認し、遺言書を作成しなければならなかった「公証人」も、疫病の感染の高い可能性にさらされ、疫病死亡率が高かったと考えられた）。日本の黒死病関係の名著で多くの人に読まれた概説書、村上陽一郎『ペスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊——』にも、イングランドの司祭の高い感染率の可能性が前提とされ、次のように記述されている。

聖職者というのは、埋葬に立ち会い、終油の秘蹟をさすけ、あるいは救助活動に身を捧げたりで、患者や死者との接触度が大きく、それだけ危険度も高かったから、標準的指標にならない、という批判もあり得よう<sup>31)</sup>。

つまり、感染率の高いはずの司祭の黒死病死率は、いわば死亡率の上限の値であり、平均はそれを越えることはないだろうと判断される。しかし、これは一種の先入観であり、ベネディクトーはそうは決して考えない——

司祭はたとえ疫病患者の家に赴いて疫病死寸前の信徒に秘跡を授けたとしても、それは時間的には一時的なことであって、その場ですぐにペストノミに刺されるとは限らない（飛沫感染する肺ペストの場合は別だが）。むしろ司祭が夜や余暇に多くの時間を過ごす自分自身の家（司祭館）は、ふつう石造りの家で衛生的であったためにペストノミ

黒死病でどれだけの人死んだか

## 黒死病でどれだけの人死んだか

を近づけなかった。また、司祭の場合、食生活もよく、たとえペストに罹ってからも、栄養補給にも恵まれ、回復のチャンスがあった。そのため司祭の黒死病死亡率は一般の人びとより低かったのである。これまで見たように、多くの地域共同体の黒死病死亡率は「六〇パーセント」程度であったが、司祭の場合はそれより低い死亡率が考えられる。その意味で、これまでの研究者が提示したイングランドの司祭の死亡率（四五パーセント）が、一般の死亡率より低いのは妥当なところである。司祭の死亡率を死亡率の上限とするなどということはとんでもないことである。以下、ベネディクトーの展開した司祭の黒死病死亡率を二、三の要点に絞って紹介する。」

イングランドの司祭の死亡率を巡る今までの史料批判は不完全であった。もっと包括的で、かつきめ細かい議論がなされる必要がある。まず、ペストの大流行した時期に、司祭のポストが空位になったからといって、それが「司祭の死」を意味するとは限らなかった。空位を司祭の死としてカウントしてはいけない場合があった。司祭のなかには死が怖く、辞任してしまった者がいたのである。具体例を挙げると、一三四九年の「受胎告知祭」（三月二五日）から翌年の五〇年の「受胎告知祭」（三月二五日）までの間のまる一年間において、リンカン司教区において一〇二五件の司祭の叙階がおこなわれた。そのうち二〇パーセントにあたる二〇一件は辞任によるものであった（p.34）。

さらに、その空いたポストは必ずしも埋められたとは限らなかった。その理由のひとつに、後任に就くべき者もまた疫病死していたことが挙げられる。また、後任に就くべき人にとっても、高い疫病死のリスクを伴う仕事を受けたことがあった。さらに、疫病のために教区民が激減してしまい、得られる収入が大幅に少なくなったこともあった。こうして空位になったままのポストがある場合、その数は、司祭職の数の分母（総数）から削除されるべき

である。そうしなければ、司祭の正しい疫病死亡率はえられないのである。

ケントのロチエスターの修道士であるウィリアム・ディーンは一三四九年六月二七日にロチエスターの司教から発行された命令に回答している。当時は疫病がいまだ猛威を振るっていたが、少し落ち着いた時期であった。その書状にはほかの事柄とともに、司祭の苦しい立場（すなわち、数多くの信徒の死去に伴う司祭の収入の減少）が書かれていた。

司祭の中には、今や名実ともに空位となっている聖職に就くのを拒んでいる。なぜならば、彼らに支給される給料は少ないからである。そして、なかには、長いこと受給していた聖職をこれ以上続けて受けることに躊躇している。というのも、教区民が死んでしまったせいで、周知のように俸給が非常に減少してしまったので、生計を立て、靈魂の治癒の責務に耐えることができないからである。こうしたことのために、教区民は長い間ミサを受けることができない。そして、教区民の靈魂の治癒は放棄されてしまって、靈魂が多大な危機に瀕しているのである（p.346）。

また、司祭のなかには、みずからの命惜しさから、助祭に命じて、臨終にある疫病患者に秘跡を授けるように命じた者もいた。これが実際には司祭の死亡率を下けているものである。委嘱された助祭のなかには、疫病で瀕死にある教区民の家に入るのを拒絶したかもしれないが、彼らのかんりの割合の者は、終油の秘跡をしなかったことで教区民の魂が地獄に落ちるのを防ぐために、忠実に聖務を遂行した。ひとつに、この助祭の代理行為によって、教区司祭の死亡率が大幅に低くなったことは考えられることである（p.347）。こうしたことから、「司祭の死亡率」ではなく、助祭も含めた聖職者の死亡率全般を見なければ、在俗聖職者の本当の死亡率は出てこないことになる。

また、司教がすべての司祭の叙階の権利を持っていたわけではなかった。だから、司教区で確認された司祭の叙階

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

の数が、その司教区のすべての司祭の死を意味するわけではなかった。たとえば、ヨーク司教区の場合、教区の数は一〇〇〇に少し満たない数であったが、司教がみずから任命できた司祭の数はわずか「五三六」であった（p.345.）。ひとつの司教区の司祭の総数が正しく把握されなければ、正しい死亡率は得られないことになる。

司祭について隠された状況から見て、その実質的な死亡率が低く見積もられている。実際には司祭の黒死病死亡率は、五〇パーセントに引き上げられる。その一方で、司祭の恵まれた生活（住居・食生活）から、それが一般の農民とは一線を画した低い死亡率にあったことも事実なのであると考える（p.377.）。

# 注

- (1) G. Villani, XI, ICIV.
- (2) A. B. Falsini, "Firenze dopo il 1348. Le conseguenze della peste nera", *Archivio Storico Italiano*, 129 : 425-496.
- (3) Herlihy and Klapisch-Zuber, 67-69. なお、日本においてハリーヒーとクラピッシュズベールの見解を支持する研究として次のものがある。齋藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館 二〇〇二年 三七二―三七五頁。ハリーヒーらは、新生児の洗礼堂での受洗者の数（出生率）、兵役可能男子の数、当時の年代記や著述などから総人口を推定する。
- (4) 石坂史料集（六）第二章「比較参考資料 イタリア以外の地域の黒死病 その一」一四二頁。
- (5) E. Fiumi, *Demografia. Movimento urbanistico e classi sociali in Prato dall'età comunale ai tempi moderni*. Firenze, 1968.
- (6) ベネディクトーはフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の埋葬者数からフィレンツェの富裕層の死亡率を考察しているが、これは妥当な考察とはいえない。なぜなら、埋葬を記録していた托鉢修道士自身がペストで死んでしまつて正確に『死者台帳』に記載していない可能性が極めて高いからである。詳しい理由は、次を参照。石坂史料集（七）第二章「サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の『死者台帳』よりペスト死の数量的傾向を読む」四一頁。
- (7) W. M. Bowsky, "The impact of the Black Death upon Stienese Government and Society", *Speculum*, 39 : 1-34, 1964.
- (8) L. Del Panta, *Le epidemie nella storia demografica italiana (secoli XIV-XIX)*, Torino, 1980 ; M. Livi Bacci, *La società italiana*

*devant les crises de mortalité*. Firenze, 1978.

(9) 石坂史料集(一) 第三章「アーニョロ・ディ・トゥーラの年代記」四七頁。

(10) 石坂史料集(七) 第二章「サンタ・マリア・ノヴェツラ聖堂の『死者台帳』より―ペスト死の数量的傾向を読む―」四一頁

(11) 六九―七六頁。

(12) E. Fiumi, *Demografia. Movimento urbanistico e classi sociali in Prato dall'età comunale ai tempi moderni*. Firenze, 1968.

(13) ベネディクトーは具体的にこの数値(黒死病前人口)を明示していない。( )に入れて示したこの数値は私が死亡率から逆算して出した数値である。

(14) J. Rotelli, *Una campagna medievale. Storia agraria del Piemonte fra il 1250 e il 1450*, Torino, 1973; R. Comba, "Vicende demografiche in Piemonte nell'ultimo medioevo", *Bolettino storico-bibliografico subalpico*, 75: 39-125, 1977.

(15) ボローニャの黒死病死亡率についてのベネディクトーの見解を( )で紹介する。

死亡率の特定のための史料として、「兵役適格者名簿」(一八歳以上、七〇歳未満の男子)がベネディクトーによって扱われている。これは黒死病直前に作成された名簿と黒死病直後に作成された名簿の両方が残っており、その意味では死亡率の算定には有力な史料である考えられる。ベネディクトーはこの史料を用いた先行研究を批判する。この史料を用いたA・I・ビーニは、その著作(A. I. Pini, *La società italiana prima e dopo la «peste nera»*, Pistoia, 1981.)で「従来の研究と同様に、黒死病の死亡率を、兵役適格者集団の「黒死病前の人数(人口)」で「黒死病後の人数(人口)」を割ることで算出し、ほぼそのままの数値をボローニャの都市全体の死亡率として採用している。

一三四八年の兵役適格者人口 一二〇七人 (A)

一三四九年の兵役適格者人口 七八三人 (B)

ビーニは、「黒死病に対する生存率」を  $(B) \div (A)$  から算出して、「六五パーセント」を導く。そしてそこから逆算して「黒死病による死亡率」を「三五パーセント」と割り出した。そして、若干の調整作業として、「女性の死亡率の方が高かっただろうということ」、また、「聖職者が史料から排除されていること」の二つを考慮して死亡率に幅を持たせて、こう結論を述べている(といっても、いったい聖職者の存在が、全体の死亡率を高めように位置づけられているのか、その反対なの

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

かは、あいまいである)。

「直ちに帰結されることは、こうである——すなわち、ペストは三分の一から五分の二の間の、幅のある割合で都市の住民の生命を奪ったのである。」(p.9)

つまり、ピーニの説によれば、ボローニャの「黒死病死亡率」は「二三パーセント」から「四〇パーセント」である。この説では、確かに女性と聖職者の存在について一定配慮がされていて、幅を持たせているが、ベネディクトーなどによる新しい歴史人口学に立てば、これではまだ内実を考慮した算出法とは言えないだろう。ベネディクトーがおこなった黒死病死亡率の算定の方法は、従来の方法に比べて、いくつかの点で極めてきめ細かい、歴史の実態に即したものであったと言える。実は、このボローニャの兵役適格者の史料には、ピーニが指摘した以外に配慮すべきことが多く存在しているのである。この史料について、ベネディクトーによる史料批判は、かなり簡略に扱われているので、私が補足すると、少なくとも次の四点となる(文末に\*の印のついた文章は、ベネディクトーの著書全体の立場に立って石坂が補足したところである)。こうしてベネディクトーはボローニャの黒死病死亡率を四五パーセントと判断する。

(一) 健康上弱い年代である乳幼児の高い死亡率が想定されていない\*。

(二) 一三四八年にはまだ一七歳であったために兵役的適格者の名簿に登録されずにいて、一三四九年になって新たに登録された年齢層の者がいたはずで、その年齢層は人数的に最も多かったであろう。その数は疫病後の兵役適格者の人数を少なくとも三パーセントほど増加させたであつただろう (p.301)。

(三) 兵役適格者からは慢性の病人や身体に障害のある人は、候補者からもとと除かれていたかもしれない\*。また、徴兵の候補者になりえない都市の外部から来ていた出稼ぎ労働者などの存在を考えなければならない\*。さらに、疫病に罹病してから患者に手当が十分に与えずにそのために死んだ下層階級が存在を考慮しなければならない (p.301)。

(四) 比較的健康なはずの兵役適格者の黒死病死亡率が、都市全体の黒死病死亡率を代表しているか疑問である。総合的に見ると、ボローニャの都市に住む人びと全体の黒死病死亡率は、少なくとも四五パーセントにまで高くなるだろう (p.301)。

(16)

E. Fiumi, "La popolazione del territorio volterrano-sanginignanese ed il problema demografico dell'età comunale", *Studi in onore di Amintore Fanfani*: 249-290, 1962.



- (17) Carrasco Perez, J. *La poblacion de Navarra en el siglo XIV*. Pamplona, 1973 ; Zabalo Zabalegui, F. J, "Algunos datos sobre la re-gresión demográfica causada por la peste en la Navarra del siglo XIV", *Miscelanea Jose M.<sup>a</sup>, Lacarra* : 81-87 ; M. Berthe, *Le comté de Bigorre. Un milieu rural au bas Moyen Age*, Paris, 1976.
- (18) A. Pladevall, "La disminucio de poblament a la Plana de Vich a mijans del segle XIV", *AUSA*, 4, 1961-3, 361-373 ; R. Gyug, "The effects and Extent of the Black Death of 1348 : New evidence for clerical mortality in Barcelona", *Medieval Studies*, 45 : 385-398, 1983.
- (19) R. W. Emery, "The Black Death of 1348 in Perpignan", *Speculum*, 42 : 611-23, 1967.
- (20) E. Baraiter, *La démographie provençale du XIII<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1961.
- (21) R. Brondy, B. Demotz, J.-P. Leguay, *La Savoie de l'an mil à la Réforme* (XI<sup>e</sup>-début XVI<sup>e</sup> siècle), Quest-France, 1984.
- (22) B. Demotz, "Ugine au moyen âge", *Histoire d'Ugine* : 25-118, 1975.
- (23) R. Brondy, *Chambery. Histoire d'une capitale, vers 1350-1560*, Lyon, 1968.
- (24) P. Duparc, "Évolution démographique de quelques paroisses de Savoie depuis la fin du XIII<sup>e</sup> siècle", *Bulletin philologique et historique (jusqu'à 1610) du comté des travaux historiques et scientifiques*, [Année 1962, pub. 1965] : 247-277, 1962.
- (25) M. Gelting, "The Mountains and the Plague : Maurienne, 1348", *Collegium Medievale*, 4 : 7-45, 1991.
- (26) フランスの「中央山岳地帯」に位置する都市シヨアの死亡率に関するベネディクトーの考察をここに紹介する。現在アヴェロン県にあり、モンペリエの西北約九〇キロメートル、ローヌ川の西方一三〇キロメートルにある。町をタルン川が流れ、タルン川はここから西に流れてアルビへと通じる。シヨアの都市の古文書館には人頭税台帳が残されている。これは一二八〇年以降ずっと長年に及んで記録されたものであり、そこには多数の世帯主の名前が記載されている。この台帳から、黒死病の二〇年前に記録された納税世帯の数が、その後、多少減少しているのがわかる。すなわち、一三二六年には「一五九八世帯」であった世帯が、一三四六年には「一五四一世帯」に減少し、これは「三・五パーセント」の減少である。ヨーロッパのどこにおいても一三四〇年代は凶作など、数々の苦難に見舞われた。この時期には多くの地域でかなりの人口減少が認められるが、シヨアの場合、この程度のわずかな減少で済んだのは、この都市とその周辺の地域が飢饉や凶作に対してかなりの抵抗力を備えていたことを示すものである。その主たる理由は、おそらくこの地域の農村の肥沃さによる生産性に加

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

え、畜産業も営み、両者をバランスのよい営みによるものであろう。「この地域の人々は、飢饉時には家畜の肉や酪農関係の保存食を食べることができ、穀物の不足を補えたのであろう」。しかし、この都市は、黒死病（一三四八年）を経た一三五三年の台帳でも、世帯数の急激な減少が続き、「九一八世帯」にまで落ち込んでしまふ。すなわち「四〇・五パーセント」の減少である。ミヨーの場合、奇妙なことに、これまでの多くの都市が周辺地域から流入する農民を受け入れたり、新婚世帯が増加するのと違って、黒死病から五年ほど経過した時期でも、なおも世帯数は減少し続けるのである。こうして一三五八年には「八九九世帯」にまで減少してしまうのである（二パーセントの減少）。この特異な現象はどういうことであろうか。ここから考えられることは、黒死病が都市部よりも農村部の方でまず圧倒的な数の死亡者を出し、それが深刻な経済的な打撃を与えたということである。その農民への痛烈な打撃は、跳ね返って都市の需要の減少をもたらし、都市の商業的、経済的活動の停滞・沈滞をもたらしただけである。周辺農村部の人口の激減のおかげで農村部からの需要が激減し、小都市ミヨーは農村から収益が得られず、それはそのままこの都市の経済活動の不振につながったのである。その結果として、ミヨーの都市人口は、ほかの都市や農村への移住によってゆっくりと減少し始めた。この都市の経済的低迷の背景から考えると、一三四九〜五三年というペスト後の五年間について、ミヨーの場合、都市の人口は増加しなかったと想定できる。黒死病直後の世帯数は一三五三年と変わらない「九一八世帯」程度であったことになる。

この世帯数から人口を割り出すが、この史料を扱ったフィリップ・ヴォルフと同様に、ペスト前の都市の平均的な世帯規模を「四人」、ペストの後のそれを「三・五人」に減ったと想定する。これによって中流・上流階級の課税世帯を含む人口は「六一六四人」から「三二一三人」（死亡率は「四八パーセント」であったことになる。さらに、貧困社会層の存在とその高い死亡率を考慮して、小都市ミヨーの総人口死亡率は「五二・五パーセント」であろう。

ミヨーの黒死病による世帯減少率と総人口死亡率

黒死病直前（一三四七年）の世帯数 一五四一世帯

黒死病直後（一三四九年）の世帯数 九一八世帯

世帯減少率 四〇パーセント

調整後の総人口死亡率 五二・五パーセント

- d'Histoire (Belgisch Tijdschrift voor Philologie en Geschiedenis)*, 58 : 833-863, 1980.
- (28) G. Sivéry, "Le Hainaut et la Peste Noire", *Mémoires et publications de la Société des sciences, des arts et des lettres du Hainaut*, 79 : 431-447, 1965.
- (29) M. Eccleston, "Mortality of Rural Landless Men before the Black Death : the Glastonbury head-tax lists", *Local Population Studies*, 63 : 6-29, 1999.
- (30) J・ギャンペル (坂本賢三訳) 『中世の産業革命』岩波書店 一九七八年 八八頁。
- (31) 村上陽一郎 『バスト大流行ーヨーロッパ中世の崩壊ー』岩波書店 一九八三年 一二一頁。同類の指摘は、マクニール (下巻、二三八―二三九頁) にもある。

### 第三章 地域研究の総括的展望に対して——批判と評価——

ヨーロッパにおいて黒死病でどれだけの人が死んだか——これについて、これまで各地域の貴重な先行研究とそれにもとづいてベネディクトーがおこなった総括的な考察を見てきた。ベネディクトーは、考察の結びで次のように言う——『死亡率を推定する史料の残っている地域については、どこも共通して高い死亡率を示しており、なかには若干低い死亡率を示す地域もあるが、それでも五パーセント程度低いだけで、それは例外的なものである』(p.381.)。そして、表18「地方と国ごとの黒死病死亡率」を示してこう言う——

「もしこれらのデータがヨーロッパのほかの黒死病による被害を代表していて、当時のヨーロッパの人口が、ふつうそう信じられているように、八千万人あたりであったとするなら、彼らのうちの五千万人が黒死病で死んだのである」(p.382.)。

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人死んだか

これは彼自身も驚くような死亡率の数値（「六三パーセント」）である。実際、ヨーロッパの北部について見ると、イングランドの死亡率の数値が「六二・五パーセント」であり、ヨーロッパの南部については、カタルーニヤ地方の死亡率が「六〇〜六五パーセント」を示している。史料のある地域は、例外はあるが、ほとんどが六〇パーセントか六〇パーセントを少し出ている。こうして、ベネディクトーは、結論として「六割の死亡率」を提起する（心情的には「六割強」のようである）。以下、その結論とその結論を構成する考え方（方法、基本的な見方）について検討する。

# 第一節 批判——女性はや病に弱かったか——

ベネディクトーは、各地域の黒死病の死亡率を特定する際に、いつも女性の黒死病死亡率が高かったことを強調する。しかし、それは立証されたものではない。ここでは、この基本的考え方に絞ってベネディクトーを批判しよう。

中世・近世では租税はふうう世帯ごとに徴収され、その徴収記録が残されて、それがかろうじて人口の把握と黒死病死亡率の把握に役だっている。そこで、納税記録にもとづいて死亡率を算出した場合、その死亡率（世帯減少率）は、納税世帯主、つまり成人男性の死亡率となる。そこでベネディクトーは、老若男女の社会一般の平均的な正しい

表 18 地方と国ごとの黒死病死亡率（Benedictow, 383.）

地域・国	納税・借地 世帯主	納税・借地 世帯人口	総人口
ナバラ王国	55-60	60-65	60-65
カタルーニヤ地方	(71)	(74)	(60-70)
スペイン（全体）	55-60	60-65	60-65
フィレンツェ			60
トスカナ地方			50-60
ピエモンテ地方	42	50	52.5
イタリア（全体）			50-60
プロヴァンス地方	54.5	60	60
ラングドック他	50-55	55-60	60
サヴォア伯領	50-55	55-60	60
フランス（全体）	50-55	55-60	60
イングランド（全体）	55	60	62.5
全体	50-55	55-60	60

死亡率を出すためには「調整」が必要であると考え。そして、黒死病後の世帯規模の縮小、最下層民の存在とその高い死亡率、階層変動等の調整をおこなう。その際にベネディクトーは、幼児・子どもや女性については、世帯主である成人男性よりも死亡率が高かったと繰り返し述べている。乳幼児・子どもはそれとおりであり、問題はない。それについては、ピストイア研究を中心に、第一章の注(19)においてハーリヒーの学説を紹介して詳しく触れた。しかし、果たして女性は黒死病に対して男性より弱かったか。これについて、私がフィレンツェの教会の埋葬記録の史料を解析した立場からベネディクトーに対して疑問・批判を投げかけたいと思う。

ベネディクトーは、次のようなことばを述べている――

「たとえ世帯主が生き残ったとしても、必ずしも残りの家族が厳しい試練を生き延びたとは限らなかったであろう。なぜなら、先に述べたように、特に子ども、そして女性はペストの流行によってもっと高い死亡率を被ったのである。」(p.275-276)

「子どもと女性のかなり高い、相当上回った死亡率については疑いの余地がないものであることから、青年や成人の男性の死亡率の水準は……。」(p.314)

「女性の場合は、ペストにさらされることについて格別に高いリスクを負っている。なぜなら、女性は、クマネズミがその連れ合いのノミとともに好んで過ぐす人の家のなかに、男性よりも長い時間を過ぐすからである。」(p.299.)

このような女性の「弱さ」は年代記作家からも指摘されている。例えば、一三四八年のペストについてトレントの惨状を目撃した年代記作家ジョヴァンニ・ダ・パルマ(生没年不明。一四世紀)は「女の子の場合、美しい女の子の方が早く死んだ。また、成人の場合、男性よりも女性の方が早く、また多く死んだ」と述べている。しかし、人の見方には、好ましい、美しいものが失われた場合、その無念さから、それを実際以上に強調して報告しがちである。女

黒死病でどれだけの方が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

性——それも若くて美しい少女——の死は、目の前で起こった場合、極めて鮮烈で強く印象に残る事実かもしれない。ジョヴァンニ・ダ・パルマはこう伝えている——

私の聞いた限りでは、今回の疫病は、いつも女の子から始まった。それも特に美しい女の子から始まった。実際にトレントで起こったことなのだ。というのも、私自身、この眼で見たのだが、宮廷において、美しかった三人の少女が、ここで述べた出来事が始まった時に、一日のうちに死んでしまったのである<sup>(1)</sup>。

しかし、年代記作家もベネディクトーも、女性の弱さを強調するが、説得する実証的な数値は何も示していない。それに対して私はパソコンを利用して、フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の『死者台帳』を克明に解析した<sup>(2)</sup>。これは、かなり労力のいる作業であったが、この台帳の夏季三カ月間（六月～八月）と冬季三カ月間（一月～三月）、合わせて六カ月間の死亡者、すなわちこの台帳に記載された全埋葬者「一七七〇人」のうち六割の約一〇〇〇人（正確には「九七五人」）の氏名と記載項目をすべてパソコンに入力して、データ解析を試みた。内訳は、男性「五九二人」、女性「三八三人」であり、男性が六割、女性が四割である。ここでは、データ処理によって、全死亡者のうち、ペストによる死者の割合を「男」と「女」について数量的に特定することができた（また、女性の全死亡者のうち、ペストによる死者の割合を「妻」「寡婦」「独身」についても、数量的に特定でき、特に「寡婦」について非常に興味深い事実を発見した）。『死者台帳』に対してこのような数量的アプローチはこれまでなされたことがなく、これによってトレチェント（一四世紀）のペストの傾向について新しい発見ができたといえる。

この『死者台帳』は一二九九年から一六〇〇年間ほど記録された。しかし、毎年ほぼきちんと継続的に記載され、史

表 19 58 年間の夏と冬の死亡者

死亡者	夏	冬	男	夏	冬	女	夏	冬
1330	5	4	1	3	2	1	2	0
1331	14	13	1	8	7	1	6	0
1332	3	1	2	2	1	1	1	0
1333	21	6	15	6	3	3	15	3
1334	6	4	2	4	3	1	2	1
1335	11	2	9	4	2	2	7	0
1336	17	9	8	8	4	4	9	6
1337	18	9	9	10	5	5	8	4
1338	6	4	2	5	4	1	1	0
1339	7	2	5	6	2	4	1	0
1340	<b>70</b>	<b>64</b>	6	46	41	5	24	23
1341	14	12	2	6	6	0	8	6
1342	1	1	0	1	1	0	0	0
1343	11	4	7	8	5	3	3	1
1344	4	2	2	3	2	1	1	0
1345	11	1	10	3	0	3	8	1
1346	9	3	6	5	1	4	4	2
1347	22	22	0	14	14	0	8	8
1348	<b>72</b>	<b>71</b>	1	55	54	1	17	17
1349	5	5	0	4	4	0	1	1
1350	1	0	1	0	0	0	1	0
1351	2	1	1	2	1	1	0	0
1352	6	4	2	3	1	2	3	3
1353	5	2	3	3	2	1	2	0
1354	0	0	0	0	0	0	0	0
1355	11	8	3	4	2	2	7	6
1356	3	1	2	2	1	1	1	0
1357	6	6	0	4	4	0	2	2
1358	7	4	3	6	4	2	1	0
1359	2	2	0	1	1	0	1	1
1360	10	7	3	6	2	4	4	3
1361	5	5	0	1	1	0	4	4
1362	9	6	3	5	2	3	4	4
1363	<b>99</b>	<b>96</b>	3	77	74	3	22	22
1364	5	4	1	3	2	1	2	2
1365	3	1	2	2	1	1	1	0
1366	8	7	1	5	5	0	3	2
1367	7	4	3	2	2	0	5	2
1368	2	2	0	2	2	0	0	0
1369	10	1	9	8	0	8	2	1
1370	11	6	5	4	3	1	7	3
1371	7	5	2	2	0	2	5	2
1372	12	1	11	4	0	4	8	1
1373	<b>19</b>	<b>13</b>	6	12	10	2	7	3
1374	<b>44</b>	<b>36</b>	8	23	18	5	21	18
1375	1	1	0	1	0	1	0	0
1376	3	2	1	1	1	0	2	2
1377	12	3	9	7	3	4	5	0
1378	9	3	6	3	0	3	6	3
1379	10	2	8	9	2	7	1	0
1380	13	3	10	4	1	3	9	2
1381	18	8	10	9	4	5	9	4
1382	<b>27</b>	<b>16</b>	11	12	9	3	15	7
1383	<b>117</b>	<b>106</b>	11	72	67	5	45	39
1384	8	5	3	6	4	2	2	1
1385	3	3	0	2	2	0	1	1
1386	12	2	10	8	1	7	4	1
1387	17	5	12	9	4	5	8	1
	871	620	251	525	397	128	346	221
								125

黒死病でどれだけの人が死んだか

料として信頼できる（と私が判断した）期間は、一三三〇年から一三八七年までの五八年間である。この五八年間のサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂に埋葬された死亡者の数は表 19「五八年間の夏と冬の死亡者」に示されている。目を引くのは、一番左側の欄の「死亡者」——一年間の夏冬の死亡者の総数——の太字で示された数値であろう。それは「疫病年」の数値であり、死亡者の数が圧倒的に際だっている（「疫病年」には下線が引かれている）。一三四〇年、一三四八年、一三六三年などが際だっている。この表をもとに、女性がペストに対して弱かったかどうかを見てみよう。イタリアの場合、ペストは腺ペストであり、流行は夏中心であった。ノミが活動を停止する冬には死亡者は

黒死病でどれだけの人が死んだか

ゼロとなる。春は流行の前触れ、秋は流行の余波として疫病死は確かに認められるのだが、数が多くなく、それがペスト死なのか、それ以外による死なのか区別するのが非常にむずかしい。その意味で、この夏と冬のみのは析はそうしたあいまいな時期を排除してしまうので、一定有効である。

まず、この聖堂に埋葬された男性は、女性よりも数においてかなり多いことに注意しなくてはならない。この五八年間では、男性の死亡者（埋葬者）が「五二五人」、女性の死亡者が「三四六人」である（この教会は比較的富裕な層が利用。格式が高かったことから男性の方が多く埋葬されたのであろう）。これは「六」対「四」の割合である。調整しなくては比較がしにくい。そこで女性の数値を「一・五二倍」するこ  
とで「五」対「五」の割合が得られる（五二五人÷三四五人＝一・五二）。つまり、ある年の女性の「死亡者」を男性のものと公平に比べるには、「一・五二倍」すればよい。

表 20 「ペストに対する男性の弱さ」を参照されたい。ここでは一三四八年のペスト（黒死病）と一三六三年のペストに対する男女の死亡率の比較が示されている。一三四八年のペストのために、総数「七二名」が埋葬され、そのうち男性が「五四人」であったのに対して、女性は「一七人」である（ペスト以外の死亡者も男女それぞれに若干名いるかもしれないが、ここでは公平に両方とも無視する）。女性の「一七人」

表 20 ペストに対する男性の弱さ

	全死者	性	夏の死者	冬の死者	計	男女比調整後の疫病死の男女比
1348 年 (ペスト年)	72	男	54	1	55	100
		女	17	0	17	46
1363 年 (ペスト年)	99	男	74	3	77	100
		女	22	0	22	45
1330～1387 年の全死者	871	男	397	128		525
		女	221	125		346



を「一・五二倍」することで「二五・七九人」（約二六人）が得られる。この数値は男性のペスト死の数「五四人」を「一〇〇」とすると、「四六」となる。つまり、女性には男性の死亡者数の半分足らずの比でしかないのである。その差は歴然としたものである。興味深いことに、冬になると、死者の数は男性が「一名」、女性が「ゼロ」であり、この年の夏の惨状がうそのように静まりかえる。

次に一三六三年のペストを見てみよう。このペストでは総数「九九人」が埋葬された。そのうち男性が「七四人」、女性が「二二人」である。この女性の数を「一・五二倍」すると、「三三・四四人」（約三三人）が得られる。これは男性を「一〇〇」とすると、「四五」になる。これもまた女性がペストに対して男性ほど大きく反応して死亡しなかったことを示すものである。

次の表21「聖堂での男性・女性における疫病死と非疫病死の割合（一四～一五世紀）」は、台帳に記載されたすべての期間の夏・冬において疫病で死んだと考えられる男女と、疫病によらずに死んだと考えられる男女の数と割合を示したものである。まず男性の欄を見ると、この一六〇年間の夏・冬に、この聖堂に埋葬された男性の総数「五九二人」のうち、疫病死がやって来なかった年や、疫病年の冬に死んだ人の数は合わせて「三一九人」である。これは男性の総数の「五四パーセント」を占める。他方、疫病死したと考えられる男性（つまり疫病年の夏に死んだ男性）は「二七三

黒死病でどれだけの人死んだか

表 21 聖堂での男性・女性における疫病死と非疫病死の割合（14～15 世紀）

	男	女（計 366 人）				計／割合
性・身分	男	妻	寡婦	独身	不明等その他	
死者の数	計 592 人	計 216 人	計 75 人	計 75 人	計 17 人	計 975 人
非疫病死	319 人	133 人	62 人	45 人	10 人	569 人
	54%	62%	83%	60%	59%	58%
全ての死の中の 疫病死の割合	273 人	83 人	13 人	30 人	7 人	406 人
	46%	38%	17%	40%	41%	41%

黒死病でどれだけの人が死んだか

人」である（若干名は疫病以外の理由の死去かもしれないが、ここでは便宜的に無視する）。これは死者の総数の「四六パーセント」に及ぶ。夏と冬から見ると、一四世紀と一五世紀にまたがる一六〇年間に死んだ男性のほぼ半数は、実に疫病死によるものであったのだ。

では、女性はどうだろうか。女性については、幸い、台帳に記載する時に、家庭的な身分を記載する習慣があったので、その女性が「妻」であったか、「寡婦」であったか、未婚であったかが都合良くわかる。総数「三六六人」の女性の死亡者のうち、妻の身分で死んだ女性が「二一六人」であった。そのうち疫病によらずに死んだ女性は、「一三三人」であった。これは「六二パーセント」である。男性の死亡者の「非疫病死者」が五四パーセントであったのに対して「八パーセント」高い数値、つまりペストに強い数値が出ている。次に、疫病死は「八三人」であり、「三八パーセント」であり、男性の疫病死の割合「四六パーセント」よりも「八パーセント」低い。つまり疫病に対する女性の相対的な強さが認められる。寡婦に至っては、疫病に対する強さは顕著である。寡婦の全死者「七五人」のうち、疫病で死ななかった寡婦は「六二名」（「八三パーセント」）である。寡婦、つまり高齢の女性は、おそらくほとんど疫病にかからずに、天寿を全うして「高齢死」（当時こう言った）したり、ほかの理由で死亡したのである（この時代の女性の「長生き」についてA・カーマイケルは一五世紀のフィレンツェの穀物局の『死者台帳』から実証している<sup>(3)</sup>）。そして、わずか「一三人」のみが疫病死と認められる。これは、寡婦全体の「一七パーセント」という際だった疫病死の低さである。独身女性の場合は、概ね妻の割合と近いものになっている。

私が以上で述べたことから、ベネディクトーのように幼児と女性を同列に扱うことは誤りであることがわかる。実際、この観点から、モリーエンヌ（サヴォア伯領）の農村にあったグルニの村の人びとの運命の一覧をもう一度見て

みる価値があるだろう。

全村で一軒、男性世帯一〇軒からなるグルニ村の場合（表22「グルニの村の夫と妻の疫病死の比較」）、ほとんどの家も幼児や子どもがいるようで、それを育て養う母親がいたようである。それにもかかわらず、表22から、妻の死については二軒の家についてのみ言及されているにすぎない。一方、一家の大黒柱の男性（世帯主）の疫病死は六軒に及んでいる。この例は、極めて小規模な村であって全体の傾向を代表するものであるかは、疑問であるが、ことによると、ペストに対する女性の強さ、男性の弱さを示している典型かもしれない。ベネディクトーがみずから紹介したこの村の状況からも彼の基本的な考え方がやや疑問視される。ついでに言うと、このグルニの村の実態から見ると、ベネディクトーの考える世帯規模、つまり黒死病前の四・五人、黒死病後の四・〇人という標準想定も疑問視される。

## 第二節 疑問

### （一）残された地域と共同研究の必要性

ベネディクトーは、彼の著書においてひとりの研究者ができる最大のことをおこなったように思う。これ以上のものを望めば、出版はもう一〇年ほど遅れたことだろう。ひとりの人間でこれだけ広汎にかつ詳細に考察を展開できる

黒死病でどれだけの人死んだか

表 22 グルニの村の夫と妻の疫病死の比較  
●疫病死 ○生存

	世帯主（夫）	妻	子ども
1	●	○	●●●
2	●	○	●○
3	—	○	●○
4	○	○	●
5	●	○	●
6	●	○	○
7	●	○	●●●
8	○	●	●○
9	●	○	○○○
10	○	●	—

## 黒死病でどれだけの人が死んだか

ものかと、ただ驚かざるを得ない。そこには長い年月の労苦があったに違いない。たとえば、著書のなかの、わずかに一頁から二頁程度の文章でも立派な専攻論文のような高い専門性をもっており、そこには、ありがちな啓蒙的、通俗的な概説的要素はない。

しかしそれでもひとりではできることはやはり限界がある。この著作の巻末にある参考文献表を見ると、まだ言及されていない都市で黒死病死率の特定が可能に思われるような論文がかなり見受けられる。まず、ベルクドルトの黒死病の名著<sup>(4)</sup>が出版されたドイツの場合、自治性の高い有力な中世都市なら、そこにはきっと黒死病死率の推定に役立つ史料がまだあるように思われる。ブレーメンの場合、都市は、特に黒死病の症状で死んだ者の数をひとりずつリストに記載し、その数は「六九六六人」になったという<sup>(5)</sup>。ドイツでは、ギルドの結束・組織力も強く、その関係で史料がありそうである。また、ドイツでは、壮大な《死の勝利》や《ダンス・マカブル》のような、ペストへの脅威の感情から直接うまれた一群の傑作があり、また、それに関して優れた研究がある<sup>(6)</sup>。イタリアの場合、ヴェネツィアは史料が豊富に存在しているように思われる。ヴェネツィアは、そのはじめじめした不衛生な風土からしばしばペストの温床となったので——トーマス・マンも『ヴェニスに死す』でコレラの蔓延するこの町を描写している——ペストを語らずしてヴェネツィアの歴史は語れないであろう<sup>(7)</sup>。ヴェネツィアの芸術と宗教を代表するサン・ロッコの大信心会は、ペスト除けを祈願した信心会である。また、サン・セバステイアヌスも同じようにペスト除けの聖人であるが、私はこの町に、この聖人に祈願した美術作品を探してみたが、何と二五点も見つけることができた<sup>(8)</sup>。ヴェネツィアの歴史において、ペストは、それが猛威を振るわなかった時でも、ペストの脅威の意識は人びとのこころのなかで、通奏低音のようにつと不気味に鳴り響いていた。今もカナル・グランデ（大運河）から見える教会にはペ

スト除けを祈願したものもある。パツラーディオもその関係の建築物を残している（レデントーレ教会）。また、ヴェネツィア以外の場合、たとえばピストイアについては、ハーリヒーのほか、コムーネによるシリーズの研究がある<sup>(9)</sup>。オルヴィエートについては、カルパンティエの優れた研究がある<sup>(10)</sup>。イタリアについては、ベネディクトーが地域研究の成果を言及していない南イタリアでも若干の成果があり<sup>(11)</sup>、今後の関心が高まることが期待される。おそらく東欧も同様であろう。

ベネディクトーが示した歴史人口学の手法を今後他の地域に応用発展させて黒死病の実態がいっそう広く把握されることが期待できる。イスラーム世界（マムルーク朝）も従来から死亡率「三分の一説」で通っているようだが、これを機に再点検されるかもしれない。

いずれにしてもヨーロッパ全体の死亡率の特定となると、やはりひとりの研究者では力の限界がある。共同研究を組織していくことで対処すべきであろう。そうすれば、それを機に新しい史料の発見の可能性もまた高まることであろう。

## （二）「標準想定」の想定の問題

ベネディクトーが、人口把握において一種の「てこ」として応用する「標準想定」standard assumption は、検証されるべき課題である。今後、それが正当に想定しうるものか、想定しうるならば、地域の実態をいっそう精緻に把握してきめ細かい基準を設定していくべきであろう。たとえば、「世帯規模」などの場合、黒死病前の世帯規模にせよ、以後の「縮小化」された世帯規模にせよ、アルプスの北と南、山間部と地中海沿岸地域、その他の地理的、文化的状

黒死病でどれだけの人が死んだか

## 黒死病でどれだけの人々が死んだか

況によってかなり差が出ると思われる。一律に同じ設定ではなく、事例を数多く集積し、そこからいくつもの類型を設けてそれによって対応すべきであるように思われる。おそらくこれについて、今後よりきめ細かい「標準想定」を提起する研究者があらわれることだろう。また、中世において「都市」と「農村」の違いは微妙である。ベネディクトーが総人口を見積もる場合、その共同体を「都市」と認定するか、「農村」と認定するかによって、世帯規模の基準が大きく異なり、総人口の人数の算出にもかなりの違いをもたらす。一四世紀のトスカナ地方のような都市の性格の非常に高い地域と、アルプスの北の地域のそれほど「都市」の性格の強くない「都市」とでは、かなりの差がでてくるだろう。この意味からも、地域によって精緻な基準が設定されるべきであろう。

また、彼がいつも遠慮がちに、控えめに提起する、黒死病後の「世帯の縮小」（各世帯「〇・五人」分減少）が妥当なのか、一律にそのように扱えるものなのか、もっと遠慮なく差し引くべきなのか、数多くの事例の集積が鍵となるだろう。

ピストイアの公証人セル・パオロの記録を利用したリーヴィ・バッチによると、ピストイアのサン・ヴィターレ教区の黒死病による世帯の縮小の度合いがわかる<sup>12)</sup>。それによると、一三七八年の疫病で死者を出した家は「一一〇戸」であった。疫病によって、ひとりの死者を出した家族が「四二パーセント」、二人の死者を出した家族が「三五パーセント」、三人の死者を出した家族が「二五パーセント」、四人の死者を出した家族が「四パーセント」、五人の死者を出した家族が「一パーセント」、六人が「二パーセント」であった（残念ながらこの教区のすべての家族の数が不明であるが、おそらくほとんどの世帯に死者が出たであろう）。これによると、世帯の縮小率は「〇・五人」ところのものではなかったであろう。こうした疑問は、黒死病直後の「農村から都市への移動率」や「結婚ラッシュ」

についてもいえることである。特に重大なのが、「見えざる貧民」の存在の割合である。彼らがその都市や村にどの程度存在したかとなると、地域によってかなり差がでるように思われる。それを一律「五〇六パーセント」にするのは、まだ大きな疑問と課題を残しているように思われる。

### 第三節 評価

ベネディクトーはヨーロッパで「八千万人」のうち「五千万人」が疫病死したとして、ヨーロッパの黒死病死亡率をほぼ「六〇パーセント」と見る。そして、それもほぼ万遍なくどの地域にも同じように被害をもたらしたと見る。彼がおこなった史料の検討・考察の展開を見ると、彼が提示したこの死亡率は、恣意的な操作さえなければ、考え方の基本はおおむね賛同できる。実際、病気としての同時期の黒死病が、細菌学的に、病理学的に当時の人間にほぼ同じレベルで作用したということはありそうなことである。私としては、標準想定の不確立性、未知の地域（特に東欧）の不確定性を考慮して、若干修正して、「西ヨーロッパの死亡率」として「五〇〜六〇パーセント」として採用したい（しかし今後の研究次第で「六〇パーセント」を越える可能性がないとは言えない）。

ベネディクトーがこのような、衝撃的な高い死亡率の学説を打出せたのは、ひとつに、一般の人びとの平均的な死亡率は、決して聖職者の死亡率を越えることはないはずだという先入観を見事に打破したこと、また、ひとつに従来の死亡率が「納税者死亡率」にとどまっていたことを見事に看破したことによるものである。「納税者死亡率」はあくまで「世帯主死亡率」であって、幼児や子どもを含んだ家族全体を考えると、死亡率は高まる。そこでは一家につき「〇・五人」の減少が想定されるという。たとえば、黒死病前に「一〇〇世帯」あった村が、黒死病直後に「五〇

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

世帯」減少した場合、総人口死亡率は「五〇パーセント」ではない。黒死病前は農村の平均世帯数は標準想定によって「四・五人」であったので、総人口は「四五〇人」である。一方、黒死病後においては、世帯規模は、「〇・五人」が減少したので、「四・〇人」である。したがって、総人口は、「二二〇人」となる。「四五〇人」が「二二〇人」に減少したということは、全体の死亡率は「五五・六パーセント」となる。さらに「五・六パーセント」の登録もれの最下層の貧民がいて、彼らの半数が死んだと考え（いや、実際には彼らの劣悪な生活環境からさらに「一〇パーセント」高い死亡率を見てもよいという）、本来の全体の死亡率に「二・五ポイント」を加えて総死亡率は「五八パーセント」にまで達するという次第である。

この死亡率の算定の仕方にもとづく、さらに標準想定等をよりいっそう精緻なものにすることで、黒死病の死亡率の研究は新しい展望が開けることだろう。

ベネディクトーの著書が出版されたのが二〇〇四年であるが、その三年前の『疫病百科事典』（G・C・コーン監修）では、「四分の一から三分の一」という死亡率が明示されていた。ところが、ベネディクトーの著書が出て四年後の二〇〇八年に出版された大部の二巻本の『疫病・パンデミック・ペスト百科事典』（J・P・バーン監修）では、ベネディクトーの学説が影響したのかどうかはわからないが（参考文献に挙げられているのでおそらく影響を与えたのであろう）、こう書かれている――

様々な地域研究に携わっている歴史家は、総人口死亡率を見積もる努力を続けている。その推定では、現在のところ、死亡率は黒死病が流行した地域の「四五パーセント」から「六〇パーセント」の間にあると考えられている<sup>13)</sup>。



このように見ると、そろそろ日本の高等学校の世界史の教科書も、「三分の一説」から脱却すべきである。私は「西ヨーロッパの死亡率」は「五〇～六〇パーセント」と主張したいが、少なくともこの事典のいう程度のレベル、すなわちシンプルに表現して「約二分の一」の死亡率に改めるべきところに来ているといえるだろう。そうでもしなければ、無惨にも黒死病で死んだものの、その死が認められていない大量の人たち（約一六〇〇万人）は決して「浮かばれない」だろう<sup>14)</sup>。

# 注

- (1) 石坂史料集（三）第一章「ジョヴァンニ・ダ・バルマの『年代記』——トレントを襲った四回の疫病について——」一九七頁。
- (2) "Il "Libro dei Morti" di Santa Maria Novella (1290-1436)", a cura di C. C. Calzolari, *Memorie Dominicane*, ns XI (1980) : 15-218. 石坂史料集（七）第二章「サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の『死者台帳』より」。
- (3) A. Carmichael, 37-38.
- (4) K・ベルクドルト（宮原啓子・渡邊芳子訳）『ヨーロッパの黒死病——大ペストと中世ヨーロッパの終焉』国文社 一九九七年。
- (5) Gottfried, 68.
- (6) E. Brecht, *Studien zu den lateinischen und deutschsprachlichen Totentanztexten des 13. bis 17. Jahrhunderts*, Halle, 1931.
- (7) 永井三明『ヴェネツィア貴族の世界 社会と意識』刀水書房 一九九四年 二二二～二二三頁。
- (8) 拙稿「黒死病除け絵画「聖セバスティアヌス像」の様式分析序説——三〇〇点のセバスティアヌス像の点検項目——『文化史学』第五八号 二〇〇二年 一一一～一三四頁。同「イタリアの聖セバスティアヌス像」の所蔵状況一覧」『文化学年報』第五二輯 二〇〇三年 一～二九頁。同（調査報告）「イタリアの教会におけるセバスティアヌス像の分布状況」『文化史学』第五八号 二九三～三二三頁。同「イタリアにおけるペストの発生とセバスティアヌス像との相関」『人文学』第一七

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

五号 二〇〇四年 二八～四九頁。同(調査報告)「イタリアにおけるセバステリアヌス像の制作年代順一覧」『人文学』第一七五号 二〇〇四年 五〇～八一頁。同(調査報告)「イタリアの大聖堂におけるセバステリアヌス像の所蔵状況―第一回アンケート―」『文化史学』第一七五号 二〇〇四年 一九三～二〇三頁。同「イタリアの美術館における「イタリアのセバステリアヌス像」の所蔵状況の報告」『人文学』第一七七号 二〇〇五年 二三～三九頁。同(調査報告)「イタリアの大聖堂におけるセバステリアヌス像の所蔵状況―第二回アンケート―」『文化史学』第一七五号 二〇〇七年 一五五～一七〇。

(9) A. Cipriani, *A peste, fame, et bello, libera nos, Domine. Le pestilenze del 1348 e del 1400*, Pistoia, 1990; E. Cotorri, *Pestilenze e pandemie a Pistoia fine all'era dei lumi*, Pistoia, 1990; A. I. Pini, *La società italiana prima e dopo la «peste nera»*, Pistoia, 1981.

(10) E. Carpanter, *Une ville devant la peste. Orvieto et la peste noire de 1348*, Paris, 1962.

(11) L. Capasso, A. Capelli, *Le epidemie dei peste in Abruzzo dal 1348 al 1702*, Abruzzo, 1993.

(12) A. Cipriani, 9.

(13) *Encyclopedia of Pestilence, Pandemics, and Plague*, ed. by J. P. Byrne, London, 2008, vol.1, 56.

(14) 最後に「ベネディクトーの学説が学界でどう評価されているか触れておこう。歴史雑誌『スペクトルム——中世研究ジャーナル——』(二〇〇六年)の書評において次のように書かれている。やはりここでも「標準想定」の想定が問題にされているのである。

ベネディクトーの推定では、ペストの結果、六千万人「これは「五千万人」の誤解か。石坂」近い人びとが死んだという。これはすなわち、流行した地域の人口の六〇パーセントにあたる。この数値は、ほかの研究者によってよくあげられる「三分の一」よりもかなり高い割合である。こうした数値は、彼が説得力をもって論じているにもかかわらず、歴史家からも、また微生物学者からも論議され続けることになるであろう。たいていの中世の人口研究がそうなのだが、彼の結論についても、わずかな一次史料の証拠しかない基盤においては、それも特にわずかな人口集団のサンプルにもとづいている場合においては、信頼できる結論を引き出すのはしばしば困難であるので、あくまで試論の域に留まらざるを得ないのである。ベネディクトーは、農村部で四・五人、都市部で四・〇人の平均世帯規模を仮定し、黒死病後に、それがそれぞれ四・〇人、三・五人に減少するという。また、貧民の死亡率は財産をもつ階層の死亡率よりも相当

高かったという。こうした事柄は、筋は通っているが、それでも推論にすぎない結論である (M. Goodich, "Reviews 146", in *Speculum. A Journal of Medieval Studies*, vol.81, 2006, 146.)。

なお、この書評ではベネディクトーのタイトルに関わって難をつけているが、これは当たらない。これは、ベネディクトーがヨーロッパでの黒死病の波及とその死亡率の問題に絞ってそれだけで大部の著作を著したことへの理解に欠くものである。以下のように述べられている―「ディクトーはベストの人口学的側面についてのみ焦点を据えている。その結果、ほかの著作ではしばしば中心的な舞台を占める派生的なテーマはほとんど論じられない。だから、「完全な歴史」を表わそうというこの著作の主張は不当なものとなっている。視覚芸術や文学に対するベストの衝撃はその最も明らかな副産物であるが、それが見過<sup>り</sup>されてゐる」(p.147)。

#### 付録(略記の明細)

本文や注で「石坂史料集」と略記したものは以下のとおりである。これは石坂が『人文学』(同志社大学文学部)に掲載したのであり、以下の頁数は「解説・考察」を含む。

イタリアの黒死病関係史料集(一) 第一七四号 二〇〇三年 一二頁～七三頁

第一章 モレツリ『回想録』より―あるフィレンツェ商人の考える疫病対策と健康法―

第二章 トンマゾ・デル・ガルボ『疫病に対処するための勧告』(一三四八年)より

第三章 シエナの年代記作家アーニョロ・ディ・トゥーラの年代記―一三四八年の記述―

第四章 ジョヴァンニ・ヴィツラーニ著『フィレンツェ年代記』第一二巻第八章

―フィレンツェへの疫病の到来―

第五章 ビストイアの年代記作家ルーカ・ドミニチの『年代記』より―贖罪の訴え―

第六章 サン・ジミニャーノのポーポロ協議会とその他の機関による一四六二年と一四六四年の決議文

―疫病を逃れるために聖セバスティアヌスの絵画の制作を決議する―

〔一〕一四六二年二月二〇日の決議文

黒死病でどれだけの人々が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

〔二〕一四六二年二月三日の「プリオーリ・デル・ポーポロ」と「ゲルフ党カピターニ」の決議文

〔三〕一四六二年（または一四六三年）一月四日の「ポーポロ協議会」の決議文

〔四〕一四六二年一月一日の「プリオーリ」と「ゲルフ党カピターニ」による決議文

〔五〕・〔六〕一四六四年六月一九日の「プリオーリ・デル・ポーポロ」と「カピターニ」と「ゲルフ党旗手」による決議

# イタリアの黒死病関係史料集（二） 第一七六号 二〇〇四年 二六頁～八三頁 第七章

第七章 ビストイアの疫病条例―疫病時の衛生法―

第八章 ラニエーリ・サルドの『ピサ年代記』より―一三四八年の疫病について―

第九章 マルキオンネの『フィレンツェ年代記』より―一三四八年の疫病について―

第一〇章 疫病で死んだ友人について―ペトラルカ『近親書簡集』より―

第十一章 サン・ジミニャーノにおける《聖セバスティアヌス像》の制作をめぐる関係史料

〔七〕一四六四年七月二八日に關して（一七四六年の裏付け史料より）

〔八〕一四六四年または一四六五年一月二四日の「プリオーレ」諸氏と正義の旗手の決議

〔九〕一四六四年または一四六五年一月二四日の史料

〔一〇〕一四六四年または一四六五年二月二五日の「プリオーレ」諸氏と「ゲルフ党カピターノ」諸氏その他による決定

〔一一〕一四六五年九月二〇日の記録、聖セバスティアヌスの絵画の制作費四一リラの支払い

〔一二〕一四六五年一月二六日のコムーネからベノッツォへの支払い方法について

〔一三〕一四六五年または一四六六年二月六日のビエーヴェ教会建物管理部の記録

ベノッツォ親方への二〇リラー〇ソルドの金の支払い

〔一四〕一四六六年六月一六日のビエーヴェ教会建物管理部の記録

ベノッツォ親方への一〇ソルドの金の支払い

イタリヤの黒死病関係史料集（三） 第一七九号 二〇〇六年 一三九～一三六頁

第二章 ペトラルカ『老年書簡集』より―我々の時代を襲う災難について―

第三章 ムッシスの『疫病の歴史』

第四章 シチリアを襲った疫病―ミケーレ・ダ・ピアッツァ『シチリア年代記』より―

第五章 ジョヴァンニ・ダ・パルマの『年代記』―トレントを襲った四回の疫病について―

第六章 アヴィニヨンを襲った疫病―アヴィニオン教皇庁勤務のカントルの書簡―

第七章 井戸に毒を入れたサヴォイアのユダヤ人の尋問調書―サヴォイア執行吏によるシュトラースブルク市宛の報告書簡（一）

三四八年末）―

〔一〕サヴォイア執行吏による報告書簡の前書き

〔二〕一三四八年五月になされた五人のユダヤ人の自白

（i）ユダヤ人外科医ベラヴィニの自白

（ii）ヴィルヌーヴのユダヤ人バンデイトンの自白

（iii）ヴィルヌーヴのユダヤ人のマンソンの自白

（iv）ユダヤ人アクエトウスの妻ベリエータの自白

（v）ユダヤ人女性ベリエータの息子アクエトウスの自白

〔三〕一三四八年一〇月になされた五人のユダヤ人の自白

（i）ユダヤ人アジメトウスの自白

（ii）シャテルのユダヤ人ヨチエトウスの自白

（iii）ユダヤ人イコネトウスの自白

（iv）ヴァーレンボン生まれのユダヤ人アクエトウス・ルビの自白

（v）ユダヤ人ヨケトウスの息子アクエトウスの自白

〔四〕報告書簡の結びのことば

黒死病でどれだけの人が死んだか

黒死病でどれだけの人が死んだか

イタリアの黒死病関係史料集(四) 第一八〇号 二〇〇七年 一三五～一七六頁

第一章 フィレンツェ書記官長サルターティの疫病論『都市からの逃亡について』(一三八三年)

イタリアの黒死病関係史料集(五) 第一八一号 二〇〇七年 九七～一四七頁

第一章 ルーカ・ランドウツチの『フィレンツェ日記』より

イタリアの黒死病関係史料集(六) 第一八二号 二〇〇八年 八七～一四四頁

第二〇章 葬儀費用抑制のための条例(一四七三年)——フィレンツェの奢侈禁止令(葬儀関係)——

第二章 比較参考史料 イタリア以外の地域の黒死病 その一

〔一〕『アヴェスベリーのロバートの年代記』より——一三四八年のイングランドの疫病——

〔二〕サン・ドニ修道士の『フランス大年代記』より——一三四八年のフランスの疫病とその後の社会——

〔三〕『ジャン・ドウ・ベネットのフランス年代記』より——一三四八年のフランスの疫病とその後の社会——

イタリアの黒死病関係史料集(七) 第一八四号 二〇〇九年 二五～一八九頁

第二章 サンタ・マリア・ノヴェツァ聖堂の『死者台帳』より——ペスト死の傾向の数量的アプローチ——

イタリアの黒死病関係史料集(八) 第一八六号 二〇一〇年 一九三～三一五頁

第二章 大規模ペストを生き抜いたブラートの商人ダティーニの「遺言書」——キリスト教徒のペストへの反応からその心性を探る——

イタリアの黒死病関係史料集(九) 第一八七号 二〇一一年 一四七～二二二頁

第二章 大規模ペスト期における家族の疫病死——モレッリ『リコルデイ』より——